

磐城山遺跡（第6・7次）発掘調査報告書

—農地改良工事に伴う緊急発掘調査—

2015年12月

鈴鹿市考古博物館

序

三重県鈴鹿市の北部を流れる鈴鹿川の流域には、縄文時代から中世に至るまで、多くの遺跡が存在しています。三重県は、地理的な要因から、東西の文物が交錯し、時代ごとに様々な様相を呈しています。

ここに報告する鈴鹿市河曲地区は、古代の河曲郡に相当します。壬申の乱の際に、大海人皇子（天武天皇）が通過した、「川曲の坂下」の有力な候補地でもあります。また、天皇家に采女を献上している、古代豪族大鹿氏の本貫地ともされています。後に、伊勢国国分寺が建立され、河曲駅家が整備されるなど、交通の要衝として栄えた地域です。

磐城山遺跡の発掘調査では、古代を遡る弥生時代や古墳時代の文物が多く確認されました。これらの貴重な資料をもとに、鈴鹿市の歴史とその意義を発信し、豊かな地域社会の形成に少しでも貢献できれば幸いです。

発掘調査にあたっては、地元木田町自治会、河曲地区をはじめとし、市民の皆さま、三重県教育委員会等から多大なご協力とともに、暖かいご支援をいただきました。文末となりましたが、皆さまのご誠意ある対応に、心から御礼申し上げます。

平成 27 年 12 月

鈴鹿市考古博物館

館長 澤井 環

例 言

1. 本書は、三重県鈴鹿市木田町字上條所在の磐城山遺跡第6次・第7次の発掘調査に係る報告書である。
2. 調査は、平成25年度及び平成26年度に行った農地改良工事に伴う記録保存の緊急発掘調査である。
3. 発掘調査は以下の体制で実施した。

(平成25年度;第6次調査時)

調査担当	鈴鹿市 文化振興部 考古博物館 埋蔵文化財G
組織及び構成	鈴鹿市考古博物館 館長 兼丸まり子
	埋蔵文化財G L 藤原 秀樹
	埋蔵文化財G 服部 真佳
	田部 剛士 (※現地調査担当)
	吉田 隆史
	米川 梨香
	吉田真由美
	小川 陽子

(平成26年度;第7次調査時)

調査担当	鈴鹿市 文化振興部 考古博物館 埋蔵文化財G
組織及び構成	鈴鹿市考古博物館 館長 澤井 環
	埋蔵文化財G L 藤原 秀樹
	埋蔵文化財G 西村 浩
	服部 真佳
	田部 剛士 (※現地調査担当)
	吉田 隆史
	木下之侑市
	吉田真由美
	小川 陽子

4. 現地調査に係る発掘費用は各年度の国庫補助金で負担し、報告書の印刷製本費は平成27年度の国庫補助金で執行した。
5. 本書の作成及び編集は、考古博物館埋蔵文化財グループの田部が行った。
6. Fig.3では国土地理院発行1:25,000地形図鈴鹿の一部を使用した。
7. 本調査に係る遺物・図面・写真は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。
8. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の各氏から有益なご教示等をいただいている。記して感謝いたしたい。
伊藤久嗣・伊藤 洋・竹内英昭・石井智大・川部浩司・早野浩二

(敬称略・順不同)

本文目次

第I章 はじめに	3	土坑	24
1 調査の契機	1	4 溝	28
2 調査の経過	1	第V章 出土遺物	
第II章 位置と環境		1 竪穴住居	31
1 地理的環境	5	2 土坑	43
2 歴史的環境	6	3 溝	43
第III章 調査の方法		4 掘立柱建物	46
1 調査区	8	5 単独ピット	48
2 地区割り	9	6 その他の出土遺物	48
3 遺構番号	9	第VI章 調査の成果	
4 基本層序	9	1 弥生時代後期の集落について	60
第IV章 検出遺構		2 古墳時代後期の集落について	60
1 竪穴住居・土坑	13	3 古代について	60
2 掘立柱建物	24	4 中世城館に係る遺構	60

表目次

Tab.1 磐城山遺跡の発掘調査履歴	3	報告書抄録	95
Tab.2 遺物観察表	48-59		

図版目次

Fig.1 鈴鹿市の位置	5	Fig.19 SH0718・SH0721/22・SH0728・SH0731/32・SH0733/34/35/42・SH0688 平面図	21
Fig.2 鈴鹿市の地質	6	Fig.20 SH0708/09・SH0673/74/77・SH0678 平面図	22
Fig.3 遺跡の位置	7	Fig.21 SH0788-99 平面図	23
Fig.4 調査区の地区割り	8	Fig.22 SB0636 平面・断面図	24
Fig.5 第6・7次調査区遺構配置図	10	Fig.23 SB0724 平面・断面図	24
Fig.6 第1-7次調査区遺構配置図	11・12	Fig.24 SK0621・SK0626 平面・断面図	25
Fig.7 SH0601 平面図	13	Fig.25 SK0664 平面・断面図	25
Fig.8 SH0619 平面図	13	Fig.26 SK0639 平面・断面図	26
Fig.9 SH0602/03/06/07/22/99 平面・断面図	14	Fig.27 SK0639 礫出土状況図	26
Fig.10 SH0631-34/47 平面・断面図	15	Fig.28 古代・中世の遺構配置図	27
Fig.11 SH0640-46 平面図	16	Fig.29 竪穴住居に付属する排水溝等の平面図	29
Fig.12 SH0778・79 平面・断面図	16	Fig.30 SH0601・SH0619 出土遺物	31
Fig.13 SH0753/54 平面図	17	Fig.31 SH0603/99・SH0602・SH0606・SH0607 出土遺物	32
Fig.14 SH0759/67/75 平面図	17	Fig.32 SH0622 出土遺物①	33
Fig.15 SH0751/52・SH0766・SH0768 平面図	18	Fig.33 SH0622 出土遺物②	34
Fig.16 SH0729・SH0727/30/36/38 平面図	19		
Fig.17 SH0710・SH0711・SB0724 平面図	20		
Fig.18 SH0760 平面図	20		

Fig.34	SH0633/34/47 出土遺物	35
Fig.35	SH0631/32・SH0640・SH0641-46 出土遺物	36
Fig.36	SH0779・SH0778 出土遺物	36
Fig.37	SH0753/0613/0754/0608 出土遺物	37
Fig.38	SH0757/59/67/75 出土遺物	37
Fig.39	SH0750・SH0751/52・SH0766・SH0768 出土遺物①	38
Fig.40	SH0750・SH0751/52・SH0766・SH0768 出土遺物②	39
Fig.41	SH0727/30・SH0729・SH0760 出土遺物	40
Fig.42	SH0710/11 出土遺物	40

Fig.43	SH0718/37・SH0733-35/28/21 出土遺物	41
Fig.44	SH0688・SH0674/77・SH0709 出土遺物	42
Fig.45	SH0707・SH0706・SH0790-93 出土遺物	42
Fig.46	SH0784/100 出土遺物	42
Fig.47	SK0621・SX0782・SK0626・SK0704・SK0726・SK0639 出土遺物	44
Fig.48	SD0749 出土遺物	45
Fig.49	その他の溝の出土遺物	47
Fig.50	単独ピット出土遺物	46
Fig.51	その他の出土遺物	48
Fig.52	山中式から廻間式期の集落の変遷	61

写真図版目次

PL.1	磐城山遺跡航空写真・第6次調査東区完掘	64
PL.2	第6次調査南西区完掘・第6次調査区西区完掘	65
PL.3	第7次調査北区完掘・第7次調査東区完掘	66
PL.4	第7次調査中区完掘①・第7次調査中区完掘②	67
PL.5	SH0603/99 完掘・SH0633/47 完掘	68
PL.6	SH0622 完掘・SH0635/31 完掘	69
PL.7	SK0621 掘削風景・SK0621 完掘・SB0636 検出状況・SB0636 完掘・SK0639 上段礫検出状況・SK0639 下段礫検出状況・SK0639 礫の出土状況・SD0637 完掘	70
PL.8	SH0757/59/75 完掘①・SH0757/59/75 完掘②	71
PL.9	SH0751/52・SH0766・SH0768 完掘①・SH0751/52・SH0766・SH0768 完掘②	72
PL.10	SH0729 完掘・SH0727/30/36/38 完掘	73
PL.11	SH0760 完掘・SH0710 完掘	74
PL.12	SH0721/22・SH0728・SH0731/32・SH0733/34/35/42 完掘①・SH0721/22・SH0728・SH0731/32・SH0733/34/35/42 完掘②	75
PL.13	SH0733/34/35/42 完掘・SH0673/74/77・SH0708/09 完掘	76
PL.14	SH0707/88 完掘・SH0708/09 完掘	77
PL.15	SH0790-92 完掘・SH0707/88・SH0790-92 完掘・SD0777 検出状況・SD0777 完掘	78
PL.16	SD0749 土器及び礫の出土状況・SB0724 完掘	79
PL.17	SH0603 南辺周壁溝出土遺物・SH0606 西辺周	

	壁溝・SH0622 作業風景・SH0622 床面直上出土遺物・SH0622 出土器台・SH0622 出土高杯・壺・SH0622 出土壺・SH0622 出土高杯	80
PL.18	P06400(SH0633/47 南西主柱穴) 出土遺物・SH0633 東辺周壁溝出土遺物・SH0608 出土遺物・SH0759 出土遺物・SH0767 出土遺物・SH0751/52 出土遺物・SH0766 南辺周壁溝出土遺物・P07240(SH0710 南辺中央土坑) 出土遺物	81
PL.19	SH0728 南辺周壁溝出土遺物・SH0735 南辺中央土坑出土遺物・SH0784/100 出土遺物・SH0718 出土遺物・SD0637 掘削風景・SD0637 出土遺物・SD0637 出土壺①・SD0637 出土壺②	82
PL.20	SD0713 出土遺物・SD0758 出土遺物・SD0625 出土遺物・SD0749 出土遺物・SK0621 出土遺物・SK0626 出土遺物・平成25年度の職場体験風景・発掘体験の様子	83
PL.21	出土遺物(報告番号1-40)	84
PL.22	出土遺物(報告番号41-60)	85
PL.23	出土遺物(報告番号61-90)	86
PL.24	出土遺物(報告番号91-133)	87
PL.25	出土遺物(報告番号135-172)	88
PL.26	出土遺物(報告番号173-209)	89
PL.27	出土遺物(報告番号210-240)	90
PL.28	出土遺物(報告番号245-277)	91
PL.29	出土遺物(報告番号281-320)	92
PL.30	出土遺物(報告番号321-343)	93
PL.31	出土遺物(報告番号344-346)・第6・7次発掘調査区全景	94

第 I 章 はじめに

1 調査の契機

平成 21 年度に、木田町地内で山上の畑を道路面まで床下げしたいとの協議があった。その範囲は磐城山遺跡に該当し、過去に発掘調査された隣接地でもあった。そのため、文化財保護法第 93 条による届出を求め、遺跡保護の協議を行った。その結果、農地改良の工事はやむを得ず、事前に発掘調査を行って記録を残すこととなった。ただし、届出された面積はのべ 5,000 m²以上にわたり、単年度の対応が不可能であった。そこで、発掘調査は毎年数 100 m²ずつ行うこととし、調査の完了した範囲から工事に着手する工程で進めることになった。平成 21 年度の第 3 次調査から継続し、現在も発掘調査は継続中である。

発掘調査は、過去 5 回（三重県埋蔵文化財センターの調査を加えると 6 回）にわたって行われている (Tab.1)。なお、第 1 次及び第 2 次調査は概要が報告されており(杉立 1998, 岡田 2000)、第 3 次調査及び第 4・5 次の調査結果は本報告したので(田部 2011, 2014)、本書はその後の平成 25 年度及び 26 年度の第 6 次と第 7 次調査の成果について正式に報告する。

第 6 次の発掘調査は、平成 25 年 8 月 5 日から 12 月 24 日までの約 4.5 ヶ月間と翌年 3 月に第 6-2 次として 1 ヶ月間行った。第 7 次調査は、平成 26 年 4 月 2 日から 8 月 22 日までの約 4.5 ヶ月間である。なお、調査面積は第 6 次が約 325 m²で、第 7 次が約 650 m²、合計 975 m²である。作業は既に重機にて表土を除去してあったので、発掘作業員 7～8 名/日によって遺構の検出と掘削を繰り返して行った。

遺構の遺存状況は第 6 次調査区で良好で、深い所で検出面からの深さ（以下、GL-○cm と表記する）が 50～60 cm あった。そのため、第 6 次調査区では面積の割に調査に手間取ることとなった。反対に、第 7 次調査区の北側では検出面から数 cm 程度と浅くなり、調査面積を稼げる要因となった。以下、調査日誌を抄録することで、調査の経過とする。

2 調査の経過

調査の経緯や概要については既刊の概要報告があるが(田部 2014・2015)、以下調査日誌を抄録することで調査の経過に替える。

【調査日誌抄】

第 6 次調査(325 m²; 1 期 平成 25 年 8 月 5 日～12 月 24 日、2 期 平成 26 年 3 月 6 日～3 月 25 日)

8 月 5 日 発掘調査の地区割り等の計画を行う。
8 月 6 日 発掘用具準備、搬入。
8 月 7 日 発掘調査区準備。草刈等の作業を行う。
8 月 8 日 発掘用具追加で搬入する。
8 月 9 日～18 日 盆休み。
8 月 19 日 体験発掘調査の準備。グリッド設定。
8 月 20 日 調査区内水撒き。東区現代の地割溝の掘削に着手。略測図作成。
8 月 21 日 体験発掘実施。午前 28 名、午後 8 名、都合 36 名の参加あり。東区の南東隅から遺構検出を開始する。
8 月 22 日 検出作業継続。SH0601,SH06022 掘削開始。CY43～DB45 区一段下げを開始。
8 月 23 日 終日休業。
8 月 26 日 中世の区画溝 SD0604 掘削。SH0601 完掘。SH0603 掘削着手。南東隅からピットの掘削に着手する。
8 月 27 日 SD0604 掘削完了。SH0605,SH0609,SH0610 掘削。SH09→SH05→SH10 と新しくなることを確認する。SH0606 掘削継続。SH0608 掘削着手。須恵器が出土し、古墳時代の竪穴住居となることを確認。
8 月 28 日 終日休業。
8 月 29 日 SH0608 掘削継続。SH0612/13 が重複していることを確認する。SH0607 として認識していたものと別に、SH0614/15 があることを確認する。その結果、SH07→SH06→SH14/15 と新しくなる。東区略測図作成。
8 月 30 日 SH0603 周辺の攪乱溝掘削。SH0610 掘削後、SH0617 埋土の掘削に着手。SD0618 掘削開始。光波による遺物取り上げ実施。
9 月 2 日～9 月 6 日 降雨及び都合のため休業。
9 月 9 日 SH0620 掘削着手。SH0611 掘削開始。
9 月 10 日 終日休業。
9 月 11 日 SK0621 掘削着手。SH0606/05/09 完掘後、SH0609/17 掘削着手。SH0603/06 等掘削継続。SH03→SH06、SH05→SH17→SH10 と新しくなることを認識する。
9 月 12 日 SK0621 掘削継続。GL-60cm まで深く落ち込むようで、井戸かと推定する。中位に拳大から人頭大の礫が集中して出土する。SH0609/17 掘削完了。SH0622 掘削完了。SH0624 掘削。
9 月 17 日～10 月 15 日 台風、降雨等のため休業。
10 月 16 日 水抜き作業実施。
10 月 17 日 SH0603,SH0623,SH0609/17 等の掘削を再開。SK0626 掘削完了。SH0622 上半掘削完了。SK0621 は GL-70 cm で基底面を確認し、井戸でなく土坑墓であったと理解し直す。

10月18日 SH0610 掘削完了。SH0627 検出, 掘削着手。SH0622 の下半分の掘削に着手。床面直上にて弥生時代中期末から後期の遺物が良好な状態で出土する。

10月21日 水抜き。SH0622 内ピット及び周壁溝を掘削。南辺中央の土坑が残る。SH0622 出土遺物取り上げ。全体清掃後, 各種完掘遺構の写真撮影を実施する。南西区検出開始。

10月23～25日 台風接近のため休業。

10月28日 水抜き。南西区検出作業完了後, 現代の地割溝から掘削に着手する。東区の平面図作成。

10月29日 SH0633,SH0635,SK0639 掘削着手。現代の地割溝を全て完掘する。

10月30日 東区平面図作成。

10月31日 SH0633 掘削継続。西辺にて2条の周壁溝を確認し, 下の住居址をSH0641とする。SH0634 完掘。SH0635 掘削継続。SK0639 掘削継続。礫が多く出土し, SK0621 と同質の遺構だと理解する。東区の平面図継続。

11月1日 SH0633,SH0635,SK0639 掘削継続。東区の平面図継続。

11月5日 SH0631,SH0641 掘削継続。各種ピットの掘削。東区の平面図継続。

11月6日 SH0632,SH0633/34 掘削継続。SH0641 やSH0642,SH0643,SH0645 掘削着手。SD0637 は北端で暗渠状となることを確認する。

11月7日 水抜き。

11月8日 水抜き。神戸中学校職場体験でSD0637 の南半を掘削。良好な弥生土器壺が出土する。

11月11日 SD0637 完掘。SH0640 周壁溝及び, 周辺のピットを掘削する。SK0639 の出土礫の出土状況の写真撮影及び図化。

11月12日 概ね南西区内のピットの掘削が完了する。SK0639 礫撤去するも下部からさらに礫が出土。継続して調査する。西区グリッド設定。

11月13日 南西区全体清掃後, 各種完掘遺構の写真撮影。SK0639 下部の礫出土状況の図化。西区検出作業及び略測図作成開始。

11月14日 南西区平面図作成開始。

11月15日 休業。

11月18日 西区検出作業終了後, 写真撮影。北東からピットの掘削に着手。SH0651 掘削開始。南西区平面図継続。

11月19日 SH0651 掘削継続。SH0652, SH0653 掘削開始。南西区から延長するSH0631,SH0633 を掘削する。南西区平面図継続。

11月20日 南西区平面図継続。

11月21日 SH0651 完掘。SH0631/33 掘削継続。SH0654 認定後, 掘削に着手。南西区平面図継続。

11月22日 SH0655 認定後, 掘削開始。SH0654 埋土完掘

後,SD0653 掘削。単独ピット等掘削。SH0631/33 内のピットも掘削開始。SH33/47 → SH31, SH54 → SH53 と新しくなることを確認する。

11月25日 終日休業。

11月26日 SH0651,SH0654,SH0655 内ピット掘削開始。SH0633 の壁側が大きく開くことを確認する。SH0657,SH0658 認定後, 掘削開始。南西区平面図継続。

11月27日 SH0659～61 までを認定し, 掘削に着手する。SH0633/47,SH0631,SH0654 内ピット掘削継続。

11月28日 SH0662/63 認定後, 掘削開始。SH0633/47,SH0631,SH0659-61,SH0654 内ピット等掘削完了。SK0639 の3段目の礫の出土状況を記録。

11月29日 南西区SK0639ベルト撤去開始。SH0657/58完掘。SK0664 認定後, 掘削開始。

12月2日 終日休業。

12月3日 西区のピットの残りを掘削。SH0665 認定。

12月4日 西区全体清掃後, 各種完掘遺構の写真撮影実施。SB0636 の礫をレベリング後, 撤去しながら掘削する。SK0639 ベルト内の礫を図化しながら外していく。発掘用具搬出。

12月5日 SK0639 断面の礫を図化。礫を全て撤去し, 完掘する。

12月6日 西区土層断面図作成。

12月9日 西区のベルト撤去後, 下部検出のピットや溝の残りを掘削する。西区平面図作成開始。

12月10日 終日休業。

12月11日 水抜き。ベルト下のピット等の掘削完了。ブルーシート, 土嚢袋等撤去。西区平面図継続。

12月12日 終日休業。

12月13日 西区平面図継続。

12月16日 西区平面図作成完了。全体のレベリング作業開始。

12月17日 レベリング作業継続。

12月18・19日 降雨のため, 終日休業。

12月20日 レベリング作業完了。

12月24日 調査区内のグリッドピンの撤去等の後片付け。本日にて, 現地作業の全てを終了する。

2期(第6-2次調査)

3月6日 第6-2次調査区の周辺の草刈を実施する。

3月7日 調査区設定後, 遺構検出開始。

3月10日 降雨のため休業。県教育委員会視察。

3月11日 現代地割溝の掘削に着手。北端の表土残土の除去。グリッド設定。

3月12日 南北筋の現代地割溝掘削完了。東西筋の現代地割溝と同中世溝の掘削に着手。

3月13日 終日休業。

3月14日 発掘用具整理。

3月17日 現代溝掘削完了後、全体の遺構検出を再度行う。
SH0672-78 認定後、掘削に着手。SH75/76 → SH77 → SH73/
74 と新しくなることを確認する。
3月18日 SH0673/74 から須恵器が出土し、古墳時代の竪穴
住居であることが判明する。SH0675/76 は弥生土器のみとな
る。SH0677 はSH0673/34 よりも古いと考えていたが、7世
紀に近い須恵器が出土し、SH75/76 → SH73/74 → SH77 と改
める。SD0680 認定。SD0680 はSH0678 やSH0683,SH0673/

74 よりも新しい溝と認識する。
3月20日 SH0673/74,SH0675/76,SH0678,SH0683内のピット
及び周壁溝の掘削。SD0684 完掘。SH0685 の掘削に着手。
3月24日 SH0686 掘削。SH0687 認定。SH87 → SH85 と新
しくなることを確認する。各種竪穴住居内部のピットの掘削を
継続。
3月25日 SH0675/76,SH0685,SH0688 等の掘削継続。年度
末のため、本日にて6-2次調査を終了する。

Tab.1 磐城山遺跡の発掘調査履歴

※ゴシック体は本書

調査 回数	調査 要因	調査 面積 (㎡)	調査期間	調査担当	概要報告書 / 報告書	調査概要	遺構 番号
プレ 1次	道路建設 (県道)	1,100	1993/5/11 ～ 1993/8/6	森川常厚	1994 『磐城山遺跡発掘調査報 告』 三重県埋蔵文化財センター	中世城館（西側に隣接する木 田城跡）に係る堀状遺構を確 認する。一部、竪穴住居や中 世の土坑を検出する。	01～
第1次	道路建設	3,000	1997/9/12 ～ 1998/2/23	杉立正徳	杉立正徳 1998 「Ⅱ.6.磐城山 遺跡」 『鈴鹿市埋蔵文化財調査 年報』Ⅴ 鈴鹿市教育委員会	丘陵端部を寸断する環濠状の 溝（山中式）を検出し、その 西側で竪穴住居等が多数確認 する。	01～
第2次	道路建設	2,000	1998/8/20 ～ 1999/1/22	岡田雅幸	岡田雅幸 2000 「Ⅴ.7.磐城山 遺跡（2次）」 『鈴鹿市考古博物 館年報』第1号	弥生時代後期と古墳時代後期 の竪穴住居を多数確認。古代 の溝や掘立柱建物も確認され る。柱穴から水晶出土。	01～
第3次	農地改良	740	2010/6/21 ～ 2011/3/31	田部剛士	田部剛士 2011 「Ⅳ.6.磐城山 遺跡（第3次）」 『鈴鹿市考古博 物館年報』第13号	弥生時代後期と古墳時代後期 の竪穴住居を多数確認。古代 の溝が南北にのびることを確 認。	0301～
第4次	農地改良	315	2011/4/4 ～ 2011/10/2	田部剛士	田部剛士 2013 「Ⅲ.1.磐城山 遺跡（第4次）」 『鈴鹿市考古博 物館年報』第14号 田部剛士 2014 『磐城山遺跡 第4・5次発掘調査報告書』鈴 鹿市考古博物館	竪穴住居が弥生時代後期初頭 （八王子古宮式）まで遡るこ とが確認される。	0401～
第5次	農地改良	620	2012/6/25 ～ 2013/1/11	田部剛士	田部剛士 2014 「Ⅲ.2.磐城山 遺跡（第5次）」 『鈴鹿市考古博 物館年報』第15号 田部剛士 2014 『磐城山遺跡 第4・5次発掘調査報告書』鈴 鹿市考古博物館	丘陵北東端では遺構の残りが 悪いものの、古墳時代後期の 竪穴住居が多くなる。また、 1次調査の環濠は丘陵北端で は確認されない。	0501～
第6次	農地改良	325	2013/8/20 ～ 2014/3/25	田部剛士	田部剛士 2015 「磐城山遺跡 （第6次）」 『鈴鹿市考古博物 館年報』第16号	弥生時代を中心とした竪穴住 居に加え、中世の土坑墓2基 が確認された。	0601～
第7次	農地改良	650	2014/4/2 ～ 2014/8/22	田部剛士	田部剛士 2016 予定 「磐城山 遺跡（第7次）」 『鈴鹿市考古博 物館年報』第17号	弥生時代・古墳時代の竪穴住 居と共に、古代の直線的な溝 （区画溝か）を確認した。	0701～
	合計	8,750					

第7次調査(650㎡;平成26年4月2日～平成26年8月22日)
4月2日 第6-2次調査区から調査を再開。再度、全体の遺構検出及び清掃を行う。
4月3日 検出終了後、掘り残っていたピット等を掘削する。7次調査区として中区の遺構検出を開始する。現代地割溝掘削着手。
4月7日 中区遺構検出継続。中区略測図作成開始。6-2次調査区清掃後、各種完掘遺構の写真撮影。
4月8日 中区遺構検出完了。東西の現代地割溝完掘。検出状況の写真撮影後、SD0701,SH0702,SH0703の掘削に着手。
4月9日 SH0705掘削完了後,SH0710に着手。SH0708/09認定。SK0704掘削完了。
4月10日 SH0702,SH0708/09,SH0710,SK0704内のピットを掘削。
4月11日 終日休業。
4月14日 SH0707,SH0708/09完掘。SH0702の下部にも竪穴の周壁溝らしき痕跡あり。
4月15日 現代溝の西側を1段下げる。ピット等完掘。SH0711,SD0713,SK0712等掘削。SK0712は不明瞭。
4月16日 SD0714,SD0715,SH0716,SH0720等掘削着手。SB0724を認識。昨年度の以前の調査区にまたがる3×3間の総柱式の建物となることが判明。
4月17日 SH0718埋土掘削。SB0724に係るピット掘削。SH0721,SD0725掘削開始。
4月18日 終日休業。
4月21日 終日休業。
4月22日 SH0718,SH0721,SH0722等掘削継続。SK0726認定。掘削着手。
4月23日 SK0726完掘。礫を含む土坑墓とはならないことを確認。SH0729-35埋土等掘削開始。
4月24日 SH0736認定。SH0733-35埋土掘削継続。埋土の掘削が完了した所からピットの掘削を開始する。
4月25日 SH0733-35,SH0736掘削継続。
4月28日～30日 終日休業。
5月1日 水抜き。東区の表土残土の撤去。
5月2日 梅の木の撤去。東区表土除去継続。西区の掘削を再開。SH0730,SH0733-35,SH0736掘削。
5月7日 東区表土除去完了。北端の落ち込みの掘削も完了する。SH0730,SH0733-35,SH0736内ピット等掘削。
5月8日 SH0721/22,SH0733-35,SH0737内ピット等掘削。SD0739,SD0744完掘。東区検出。SH0733-35の上位にSD0740-43,SH0742等があることを確認する。東区略測図作成。
5月9日 SH0733-35,SH0736等内部ピット等掘削継続。SH0733-35は南辺中央に貯蔵穴らしき土坑あり。東区SH0742埋土掘削。古墳時代の竪穴住居と考えられる。
5月12日 SH0733-35掘削継続。東区の北東側を再検出。SH

0741/43,SH0742,SD0747を掘削。
5月13日 SH0733,SH0742掘削継続。東区の南側を再検出。大部分が黒色土地山は確認できず。東区南側をグリッド毎に1段下げる。SD0748,SD0749は中世の羽釜等が出土する。
5月14日 1段下げ継続中にSH0750～SH0755までを認定し、掘削を継続する。SD0748完掘。
5月15日 終日休業。
5月16日 SH0733-35/42埋土を床面まで完掘する。SH0750,SH0756掘削継続。SD0749遺物取り上げ。
5月19日 中区全体清掃完了後、各種完掘遺構の写真撮影。平面図作成。
5月20日 SH0733-35掘削継続。SH35→SH34→SH33と新しくなることを確認する。SH0756完掘。SH0760,SH0751/52,SH0758等掘削。
5月21日 終日休業。
5月22日 SH0734,SH0760,SH0763等掘削継続。埋土掘削終了したものから、内部のピット等の掘削に着手。
5月23日 終日休業。
5月26日 終日休業。
5月27日 水抜き。SH0760,SH0751/52等掘削継続。
5月28日 SH0735南辺中央土坑掘削。SH0751/52の上にSH0766を認定。SH0767掘削着手。
5月29日 SH0735南辺中央土坑の遺物取り上げ。SH0767,SH0769等の埋土完掘。SH0768内ピット掘削。SD0770掘削着手。
5月30日 SH0751/52,SH0768,SH0733-35内ピット等掘削。SD0769,SD0770,SD0771完掘。
6月2日 東区中央の東西ベルト以南は完掘。SH0768の残りを掘削。SH0733-35内ピット,SD0774完掘。南区の遺構検出を開始する。
6月3日 南区検出作業継続。東区SH0768埋土完掘語、内部のピット等を掘削。
6月4日 東区全体清掃後、各種完掘遺構の写真撮影。南区検出作業終了。南区略測図作成。SH0757/75埋土掘削開始。
6月5・6日 終日休業。
6月9日 南区の現代地割溝完掘後、SD0777掘削着手。SH0710埋土残土完掘。東区の平面図作成開始。
6月10日 SD0777掘削継続。SH0710,SH0778内ピット及び単独検出のピット群の掘削を開始する。東区ベルト以南をSH0780として最下部の竪穴住居を掘削。
6月11・12日 終日休業。
6月13日 東区SH0780埋土等完掘後,内部ピットの掘削継続。南区SH0778,SH0779,SX0781等を掘削。翌日以降に更に西側を1グリッド分(3m幅)拡張することとする。
6月16日 東区SH0775内ピット完掘。南区の単独ピットはほぼ完掘する。西側を拡張し、西区として遺構検出を行う。

6月17日 東区SH0775周壁溝, SH0780貼床等を掘削。西区の遺構検出完了。現代地割溝掘削開始。SD0777は調査区の北側(CS38区内)で途切れる。南東隅も途切れており、同様の構造をとると理解する。略測図加筆。

6月18日 終日休業。

6月19日 SH0780完掘。本日にて東区はベルトを残し完掘する。南区, 西区の現代地割溝を撤去し, 全体清掃。古代の直線的な溝と想定するSD0777の検出状況の写真撮影を行う。

6月20日 終日休業。

6月23日 SD0777掘削開始。北端の現代地割溝の掘削を完了する。南西側よりピットの掘削に着手する。

6月24日 SD0777完掘後, 全体清掃を行い, 写真撮影。南側のピット群掘削継続。SH0710,SH0707埋土の掘削を開始する。SH0784認定後, 掘削着手。南区の平面図作成開始。

6月25日 SH0784の下にSH0785を認定。SH0710,SH0707/88埋土完掘。SH0786/87,SH0794/95の掘削に着手。南区から西区の平面図作成継続。

6月26日 終日休業。

6月27日 西区の平面図作成継続。

6月30日 SH0794/95,SH0707/88の内部ピット等掘削継続。6-2次調査区及び中区のレベリング作業実施。

7月1日 SH0790-92,SH0794/95,SH0796,SH07100,SH07101掘削。中区及び東区の平面図作成開始。

7月2日 SH0790-92,SH0707/88内ピット等掘削完了。西区の掘削をほぼ終了する。北西側に次の調査区を設け, 除草作業等を行う。中区と東区の平面図作成継続。

7月3～17日 台風接近のため終日休業。

7月15日 西区の残っていたピット等の掘削を終了する。7-2次調査区として北西側の遺構検出を行う。

7月16日 7-2次調査区の検出継続。SD0777が直角に西へ曲がると想定される溝を確認する。丘陵の北端であり, 随分土砂が流出しているようで, 溝自体が大分浅いものと判断する。略測図作成。

7月17日 南区及び西区の水抜き。全体清掃後, 各種完掘遺構の写真撮影。中区, 東区のブルーシート及び土嚢袋を撤去。7-2次調査区遺構検出完了。中区と東区の平面図継続。

7月18日 終日休業。

7月22日 東区の水抜き後, 東西ベルト撤去開始。ベルトの下部の遺構も掘削する。東区の平面図継続。

7月23日 東区の全体清掃後, 各種完掘遺構の写真撮影を行う。東区の平面図継続。

7月24日 ブルーシート, 土嚢袋等撤去。発掘用具撤去。作業員は本日にて終了する。東区の平面図継続。

7月25日～8月13日 東区の平面図継続。

8月14～21日 全体のレベリング作業実施。

8月22日 グリッドピン撤去。本日にて現地作業を終了する。

第Ⅱ章 位置と環境

1 地理的環境

磐城山遺跡は鈴鹿市木田町に所在する(Fig.1)。木田町は、現在の行政地区では「河曲^{かわの}」地区と呼ばれている。その名が示すとおり、鈴鹿川が蛇行しながら東流して伊勢湾に注いでおり、過去、鈴鹿川が幾度も氾濫を繰り返していたことが想像される。この鈴鹿川の南部には神戸丘陵^{かんべ}と呼ばれる低位段丘が東へ張り出しており、北部には高岡丘陵とよばれる中位段丘が派生している。

磐城山遺跡は、鈴鹿川の左岸の高岡丘陵上に位置する(Fig.2)。標高は海拔35m前後で、緩やかに傾斜しながら南東方向に張り出している。周囲には同じような舌状の丘陵地形が点在し、その上は概ね全てが遺跡として利用されている。

この高岡丘陵は、第四紀更新世の地層である水沢扇状地堆積物からなる。古期扇状地面の表面には赤色土がよく発達しており、この層の上面から遺構が掘り込まれている。また、赤色土の下位は、チャートや頁岩、砂岩、花崗岩、溶結凝灰岩等、人頭程度の礫を多く含む礫層から構成されている。

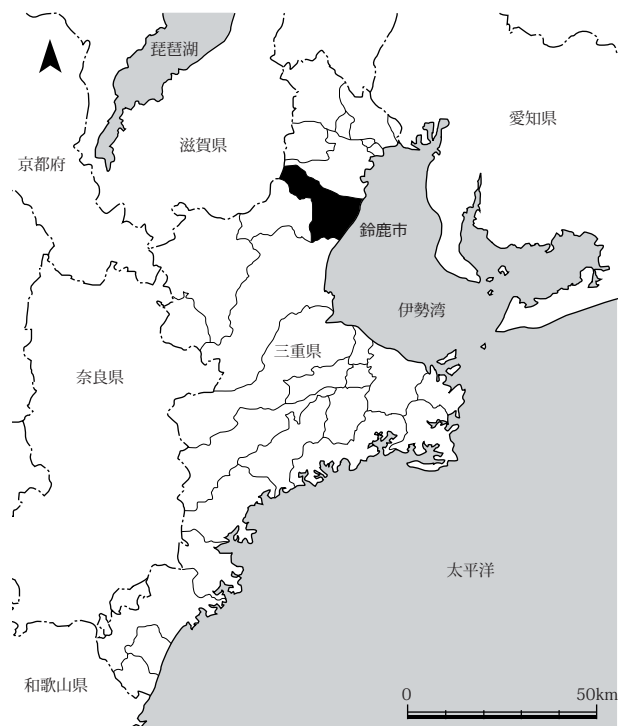


Fig.1 鈴鹿市の位置 (S=1/2,000,000)

2 歴史的環境

この河曲地区では、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡は少ない。旧石器時代では、高岡丘陵上の西ノ岡A遺跡等で、ナイフ形石器や縦長のチャート製剥片が出土している程度である。なお、磐城山遺跡の第4次調査では、三重県で初となる黒曜石製のナイフ形石器が出土しており、注目される。縄文時代では、木田坂上遺跡において縄文時代晩期後半の土器棺が2基見つまっている。

弥生時代になると河曲低地部の八重垣神社遺跡等において前期の流路跡が多数確認されている。中期後半以降では高岡丘陵上で扇広遺跡、中尾山遺跡、境谷遺跡、寺山遺跡等の集落遺跡が多く分布するようになる（Fig.3）。磐城山遺跡のように弥生時代後期を主体とする遺跡は南山遺跡や一反通遺跡程度であるが、やや後出して廻間様式に成立する青谷遺跡といった遺跡も確認される。

古墳時代初頭になると丘陵上の集落は衰退し、低地部の八重垣神社遺跡等で集落や墓域が認められるようになる。古墳としては、前方後円墳である寺田山1号墳や富士山1号墳、円墳と推定される大鹿山1号墳等を中心に、小規模な古墳が点在している。集落跡としては境谷遺跡や磐城山遺跡で多く確認される。

また、古代には伊勢国に河曲郡が存在しており、現在の河曲郡がその地と推定されている。『和名類聚抄』に

よる河曲郡には神戸郷をはじめ、駅家郷、川部郷等の八郷があったとされている。この内、木田町は駅家郷に該当すると考えられている。なお、この河曲郡は古代豪族の大鹿氏の本貫地とされている。『日本書紀』敏達天皇四年（575）の条によると、「采女伊勢大鹿の首小熊の娘の菟名子夫人といい、太姫皇女と糠手姫皇女とを生む」とある。さらに、『古事記』と『日本書紀』の雄略天皇の条には、「伊勢国三重の采女」や「伊勢の采女」とも出てきており、これが大鹿一族だと考えられており、古代においてかなり有力な豪族であったことが窺える。

それを査証するように、木田町の北に隣接する国分町には、白鳳寺院と考えられている南浦遺跡を含め、古代河曲郡衙と推定される狐塚遺跡や、伊勢国の国分二寺のような重要な施設が置かれ、その一部が発掘されている。おそらく、周辺には『延喜式』で十疋の駅馬や五疋の伝馬が配置されていたという河曲駅や、壬申の乱の際に大海人皇子が立ち寄った「川曲の坂下」があったものと推定される。

さらに、このような重要な施設は古代官道とも無関係であったとは考えにくく、近くに東海道の縦貫していたものと考えられる。近年、平田本町所在の平田遺跡において、幅9mの直線道路が検出されており、年代観が定まらないものの、国府町所在の推定伊勢国府跡と国分二寺をあたかも直線的に結ぶかのような位置関係にあっ

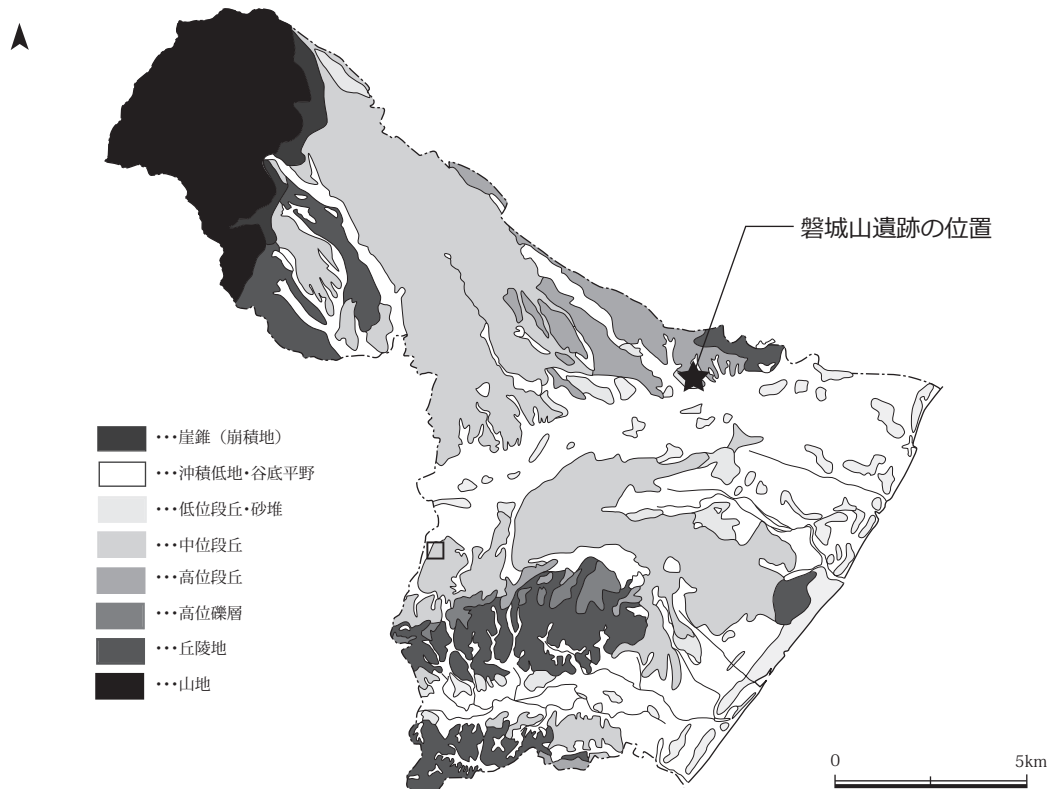


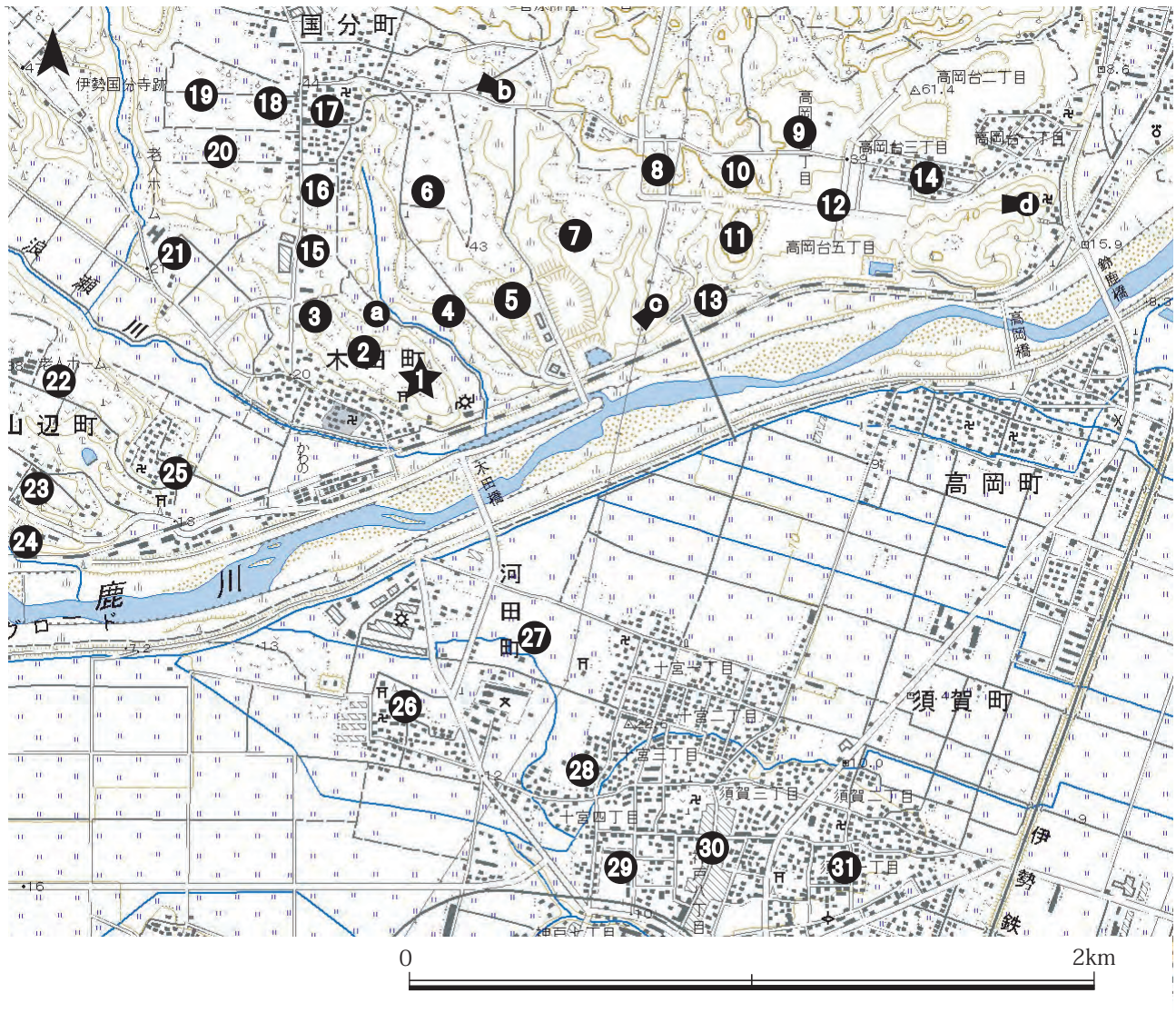
Fig.2 鈴鹿市の地質 (S=1/200,000)

て、注目されている。

また、木田町周辺では、平安時代以降の遺跡も確認されている。特に国分北遺跡は、道路状遺構に特有とされる波板状凸凹痕や道路側溝と思われる溝が110m以上確認される等、平安時代頃まで道路が走っていたようで、交通の要衝であったようである。

また、鎌倉時代の記録によると、源頼朝の命によって地頭御家人で駅家雑事の課役を負担していない者の目録を提出させているが、これを担当したのが「大鹿俊光」や「大鹿兼重」、「大鹿国忠」なる人物達であった。このことから、大鹿氏が中世においても在庁官人として活躍していたことが分かるが、丘陵上には鎌倉時代の大規模

な遺跡は不明瞭であり、どちらかという中世後半以降のものが多い。室町時代以降は、高岡丘陵上にも多くの山城が築城されるが、丘陵東端には織田信長侵攻時の最前線となった高岡城が存在している。調査地の西側に隣接して登録されている木田城跡も無関係ではなかったものと考えられる。



- 1 磐城山遺跡 2 木田城跡 3 木田坂上遺跡 4 沖ノ坂遺跡 5 中尾山遺跡 6 国分東遺跡 7 境谷遺跡 8 寺山遺跡 9 扇広遺跡
 10 西ノ岡A遺跡 11 西ノ岡B遺跡 12 東ノ岡遺跡 13 寺田山遺跡 14 青谷遺跡 15 南浦遺跡 16 国分南遺跡 17 国分遺跡 (推定伊勢国分尼寺跡)
 18 国分西遺跡 19 伊勢国分寺跡 20 狐塚遺跡 (推定河曲郡衙跡) 21 間瀬口遺跡 22 添遺跡 23 口山遺跡 24 南山遺跡
 25 山辺東遺跡 26 河田宮ノ北遺跡 27 八重垣神社遺跡 28 宮ノ前遺跡 29 十宮古里遺跡 30 萱町遺跡 31 須賀遺跡

- a 大鹿山1号墳 b 富士山1号墳 c 寺田山1号墳 d 高岡山9号墳

Fig.3 遺跡の位置 (S=1/20,000)

第三章 調査の方法

1 調査区

発掘調査は平成22年度の第3次調査から継続して行っている。第3次調査区は、既設市道（第1・2次調査区）の北側に設けたが、毎年そこから北西側へ拡張するように調査区を広げて対応している。第6次調査区は第4次調査区の北側でかつ第5次調査区の西側に

設けた。第7次調査区は第6次調査区の更に北側に用意した。第6次調査区の地番は、鈴鹿市木田町字上條2263, 2264, 2273の一部で、第7次調査区は、同上條2263, 2264, 2273, 2274の一部となる。

調査区は現代の地割溝等を利用して、概ね100㎡が1区画となる程度の単位に分割して調査した。この小単位

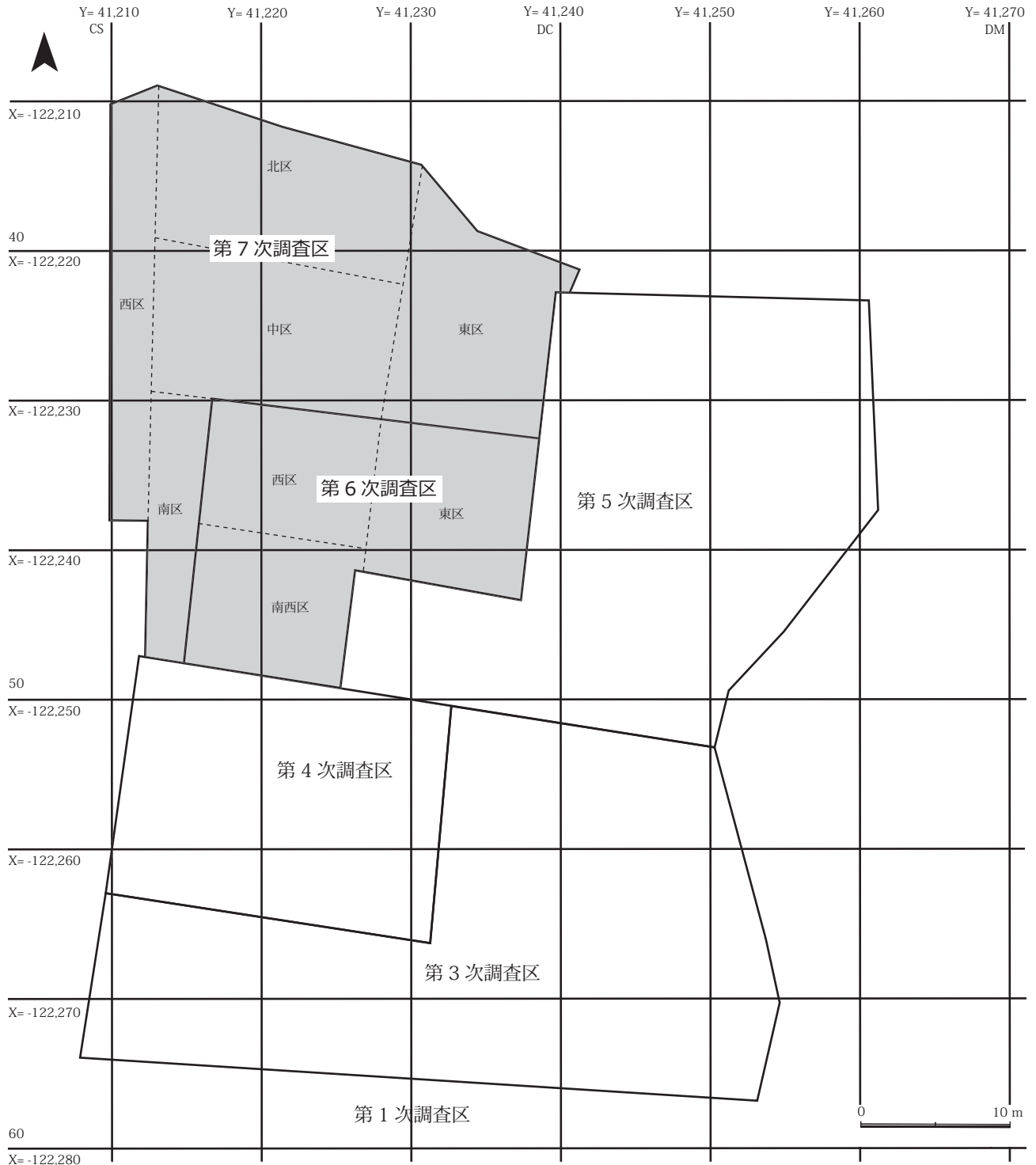


Fig.4 調査区の地区割り (S=1/400)

は、便宜上、調査年次毎に方位を用いた西区、東区、中区等と呼称とした。一つの単位を調査し終わった後に、随時、次の調査区を拡張するように調査を進めた。最終的に第6次調査区は、東区、南西区、西区の3単位約325㎡、第7次調査区は北(6-2次)区、中区、東区、南区、西区の5単位約650㎡を調査した。

2 地区割り

調査地内においては、国土座標第VI系に基づいて3m四方の柵目(以下、グリッドとする)を設定した(Fig.4)。なお、第4次調査まで用いていた任意座標は、第5次調査以降に廃止している。

磐城山遺跡の存在する丘陵全体を被覆するように配慮し、X=-122,100、Y=41,000を基点として、記号と番号を割り振った。南北方向は2桁の算用数字を与え、東西方向にはアルファベットの2文字を組み合わせ、北東隅の点をグリッドの名称とした。その結果、第6・7次調査区はCS36区～DB47区までに含まれることとなる。

3 遺構番号

調査範囲が広大なため、原則として遺構番号は通し番号とし、調査の進行順に番号を付すことにした。本書では、調査時の番号をそのまま利用することとする。なお、遺構の表記としてはSH0601のように表す。これは、下記の性格を示す記号と調査次数を表す「06」、調査段階で付与した個別識別番号「01」からの連番の組み合わせ、という意味である。

また、他の調査区と分割して調査している遺構は複数の遺構番号がつけられているが、本書では最終的に新し

い調査区側の遺構番号に統一した。ただし、第7次調査区の北区は、ほとんどが第6-2次調査として記録しているので、遺構番号は06で始まる6次側の番号を与えている。

なお、数字の前に表記したアルファベットの内容は下記の通りである。

SH・・・堅穴住居 SB・・・掘立柱建物 SD・・・溝
SK・・・土坑 SX・・・性格不明のもの
pit・P・・・柱穴・ピット

4 基本層序

調査区内において10～20cmの表土の直下で、黒褐色系の遺構埋土か黄褐色砂礫層の地山が存在する。第6次調査区は表土直下に黒褐色の遺構埋土で覆われており、遺構密度が濃いことがわかった。かつ、その深さも深い所で50cm以上に及び、良好な遺存状態であった。

一方、第7次調査区の北側では、表土の直下に地山が確認されることが多く、遺構の密度が希薄であった。ちょうど、第5・7次調査区の北側では丘陵が急激に落ち込んでいることから、地形的に土砂の流出が激しいことが推測される。これを査証するように、検出面からの遺構の深さも5～10cm程度と浅くなっている。

なお、地山とした黄褐色砂礫層(赤色土)は、第4次調査区の辺りで70cm程度あり、その下部には人頭大の礫を多量に含むにぶい黄灰色の層序が、約2m堆積している。これらの層序は、更新世に堆積したとされる古期水沢扇状地堆積物に該当する。この上面から遺構が掘削されるが、黄褐色砂礫層(赤色土)の流出が激しい丘陵端部では、礫層まで遺構が掘り込まれている。

第IV章 検出遺構

今回の調査では、多数の遺構が確認された。多くは堅穴住居で、それに付随する溝やピット等がある。これらが極めて煩雑に重複しており、県内でも有数の遺構密度を持つ遺跡となっている(Fig.5)。

第6次調査区では、堅穴住居27棟以上(第4・5次調査区にまたがるものも1棟と数えている)、掘立柱建物1棟、土坑4基の他、多数の溝とピットを検出した。また、第7次調査でも、堅穴住居47棟以上、掘立柱建物1棟、土坑2基、溝、ピットを多数検出している(Fig.5)。

遺構の重複が著しいため煩雑であるが、内容としては中世の木田城跡に係ると想定される城館跡、飛鳥～奈良時代頃の遺構、古墳時代後期と弥生時代末期を中心とした集落址といったものである。この内容は、過去の発掘

調査の成果を踏襲するものであるが、第6次調査区で中世の土坑墓2基(SK0621、SK0639)が比較的良好に遺存していたこと、磐城山遺跡でも最古に遡る可能性のある堅穴住居(SH0622)を確認したことは特筆される。

以下、比較的まとまった内容の遺物を出土した遺構を中心に解説するが、ある程度の遺構のまとめ毎に記述する。これは、重複している遺構を同時に掘削しているものを含んでいるためであり、取り上げ遺物が混在している可能性を孕んでいることによる。

なお、第6・7次調査区にまたがっているものについては、第7次調査区の番号を以って代表させる。ただし、第7次調査区の北区は第6-2次調査区として調査しているため、一部は第6次調査区の遺構番号を用いている。



Fig.5 第6・7次調査区遺構配置図 (S=1/200)



Fig.6 第1-7次調査区遺構配置図 (S=1/300)

1 竪穴住居

SH0601 (Fig.7)

第6次調査区の南東隅のDB46/47区周辺で検出した。第6次調査区では、西辺周壁溝の一部を確認したにとどまるが、第5次調査区のSH0545やSH0559よりも新しい。

一部で北辺を確認しており、南北規模は6m以上ある。支柱穴は第5次調査区内に4ヶ所あり、柱間は3.2mを測る。SH0545西辺周壁溝の上部に焼土があり、これがSH0601の焼土である可能性が高い。

SH0545の取り上げ遺物に6世紀代の須恵器や土師器が混在しており、これらが本来SH0601に伴っていた可能性が考えられる。

SH0619 (Fig.8)

第6次調査区の南東隅CZ47区で検出した。竪穴住居の北東隅を確認したのみで、第5次調査区のSH0561と同一の建物である。支柱穴は4本で、柱間の距離は3.1m程度である。出土遺物は少ないもの、弥生土器のみであることから、弥生時代の建物と考えられる。

SH0602/03/06/07/22/99 (Fig.9)

SH0602は第6次調査区の南東のDA47区周辺で検出した。SH0603等と重複するが、SH0602の方が新しい。削平が著しく規模は不明である。支柱穴は西側の2ヶ所を確認したが、東側はSH0603等のため消失している。柱間は3.2mある。なお、北西支柱穴はSH0603の焼土を壊して掘り込んでいる。出土遺物は非常に乏しく、帰属時期は不明である。

SH0603/99はCZ45～DB46区にかけて検出した。SH0602やSH0606、SH0607、SH0622等と著しく重複するが、SH0602・SH0606よりも古く、SH0607・SH0622よりも新しい建物である。当初SH0603-新とSH0603-古とに分けて調査したが、整理段階でSH0603-古をSH0699として認識し直した。

一辺6.2m程度の規模で、南辺の中央に貯蔵穴と思しき土坑(以下、南辺中央土坑と呼ぶ)を伴う。この南辺中央土坑からはSH0603/99の床面を通り抜けるように北東方向へ溝SD0618が伸びている。また、支柱穴はいずれも4本柱であり、柱間の距離は概ね2.7m程度である。床面の中央に焼土が重なるように広がっていた。

遺物は多くはないが、弥生土器で占められており、概ね弥生時代末から古墳時代初頭の建物だと判断できる。

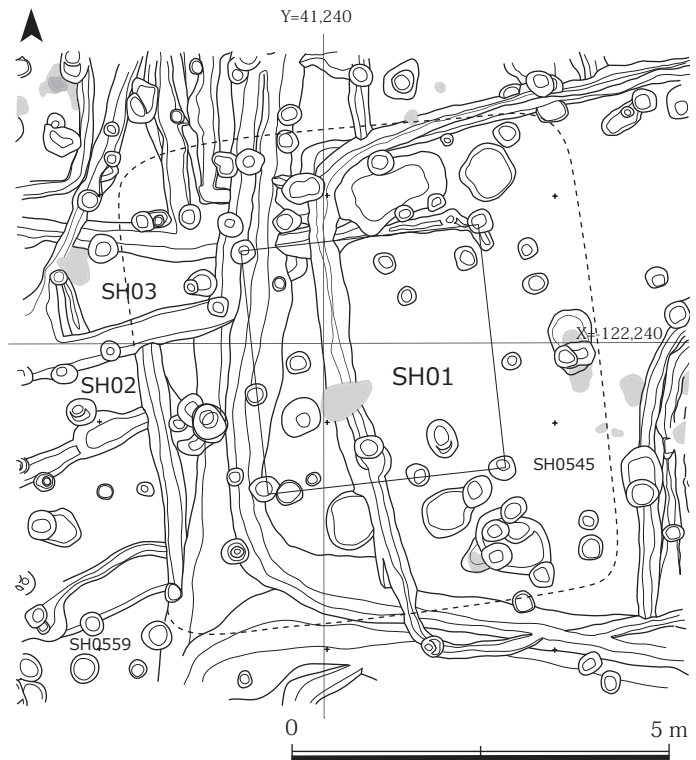


Fig.7 SH0601 平面図 (S=1/100)

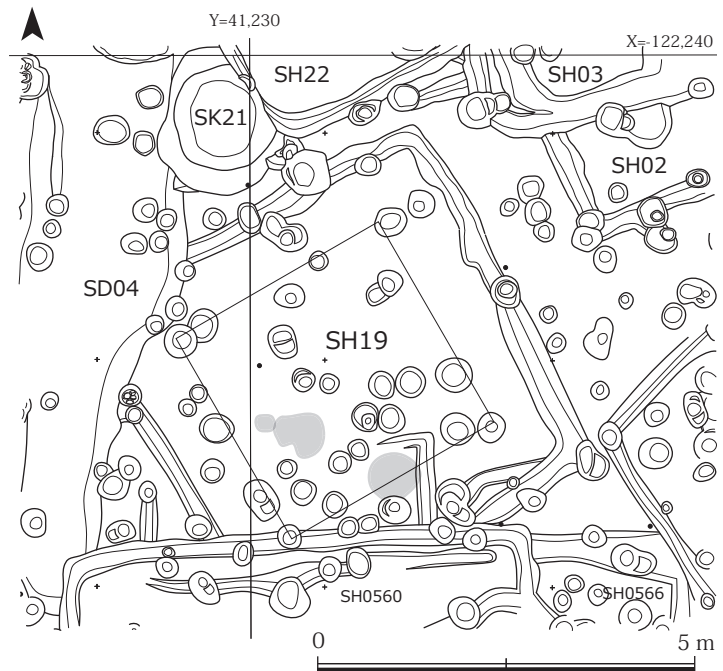


Fig.8 SH0619 平面図 (S=1/100)

SH0606はCZ44～DA45区で検出した。SH0633/99よりも上部にある建物である。東西5.8m、南北5.3mのやや長方形で、支柱穴も東西2.9m、南北2.4mとなる。中央には焼土がある。出土遺物には6世紀代の土師器や須恵器が主体で古墳時代後期頃の建物であろう。

SH0607はDA44～45区周辺で検出した。SH0603/99よりも下位にある建物である。主に北西側を確認した程度で詳細は不明であるが、支柱穴は4本で、柱間の距離は2.7mを測る。

SH0622はCY45～DA46区にかけて検出した。西側でSH0631と重複するが、SH0622の方が古い建物である。床面の中央に焼土があり、南辺中央土坑をもつ。焼土の北側からは排水溝らしき溝SD0625が、北東方向へ伸びている。なお、主柱穴は南西を除いて4本柱の位置に該当する場所で3ヶ所確認した。

遺物は床面直上で良好な状態で出土した。弥生土器の壺や甕、高杯、器台と器種も豊富で残りも良かった。その特徴から、弥生時代後期初頭頃と考えられる。高杯の特徴から中期末まで遡る可能性もあり、磐城山遺跡の中でも最古の竪穴住居となる。

SH0631/32 (Fig.10)

第6次調査区の中央の辺り、CW45～CY47区で検

出した。共にSH0633/47よりも新しい建物であるが、SH0631とSH0632との新旧関係は不明である。ちょうど中央に現代の地割溝や中世のSD0604、SK0621等があるため、SH0631の南北規模が4.5m程度であることしか分からない。

主柱穴はいずれも4本柱であったようだが、SH0631の南東隅は土坑墓SK0621によって消失している。SH0631の柱間は2.3m程度、SH0632は南北2.5×東西3.0mを測る。焼土は確認できなかった。

いずれの竪穴住居も床面まで削平されているため、出土遺物は乏しい。少量の須恵器が含まれるが、ほとんどが弥生土器であるので、弥生時代末期の建物だと考えられる。

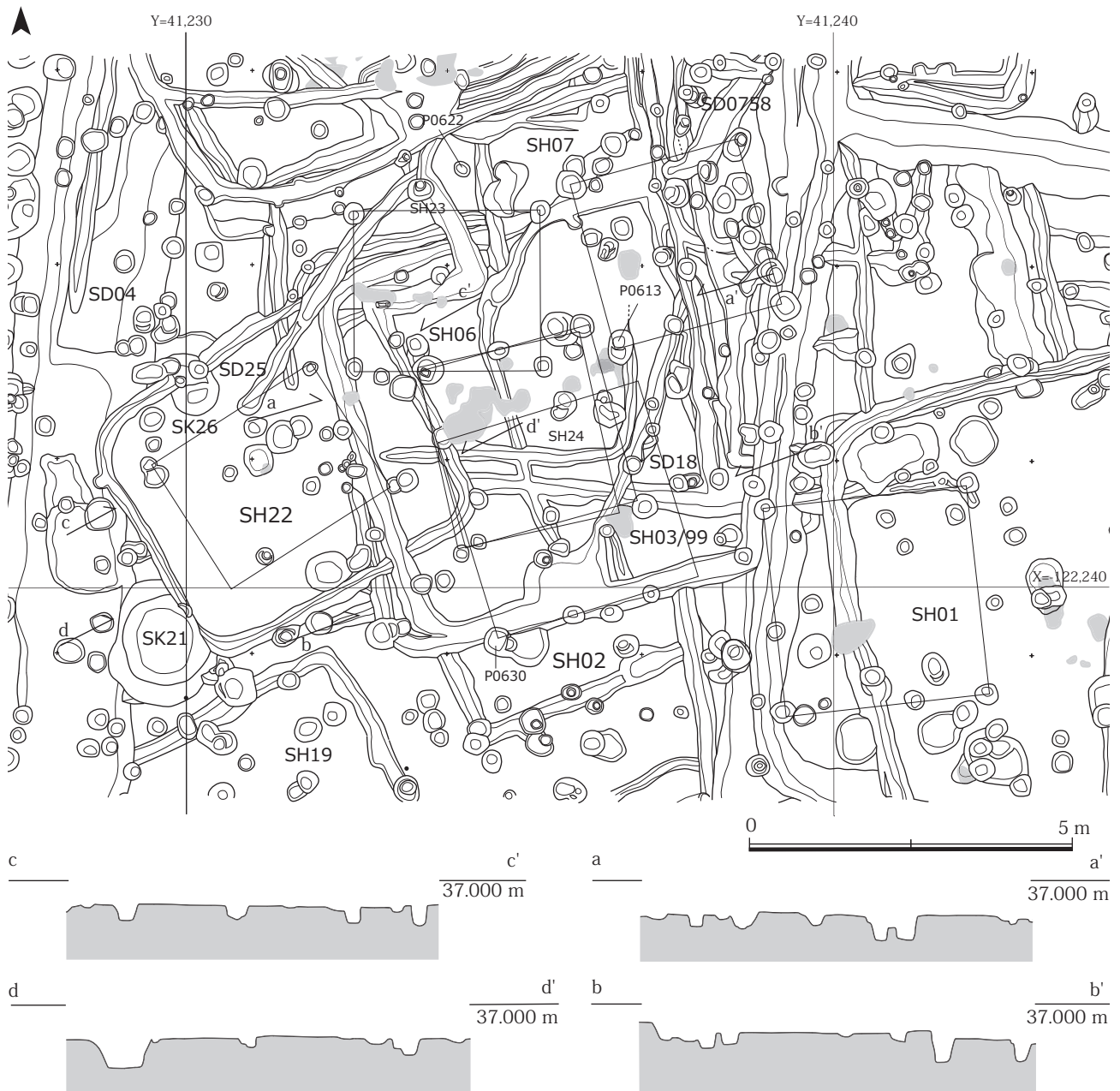


Fig.9 SH0602/03/06/07/22/99 平面・断面図 (S=1/100)

SH0633/34/47 (Fig.10)

第6次調査区の南西区と西区のCV45～CX46区にまたがって検出した。いずれもSH0631/32よりも古い建物で、SH0634→SH0647→SH0633と新しくなる。

SH0633/47は、ほぼ同じ場所による建て替えであり、西側をSH0633、東側をSH0647とした。4本柱の主柱穴を持ち、柱間はいずれも2.5mである。中央に焼土があり、南辺中央土坑を持つ。北東隅からは排水溝のSD0662/63が北東方向へ伸びている。

なお、SH0633の周壁溝の底面には、細く深い小さな溝状の凹みが走っており、何らかの構造の痕跡を示すものと想定される。また、SH0633周壁溝の外側にしまりの緩い埋土が斜位に堆積しており、示唆的であった。

出土遺物が弥生時代後期の土器が主体であることから、その頃の建物であったと考えられる。

SH0634は南北5.5mあるが、東西規模は不明である。柱構造もはっきりとせず、不明な点が多い。南西方向から北東へのびる溝SD0637が、建物の南西隅で接続している点も特異である。

出土遺物は乏しいが、SH0633/47に先行することから、弥生時代後期の建物であったのであろう。

SH0640 (Fig.11)

第6次調査区の南西区CV47～CW49区にかけて検出した。SH0641-44と重複関係にあるが、新旧関係を捉えることができなかった。床面以深まで削平が進んで

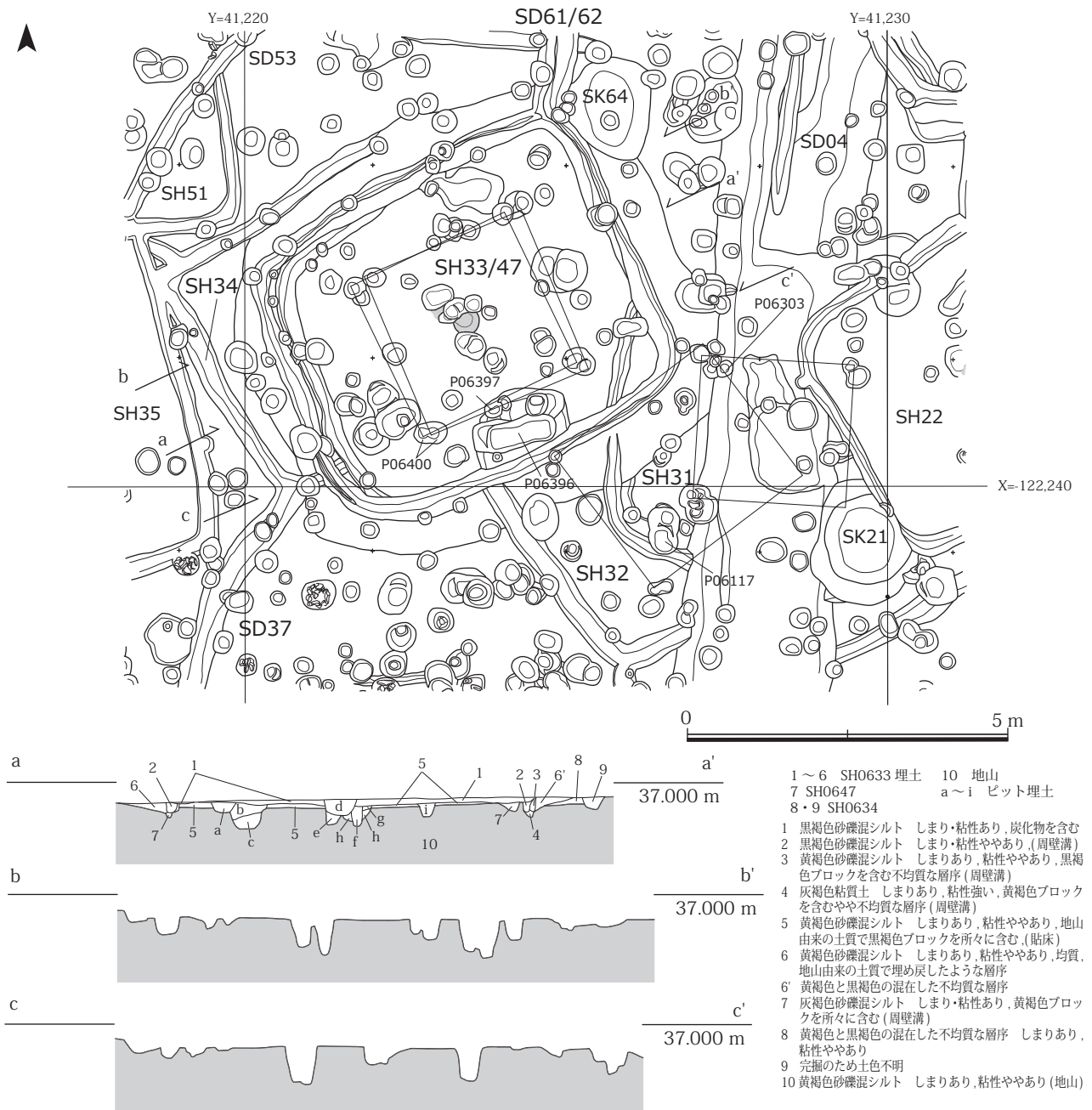


Fig.10 SH0631-34/47 平面・断面図 (S=1/100)

おり、詳細な規模等は不明である。焼土も検出されていない。4本柱の建物と想定されるが、柱間の距離は3.0mある。

出土遺物は乏しく、時期不明の建物である。

SH0641-46 (Fig.11)

第6次調査区の南西区CV49～CW49区から第4次調査区にかけての範囲で確認した。著しく重複しているが、少なくともSH0641-44の4棟の建て替えとSH0645/46が重複していると解釈した。ただし、SH0641-44とSH0645/46の新旧関係は把握できなかった。

4棟の建て替えられた建物は北から南に向かってSH0641→SH0642→SH0643→SH0644と新しくなる。ちょうど建物の中央に中世の溝SD0409があり焼土等が消失しているものもあるようだが、いずれも4本柱の構造をとる。SH0641の柱間の距離は3.5mと大きく、SH0642/43が2.5m前後、SH0644が2.3mと規模を縮小していく。

第6次調査区での出土遺物は乏しいが、第4次調査の成果から弥生時代後期の建物と推定される。

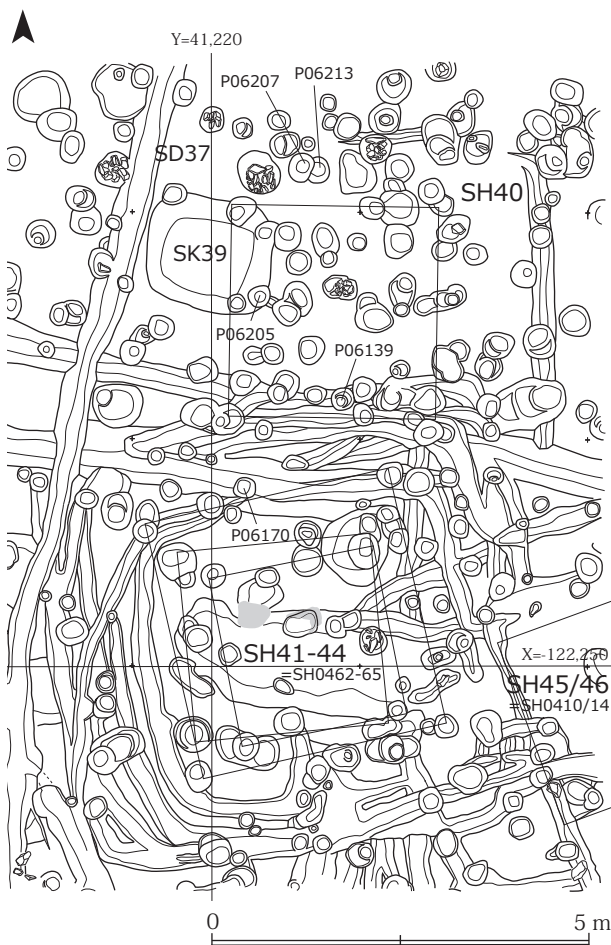


Fig.11 SH0640-46 平面図 (S=1/100)

SH0779 (=SH0635) (Fig.12)

第6次調査区と第7次調査区にまたがる、CT45～CV47区で検出された。SH0778と重複するが、SH0779の方が古い建物である。西側が古代の溝SD0777によって消失しているため東西規模は不明であ

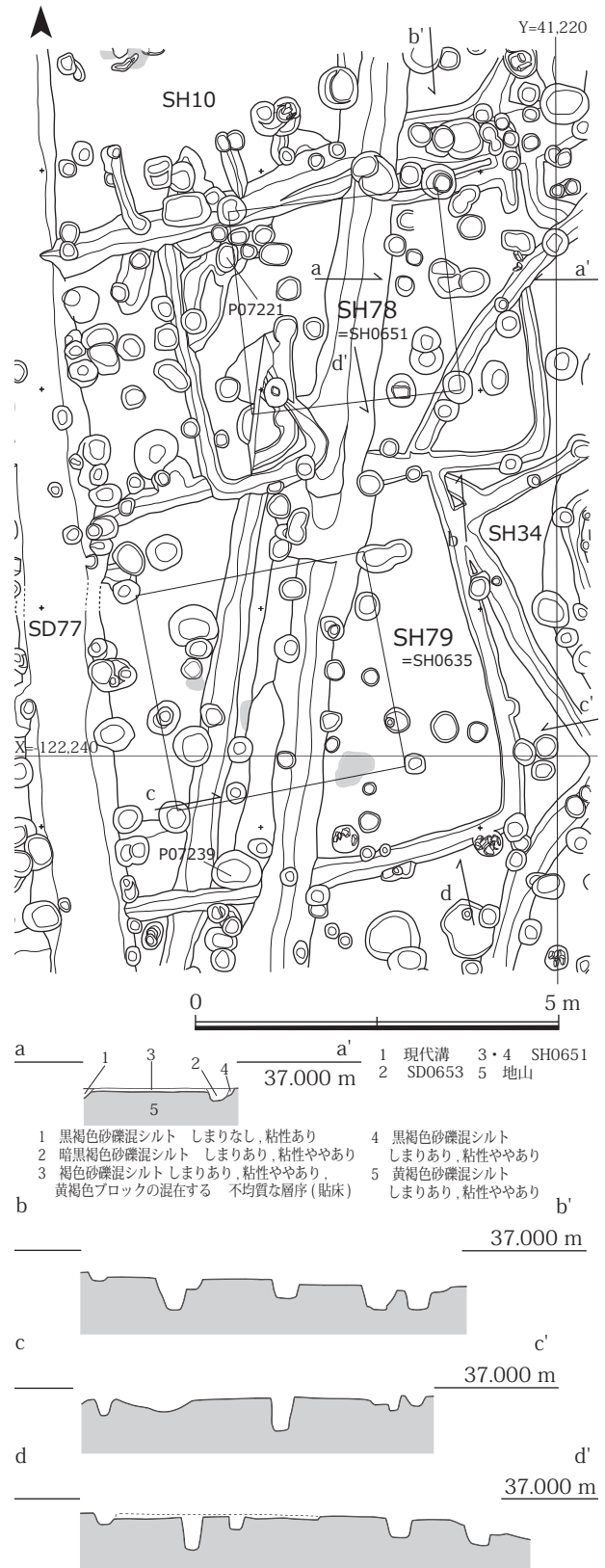


Fig.12 SH0778・79 平面・断面図 (S=1/100)

るが、南北は 5.8 m ある。4 本柱の支柱穴をもち、東西 3.5 m、南北 3.0 m を測る。中央には現代の地割溝が走っているため、焼土の検出は部分的に留まっている。

床面直上まで削平されているために出土遺物は少ないが、概ね弥生土器で占められている。このことから、弥生時代末頃の建物だと推定される。

SH0778 (=SH0651) (Fig.12)

第 6 次調査区と第 7 次調査区にまたがる、CT44 ~ CV45 区で検出された。SH0779 と重複するが、SH0778 の方が新しい建物である。東西、南北 4.9 m 程度の正方形で、4 本柱の支柱穴を持つ。柱間の距離は 2.8 m 前後である。南西の支柱穴の辺りは木の根の攪乱が著しく不鮮明であった。ちょうど中央に SD0777 が走っているため焼土は確認されなかった。

出土遺物には 6 世紀代の須恵器や土師器が多く含まれており、その頃の建物だと判断される。

SH0753 (=SH0616) /SH0613/SH0754 (=SH0612) /SH0608 (Fig.13)

第 6 次調査区と第 7 次調査区にまたがる DB44 区で確認した。著しく重複しているため、はっきりとしないが、4 棟以上の建物が建て替えられていると判断した。この上下に SH0603/99 や SH0542 等が更に重複する。4 棟の重複関係は SH0608 → SH0754 (=0612) と新しくなり、かつ SH0753 (=0616) → SH0613 と新しくなる。

また、4 棟はいずれも SH0603/99 よりも新しい。

ちょうど中央に現代の地割溝があることもあって、焼土は確認できていない。支柱穴は 4 本柱となるようだが、これも重複が著しいため判然としない。柱間は 3.9 ~ 2.8 m 程度である。

出土遺物は弥生土器が少なく、6 世紀頃の土師器と須恵器で占められていることから、概ね 6 世紀頃の建物だと考えられる。

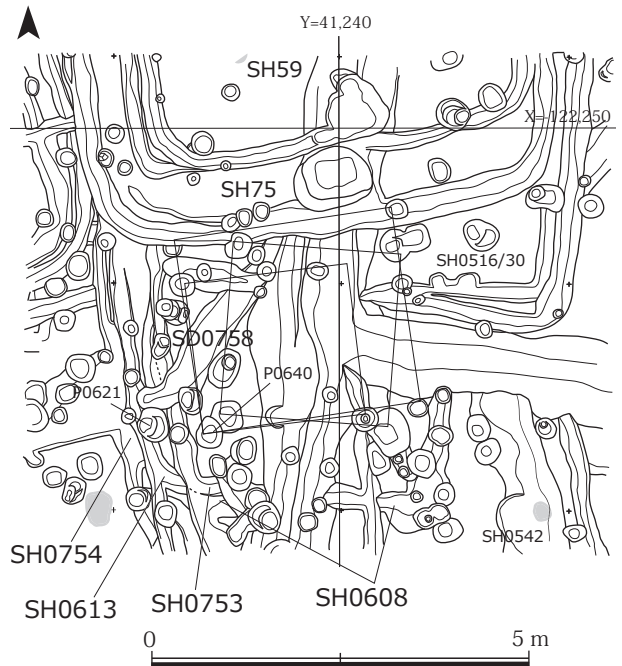


Fig.13 SH0753/54 平面図 (S=1/100)

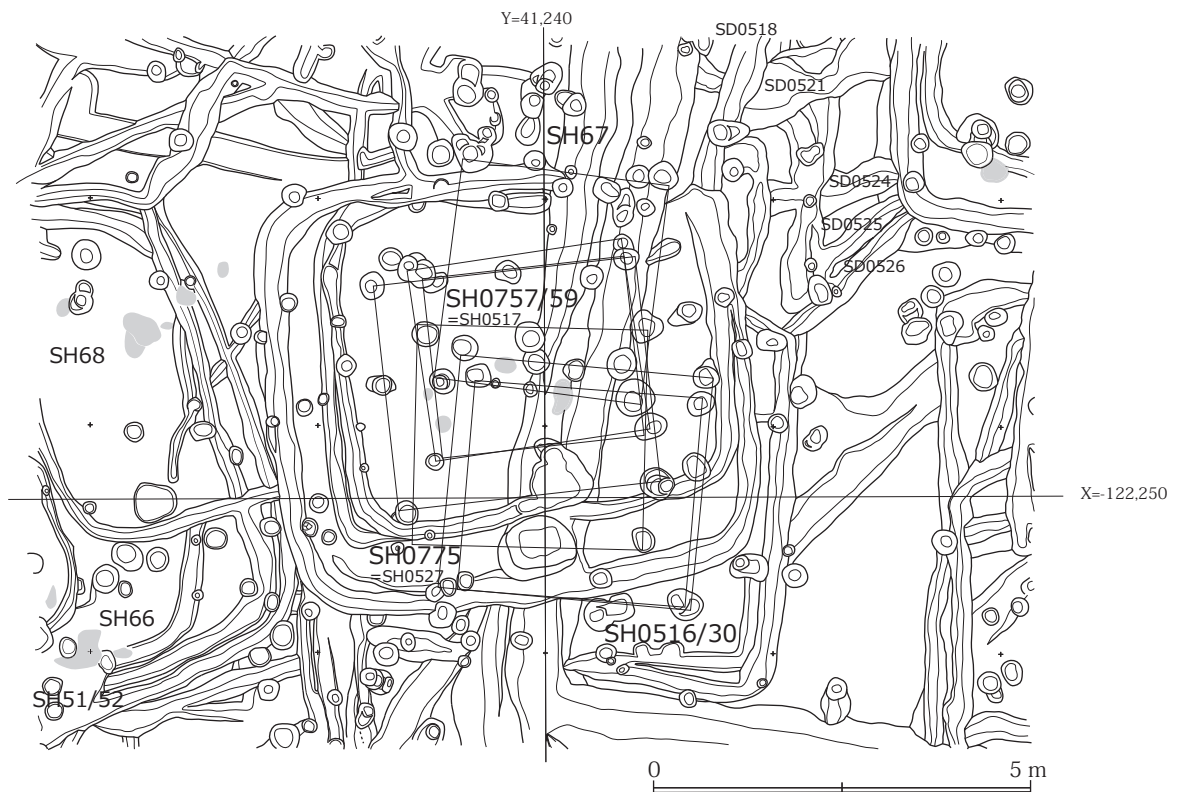


Fig.14 SH0759/67/75 平面図 (S=1/100)

SH0757/59/67/75 (Fig.14)

第7次調査区の東区から第5次調査区にまたがったDB41～DD43区にかけて検出した。最終的に6棟の建物が重複していることが判明した。6棟の新旧関係は、SH0757→SH0759→SH0775→SH0767→SH0516/30の順で新しくなる。

SH0516/30は2棟の建て替えである。東西は不明であるが、南北規模は6m前後ある。柱間の距離は3.8m程度を測る。この建物に伴う焼土は確認できなかったが、SD0525/26が北東隅からの排水溝になろう。SH0759/75の取り上げ遺物の中に6世紀後半～7世紀にかけての遺物があることから、この頃の建物だと判断される。

SH0767は最も北側にある建物である。重複が著しいため規模等は不明である。焼土等は不明であるが、SD0521が排水溝に該当する可能性が高い。出土遺物が6世紀の土器が主体であることから、古墳時代の建物だと考えられる。

SH0775はSH0527と同一の遺構である。規模は東西8.5m、南北7.7mあり、やや長方形を呈する。柱間の距離も東西4.5m、南北4.0mと大きい。床面中央には焼土があり、南辺中央土坑を持つ。出土遺物が弥生土器

のみであることから、弥生時代後期頃の建物だと考えられる。

SH0757/59はほぼ同一地点で建て替えられている。東側のSH0759が新しく西側のSH0757が古い。規模は東西7.2m、南北6.1mであり、SH0775同様やや長方形を呈する。柱間の距離は東西3.8m、南北3.3mを測る。床面中央には焼土があり、南辺中央土坑を持つ。出土遺物が弥生土器のみであることから、弥生時代後期頃の建物だと考えられる。

SH0750・SH0751(=SH0609)/SH0752(=SH0617)・SH0766(=SH0610)・SH0768 (Fig.15)

第6次調査区から第7次調査区にまたがったCY42～DA44区で検出した。5棟の竪穴住居が重複する。さらに西側ではSH0730/36/38等が重複しているが、いずれもこれらに先行する建物である。新旧関係はSH0752→SH0751→SH0766→SH0768→SH0750の順で新しくなる。

SH0751/52はほぼ同一地点での建て替えであり、東西7.5m、南北7.1mもの規模を誇る。支柱穴は4本柱であり、柱間の距離も東西3.9m、南北3.5mと大きい。床面中央には焼土を持ち、南辺中央土坑を有す。北東隅

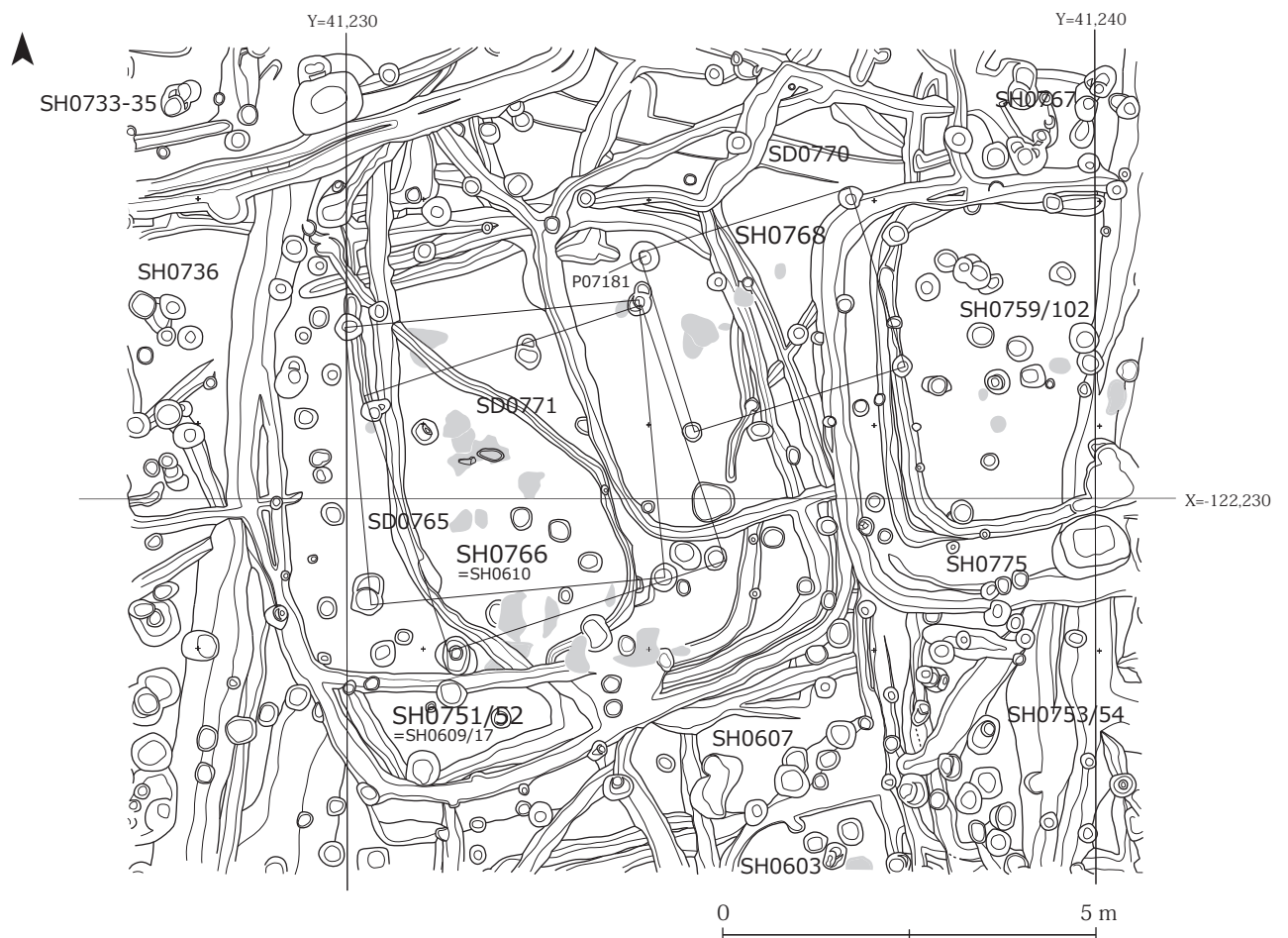


Fig.15 SH0751/52・SH0766・SH0768・平面図 (S=1/100)

から北東方向へSD0770がのびており、排水溝である可能性が高い。出土遺物は弥生時代の山中式頃の土器で占められており、その頃の建物であったと想定できる。

SH0766は東西6.8m、南北6.4mの規模を持ち、柱間の距離は3.7m前後ある。床面の中央に焼土を持つ。床面直上で良好な遺物が出土しており、それらの特徴から山中式から廻間式頃の建物だと判断される。

SH0768はやや北東へずれた位置にあり、東西6.0m、南北5.3m程度の規模を持つ。支柱穴は4本柱で、柱間の距離は東西2.9m、南北2.4mある。焼土は床面中央付近にあり、南辺の中央からやや西側に寄った位置で浅い土坑状の落ち込みを確認した。出土遺物には廻間I式頃の土器が出土しており、弥生時代末期から古墳時代前期初頭の建物である。

SH0750はCY43～44区で確認した。下部の調査時に全て掘りきってしまったため記録に反映されていないが、SH0751/52/66の上面で確認している。出土遺物に6～7世紀の須恵器等が含まれていることから、古墳時代後期の建物であったものと考えられる。

SH0727 (=SH0665) /30/36/38 (Fig.16)

第6次調査の西区と第7次調査区の中区にまたがる、CX41～CY43区で検出した。煩雑であるが、4棟が重複していると判断した。新旧関係はSH0730が最も新しい建物であることは理解できたが、他は不明である。多くの建物の東側が検出できていないため詳細不明である

が、南北規模はSH0727が5.2m、SH0730が4.5mを測る。唯一、規模の判るSH0730は、東西3.7m、南北4.0mと規模が小さい。いずれも焼土の確認はないが、4本柱の支柱穴をもつ。

出土遺物には、一部に弥生土器を含むものの6世紀代の須恵器や土師器で占められることから、多くは古墳時代後期の建物だと想定される。

SH0729 (=SH0654) (Fig.16)

第6次調査の西区と第7次調査区の中区にまたがる、CV42～CW43区にかけて検出した。表土直下で周壁溝を検出しており、削平が著しかった。規模は5.4m程度の正方形で、4本柱の支柱穴をもつ。柱間の距離は東西2.8m、南北2.5mである。焼土は床面の中央に僅かに認められる。ちょうど南辺の中央から北に1.2m程、小さな溝が掘られており、間仕切り溝の可能性もある。また、この間仕切り溝があるためか、貯蔵穴らしき土坑の位置もやや西側に寄っている点は特筆される。

なお、出土遺物が乏しいことから、詳細な時期比定は困難である。

SH0711 (=SH0659-61) (Fig.17)

第6次調査の西区から第7次調査区の中区にまたがる、CT42～CV43区で検出した。第6次調査の際には3棟の重複を考えたが、この内の1棟は南側にあるSH0778 (=SH0651)の北辺周壁溝であった。平面の規

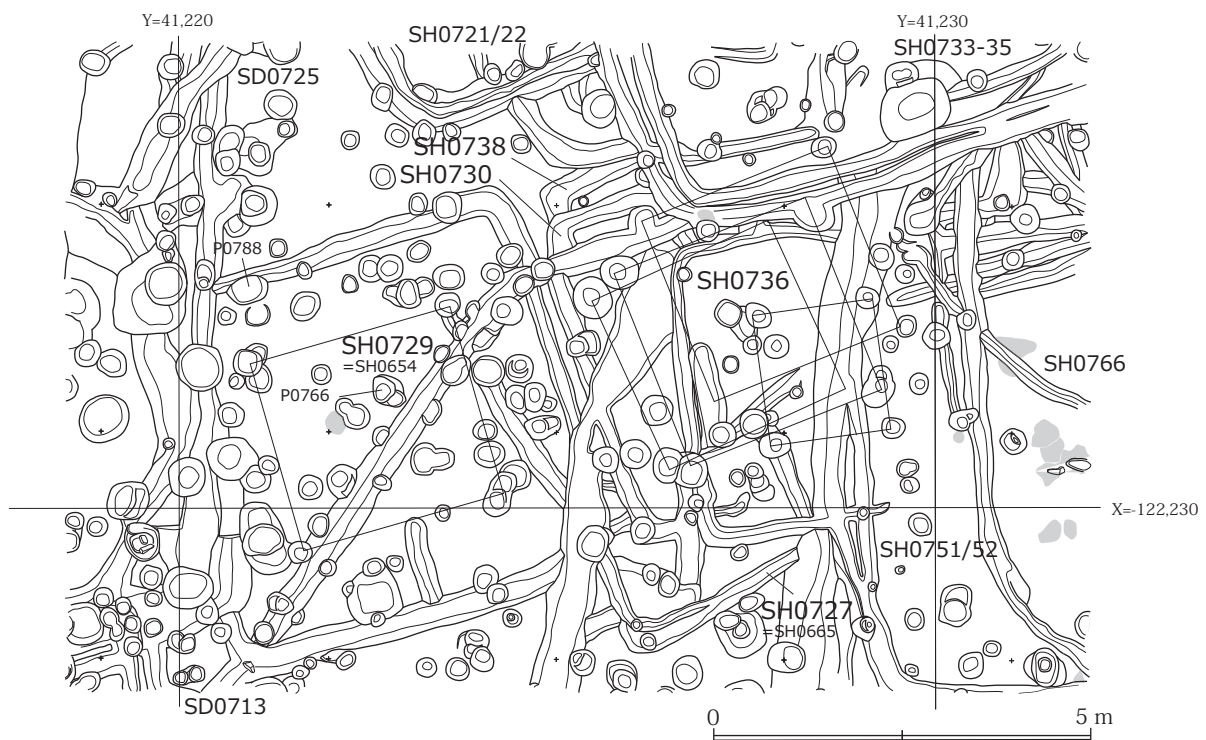


Fig.16 SH0729・SH0727/30/36/38 平面図 (S=1/100)

模は東西 6.0 m, 南北 5.5 m の方形で, 柱間の距離は 3.4 m 前後である。なお, 明確な焼土は確認できなかった。

出土遺物に須恵器が含まれていることから, 古墳時代後期の建物である可能性が高い。

SH0710 (=SH0655) (Fig.17)

第 6 次調査の西区から第 7 次調査区の中・西区にまたがる, CS42 ~ CU44 区で検出した。平面の規模は 5.5 m で, 正方形を呈する。主柱穴は 4 本柱で, 柱間の距離は 2.6 m 前後である。床面中央に焼土があり, 南辺中央土坑を持つ。また, この土坑の左右には, 約 1 m 程度の間仕切りらしき溝が付随する。

出土遺物には床面直上で弥生土器が出土しており, 概ね弥生時代末期の建物だと考えられる。

SH0760 (Fig.18)

第 7 次調査区の北東の DA40 ~ DB41 区で検出した。北側が土砂の流出によって消失しているため詳細不明であるが, 東西 4.4 m 程度の小規模な建物である。主柱穴は 4 本柱で, 柱間の距離も 2.0 m 程度である。床面中央付近で小規模な焼土を確認した。

出土遺物に 5 世紀末から 6 世紀代の須恵器等があることから, この頃の建物だと考えられる。

SH0718 (=SH0685) · SH0737 (Fig.19)

SH0718 は第 7 次調査の北から中区にかけての CW39 ~ CX41 区にかけて検出した。多くの竪穴住居が重複しているが, 最も新しい建物である。6.0 m 四方の正方形で, 4 本柱の主柱穴をもつ。柱間は 3.0 m 前後を測る。明確な焼土は確認できなかったが, 炭化物と焼土塊が混在した部位があった。SH0737 は SH0718 の南東で検出した。SH0733-35/42 の上部にあるが, 不明な点が多い。

出土遺物には 6 世紀代の土師器と須恵器が多く含まれており, とともに古墳時代後期の建物である。

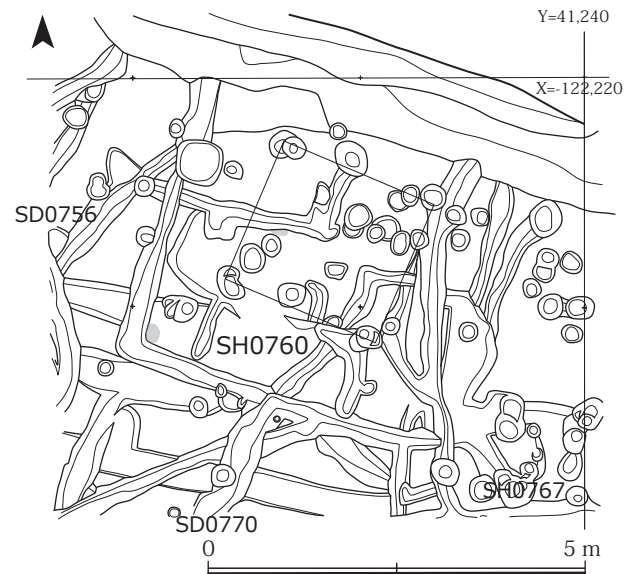


Fig.18 SH0760 平面図 (S=1/100)

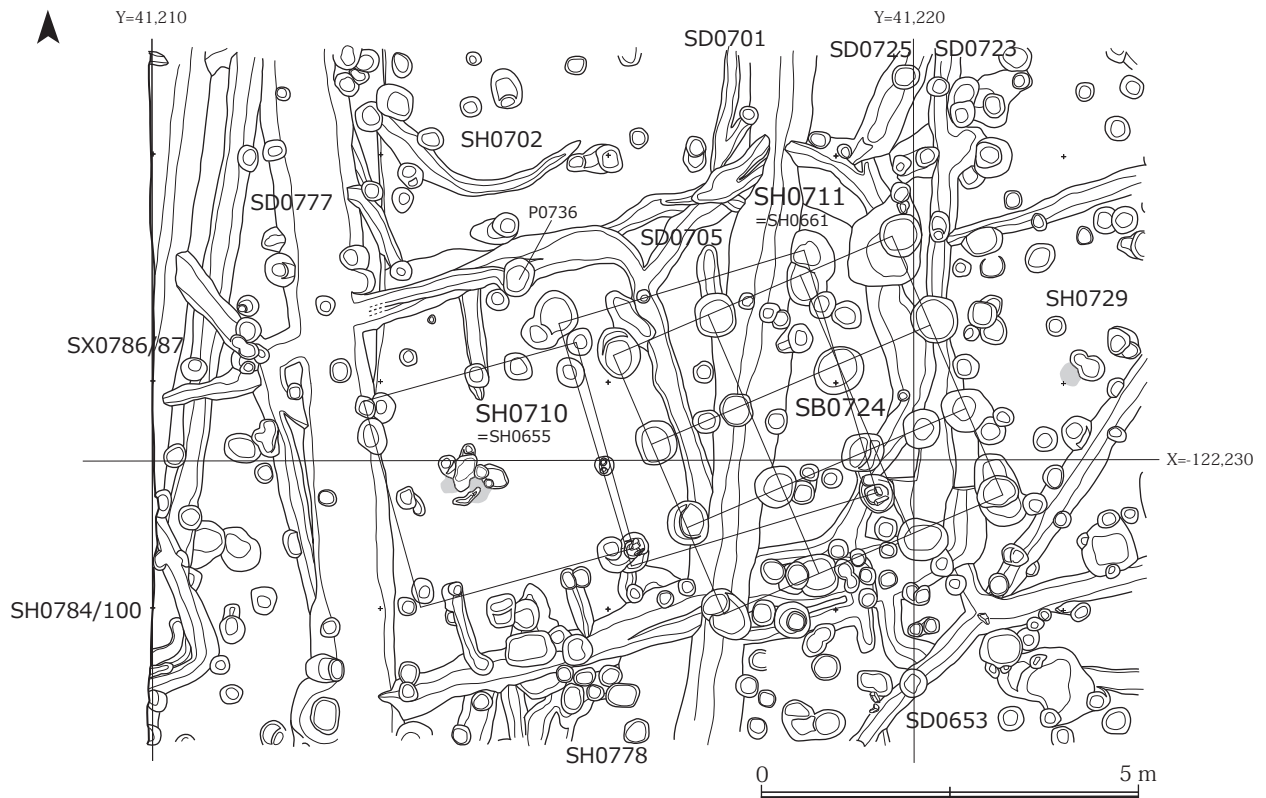


Fig.17 SH0710 · SH0711 · SB0724 平面図 (S=1/100)

SH0728・SH0721/22・SH0731/32・33-35/42

(Fig.19)

いずれも SH0718 の下部で検出した。著しく重複しているが、少なくとも 9 棟の建て替えが行われたと理解できる。この内、最も新しい建物は SH0728 で、SH0721 → SH0722 → SH0731/32 → SH0733 → SH0734 → SH0742 → SH0735 の順で古くなる。SH0733-35/42 は山中式頃の建物で、規模を縮小しながらほぼ同一場所で建て替えを行っている。その後、SH0731/32 に 2 回の建て替えを行った後、更に SH0721/22 へと建て替え、最終的に廻間式の SH0728 へと推移する。

これらの内、最も古い一群である SH0733-35/42 は、東側にある建物群である。この中でも、東西 6.8 m、南北 6.0 m の SH0735 から、やや規模を拡張して東西 7.7 m、南北 6.8 m の SH0742、SH0734 となり、その後東西 6.5 m、南北 5.7 m の SH0733 となりやや縮小する。柱間の距離も SH0733 が 3.5 m である他、3.5 ~ 4.0 m と規模が大きい。いずれも床面中央に焼土を持ち、南辺中央土坑を有す。特に、SH0735 の南辺中央土坑から山中式の

土器が出土しており、この頃の建物であることが分かる。

SH0733 の後、場所をやや西へ移して SH0731/32 が建てられる。他の建物の重複が著しいため、規模は不明であるが、ほぼ同一場所で建て替えている。柱間の距離は 4.8 m と大きい。焼土等の痕跡も確認できなかった。

SH0731/32 に次いで建てられるのが、SH0721/22 である。この 2 棟は SH0731/32 から更に西へ移動している。柱間の距離が 5.0 m 前後あり、平面形も 9 m 程度に復元される。山中式から廻間式までの建物である。

SH0721/22 の後、南東へ移動して SH0728 が建てられる。SH0728 も柱間の距離は 4.8 m 程度あり、比較的規模の大きい建物である。周壁溝から廻間式の瓢壺が出土しており、この SH0728 までの間に廻間式に移行するようである。

SH0688 (Fig.19)

第 7 次調査の北区の CV38 ~ CW40 区で検出した。SH0675 や SH0721/22 (=SH0786) 等よりも古い建物である。一辺 6.5 m 程度の正方形で、柱間の距離は 3.2

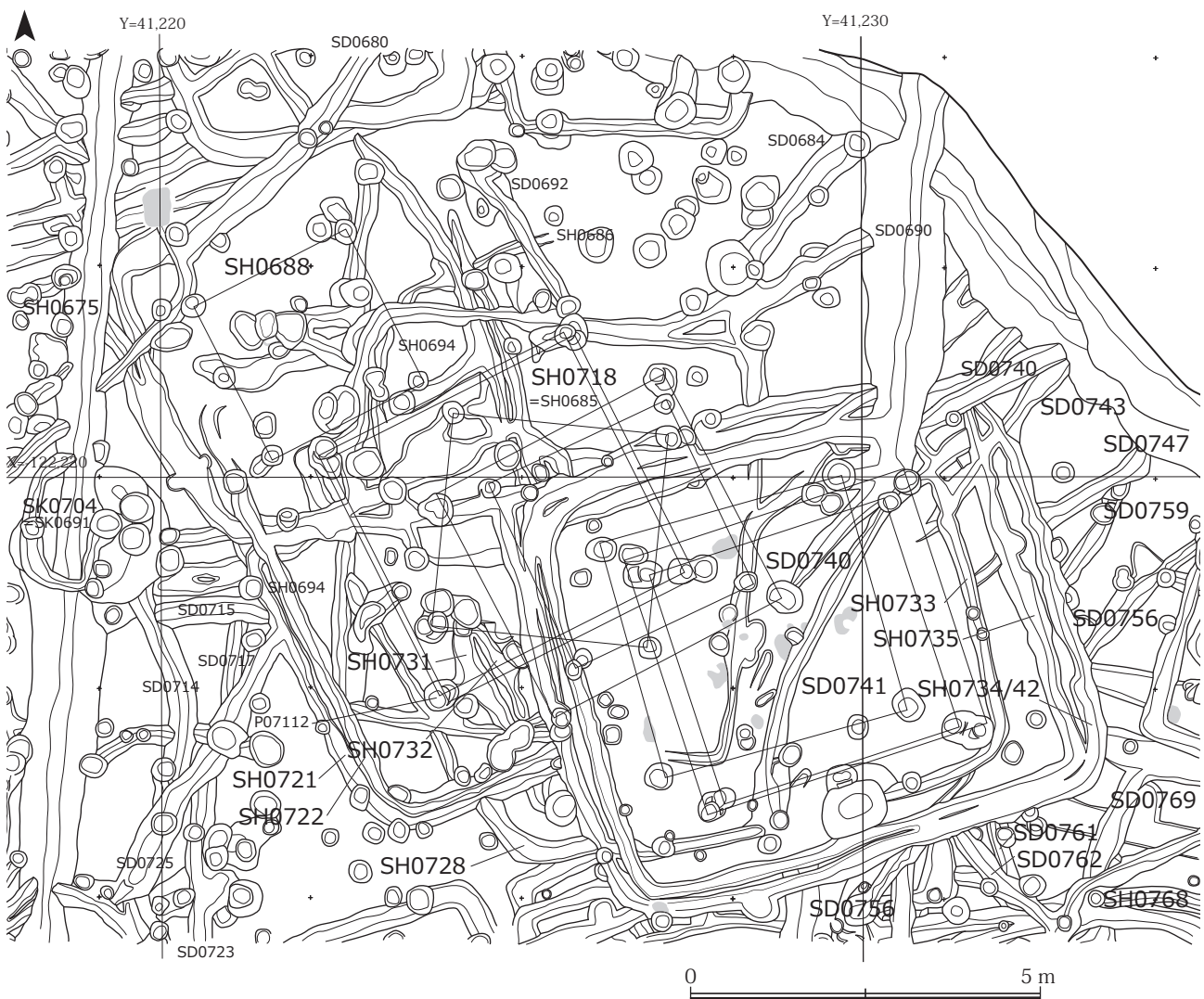


Fig.19 SH0718・SH0721/22・SH0728・SH0731/32・SH0733/34/35/42・SH0688 平面図 (S=1/100)

mを測る。焼土や南辺中央土坑は確認できなかった。

出土遺物は弥生土器のみで、須恵器は含んでいなかった。詳細な時期比定をできる資料はないが、概ね弥生時代後期の建物だと推定される。

SH0678 (Fig.20)

第7次調査の北区のCV37～CW38区で検出した。南北規模は不明であるが、東西4.5mを測る。柱間の距離は2.0m前後で、規模が小さい。床面中央に焼土を検出した。

遺物の出土は少なかったが、山中式を含む弥生土器のみで、弥生時代後期の建物だと推定される。

SH0673/74/77 (Fig.20)

第7次調査の北区のCT37～CV38区で検出した。3棟の建物が重複しており、東側のSH0677→SH0674→SH0673と、西側へ新しくなる。SH0708/09とも重複するが、SH0673/74/77の方が新しい建物である。

丘陵の北端であるため土砂の流失が激しく、埋土の大

部分は流れてしまっているが、東西6m以上の規模を持つようである。焼土は床面中央に確認できず、南辺の周壁溝辺りで2ヶ所確認されている。これがカマドになるのか、別の建物の焼土になるのかは不明である。

出土遺物は少ないが、土師器や須恵器があることから、古墳時代後期の建物だと考えられる。

SH0708 (=SH0681) /0709 (=SH0675) (Fig.20)

第7次調査区の北区から中区のCT38～CV39区にかけて検出した。2棟が重複するが、西側のSH0708の方が新しい。また、SH0673/74/77とも重複するが、これらよりもSH0708/09の方が古い建物である。SH0708は東西6.0m、南北5.5mある。SH0709はやや規模が小さく、東西5.6m、南北5.5mである。柱間の距離もSH0708が東西3.5m、南北3.2mであるのに対し、SH0709が東西3.0m、南北2.5mを測る。床面の中央付近に焼土を確認したが、SH0673の周壁溝によって破壊されている。出土遺物は少なくはっきりしないが、概ね弥生土器のみであることから、弥生時代後期頃の建物だと考えられる。

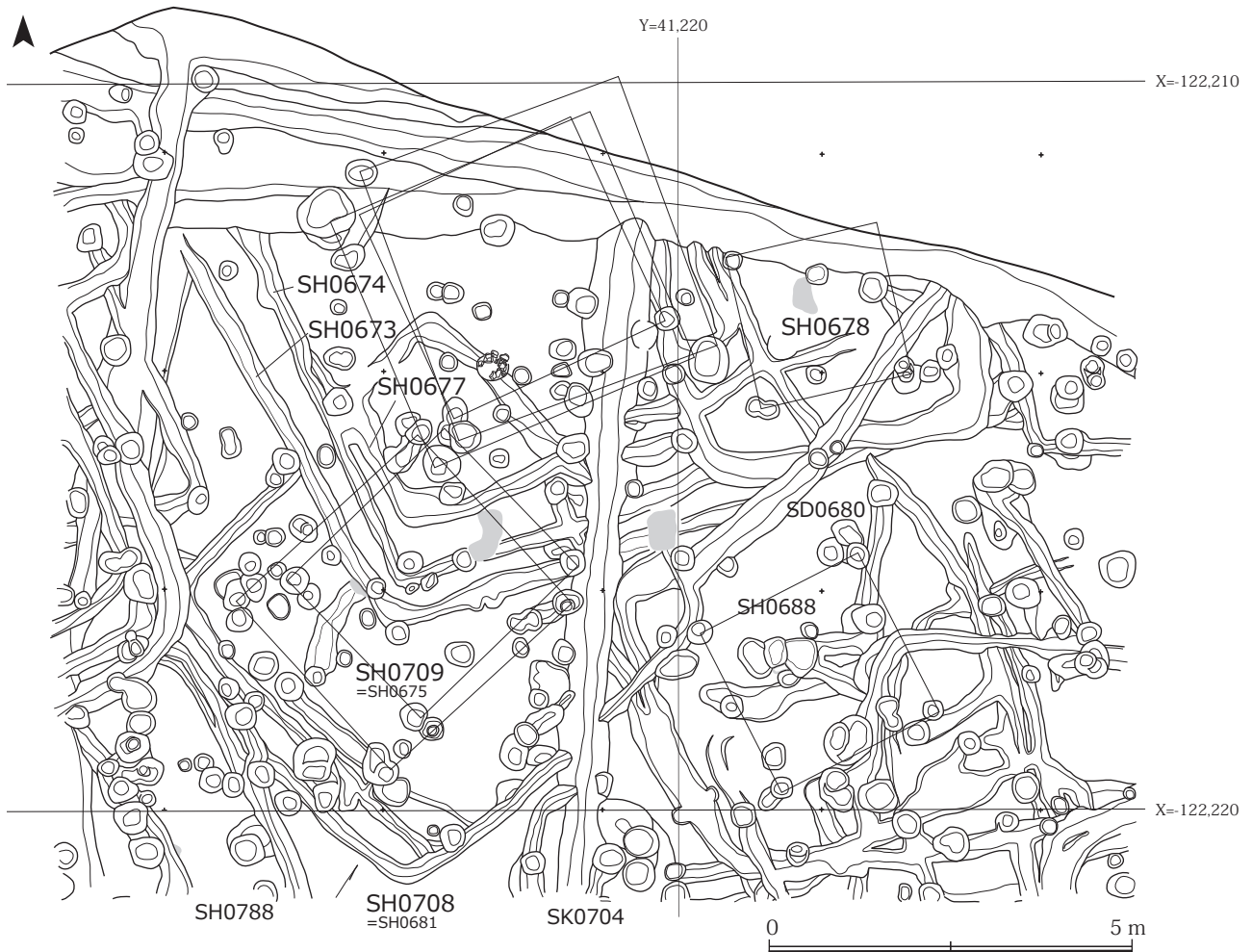


Fig.20 SH0708/09・SH0673/74/77・SH0678 平面図 (S=1/100)

SH0707 (=SH0676) /0788 (Fig.21)

第7次調査の北区と西区にまたがるCS39～T41区にかけて検出した。2棟が重複するが、新旧関係は把握できなかった。ただし、2棟とも北側にあるSH0790-92よりも古い建物であることは確認できた。ともに調査区外へと続いているため詳細は不明であるが、SH0707の柱間の距離は東西2.8m、南北2.3mを測る。焼土は1ヶ所のみで確認しており、SH0788の地床炉である可能性が高い。

出土遺物には一部須恵器が含まれるが、SD0777の混入の可能性が高く、他は弥生土器のみで占められることから、弥生時代後期頃の建物である可能性が高い。

SH0790/91/92 (Fig.21)

7次調査区の西区のCS37～CS39区で、主に南東側を検出した。3条の周壁溝があり、少なくとも3回以上の建て替えが行われている。SH0790は他と重複していないが、SH0792よりもSH0791の方が新しい。ただし、いずれもSH0707/88よりも新しい建物である。なお、土砂の流出が北側で顕著なため、北辺は確認できていない。東辺で少なくとも4.5m以上の規模を持つが、大部分は調査区外のため、焼土の有無、支柱穴の構造等是不明である。

出土遺物は少ないものの、弥生土器のみであることから、概ね弥生時代後期頃の建物だと考えられる。

SH0797/98/99 (Fig.21)

7次調査区の西区CS37～CS38区で南東隅のみを検出した。3条の周壁溝があり、建て替えを3回以上行っている。他同様、北側の流出が激しいため、詳細な規模等は不明である。

出土遺物は少ないものの、弥生土器が多いことから、概ね弥生時代後期頃の建物だと考えられる。

SH0793 (=SH0672) (Fig.21)

第7次調査の北区と西区にまたがるCS38～CT38区にかえて検出した。SH0790-92との新旧関係を把握することはできなかった。規模、構造等不明な点が多い。

出土遺物は少ないものの、弥生土器が多いことから、概ね弥生時代後期頃の建物だと考えられる。

SH0794/95 (Fig.21)

7次調査区の西区CS36～CS37区で南東隅のみを検出した。少なくとも2回以上の建て替えが行われたものと考えられる。西側は調査区外で、かつ北側の土砂の流出が著しいため、詳細な規模、構造等是不明である。

他と同様、出土遺物に弥生土器が多いことから、概ね弥生時代後期頃の建物だと考えられる。

SH0796 (Fig.21)

7次調査区の西区で南西隅のみを検出した。その他の範囲は地山の流出によって失われている。規模等の詳細は不明である。

他と同様、出土遺物に弥生土器が多いことから、概ね弥生時代後期頃の建物だと考えられる。

SH0784/100

7次調査の西区のCR44区で、南東隅のみを検出した。大部分が調査区の外であるため、規模等は不明である。少なくとも2棟が重複しているようで、外側をSH0784

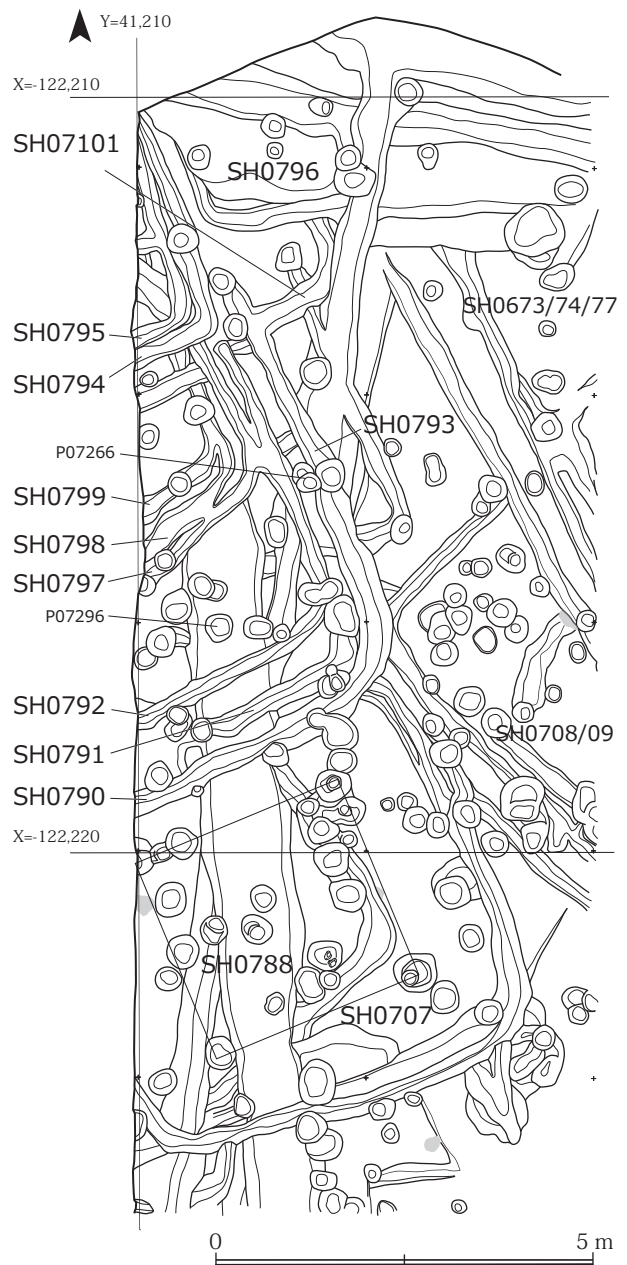


Fig.21 SH0788-99 平面図 (S=1/100)

としている。

出土遺物は弥生土器や土師器のみで占められ、概ね廻間式頃の年代が考えられる。このことから、弥生時代末期から古墳時代前期初頭頃の建物だと考えられる。

2 掘立柱建物

SB0636 (Fig.22)

第6次調査の南西区のCU47～CV47区で検出した、1×2間の掘立柱建物である。柱間の距離は2.0mある。いずれの柱穴も0.5m程度の円形で、検出したレベルに拳大の礫を多く含んでいた。柱穴自体の掘り込みは検出面から、0.5m程ある。

各柱穴の埋土中の土器は、弥生土器や土師器、須恵器の小片ばかりであるが、柱穴の検出が最上面であったこと、中世の区画溝であるSD0604等の方位にのること等から、中世後半の建物である可能性が高い。

SB0724 (Fig.23)

第6次調査区から7次調査の中区にまたがるCU42～CV43区にかけて検出した。3×3間の総柱建物であり、いずれも0.5～0.6m程度の円形の柱穴である。柱間の距離は1.3m前後であり、掘り込みは深い所で0.7mある。古墳時代後期のSH0711の北東主柱穴と重複するが、SB0724の方が新しい建物であることを確認している。

出土遺物には弥生土器や土師器、須恵器があるが、いずれも混入である蓋然性が高い。古墳時代後期以降の建物であることは間違いなく、おそらく古代の掘立柱建物なのであろう。

3 土坑

SK0621 (Fig.24)

第6次調査区の中央付近のCY46・47区で検出した。中世の溝SD0604と重複するが、平面で新旧関係を判断することができず、SD0604掘削後に検出している。平面形は東西1.5m以上、南北1.9m程度の円形で、深さは0.8mと深い。埋土の中位辺りには、人頭大から拳大の自然石を多く含む。詳細な記録はないが、後述するSK0639と同質で、棺桶を納めた土坑墓であろう。

出土遺物には土師器の羽釜等があり、中世後半の土坑だと考えられる。

SK0626 (Fig.24)

第6次調査区のCY45区で検出した。東西0.8m、

南北1.0m程度の小規模な円形の土坑である。弥生時代中期末から後期初頭のSH0622よりも新しい土坑である。検出面からの深さは、0.2mと浅い。

出土遺物が弥生土器のみであることから、弥生時代末期頃の土坑だと判断される。

SK0664 (Fig.25)

第6次調査西区のCX44区で検出した。東西1.3m、南北1.5mのほぼ円形を呈し、深さ0.2mのすり鉢状の土坑である。

出土遺物は、弥生土器から古墳時代の土師器、須恵器

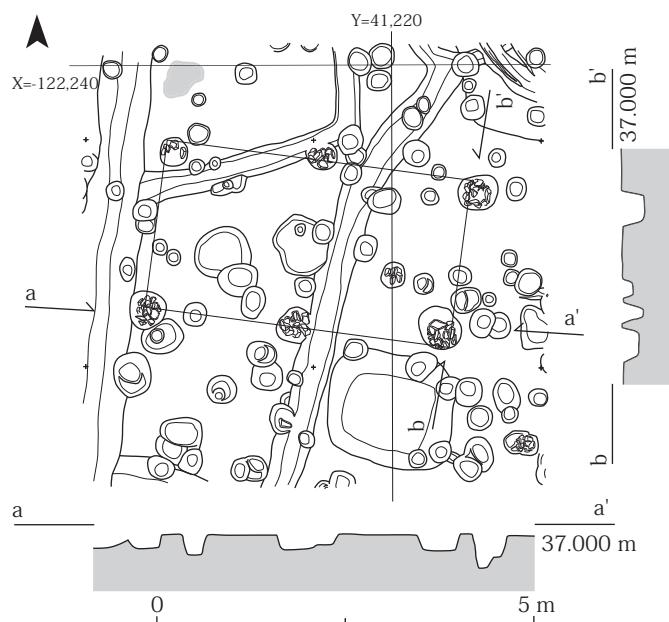


Fig.22 SB0636 平面・断面図 (S=1/100)

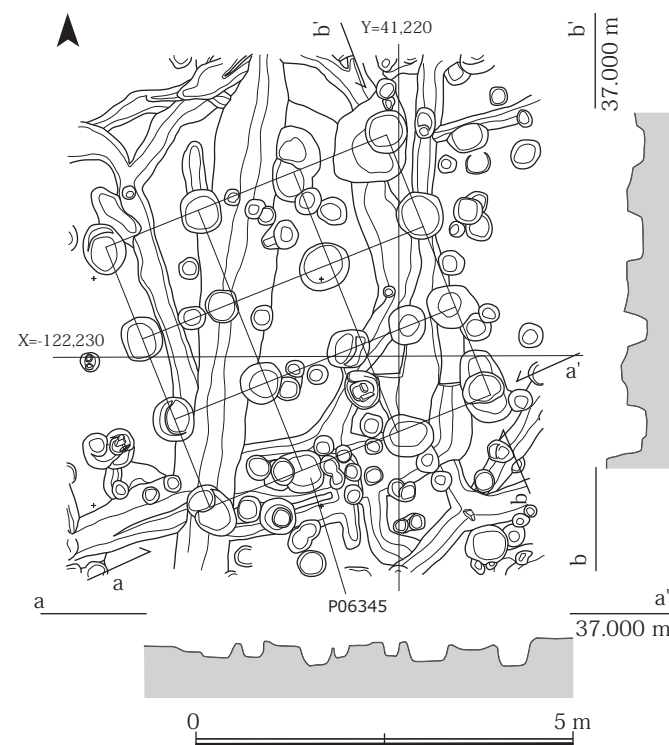


Fig.23 SB0724 平面・断面図 (S=1/100)

が混在しており、帰属時期の特定は困難である。

SK0704 (=SK0691)

第7次の北区から中区にかけてのCU39～CV40区で検出した。直径2.0m程度の不整形円形を呈す。基底面は凸凹が激しく、土坑でなく木の根などの痕跡の可能性もある。深い所で0.2m程度ある。

出土遺物には、6世紀代の土師器や須恵器が比較的多とまっており、古墳時代後期頃に埋没した可能性が高い。

SK0726 (Fig.24)

第7次調査の中区のCX41区で検出した。平面形は、東西1.8m、南北2.0m程度の隅丸方形に近い。深さは0.3m程度で、下部のSH0733-35等の調査時に掘りかたが全てとんでしまっている。SH0733-35等の竪穴住居よりも後出し、最も新しい遺構である。

出土遺物には、須恵器や土師器、弥生土器が混在する

が、これらは下部の遺構の混入だと考えられる。土師器の羽釜が出土していることから、中世後半の土坑だと考えられる。

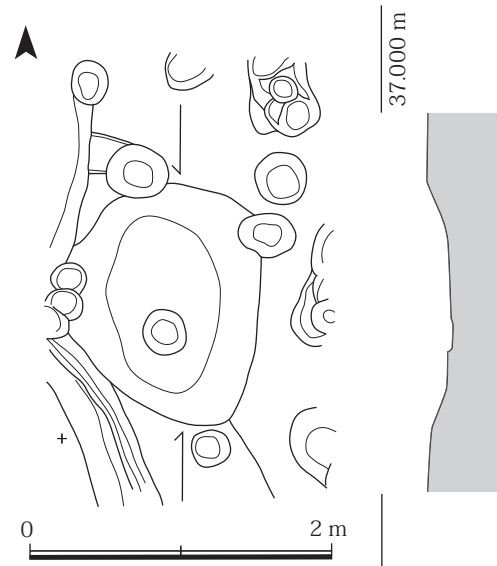


Fig.25 SK0664 平面・断面図 (S=1/50)

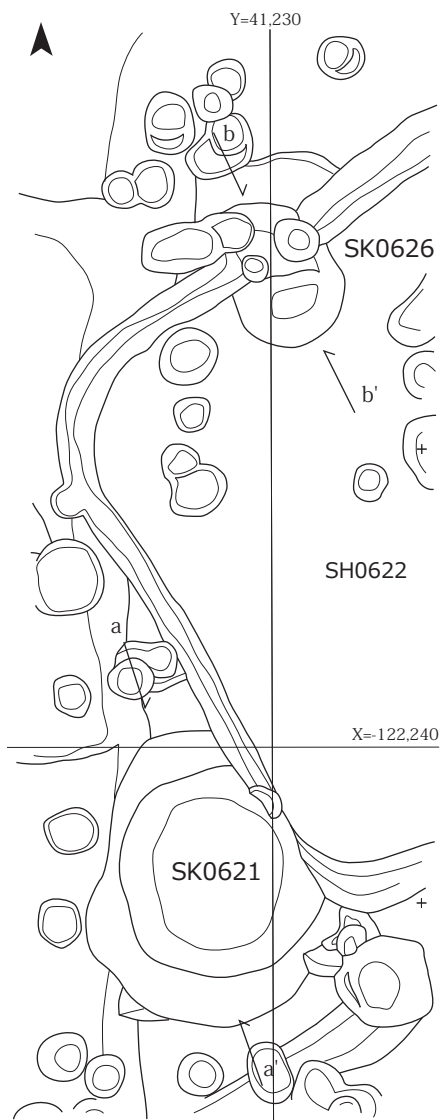


Fig.24 SK0621・SK0626 平面・断面図 (S=1/50)

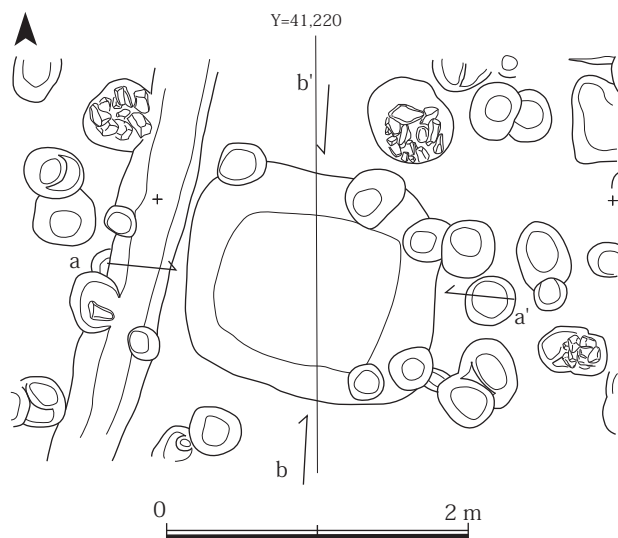
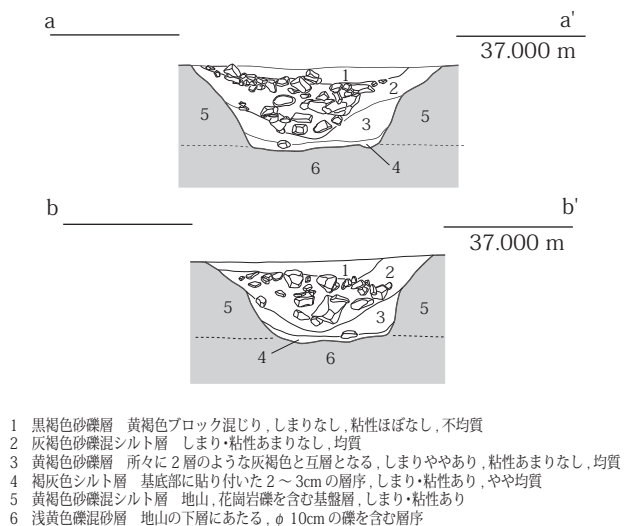


Fig.26 SK0639 平面・断面図 (S=1/50)



- 1 黒褐色砂礫層 黄褐色ブロック混じり, しまりなし, 粘性ほぼなし, 不均質
- 2 灰褐色砂礫混シルト層 しまり・粘性あまりなし, 均質
- 3 黄褐色砂礫層 所々に2層のような灰褐色と互層となる, しまりややあり, 粘性あまりなし, 均質
- 4 褐灰色シルト層 基底部に貼り付いた2~3cmの層序, しまり・粘性あり, やや均質
- 5 黄褐色砂礫混シルト層 地山, 花崗岩礫を含む基盤層, しまり・粘性あり
- 6 浅黄色礫混砂層 地山の下の層にあたる, φ 10cmの礫を含む層序

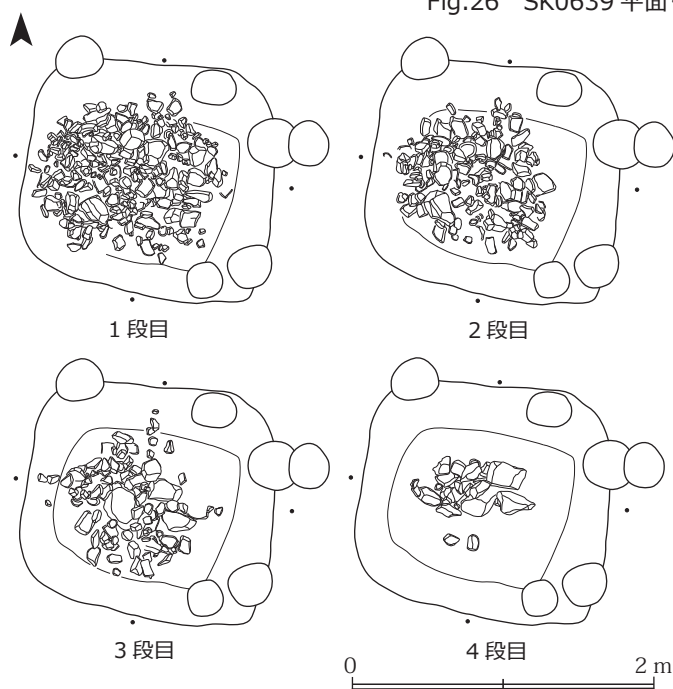


Fig.27 SK0639 礫出土状況図 (S=1/50)

SK0639 (Fig.26)

第6次南西区のCV48区で検出した。東西1.8m, 南北1.5mの隅丸方形を呈す。深さは0.6mと比較的深い。埋土は4層で構成され, 主に2層目に人頭大から拳大の礫が多く含まれている。SK0621と同質な構造で, 土坑墓である可能性が高い。

出土遺物には土師器の羽釜等があり, 中世後半の土坑だと考えられる。

4 溝

SD0749 (=SD0604) (Fig.28)

第5次調査区から第7次調査区にかけて検出した南北方向の溝である。第5次ではSD0568, 第6次でSD0604, 第7次でSD0749としている。やや東へふつ

ているが, 総延長25m程を確認した。埋土は褐色砂礫層で, 比較的しまりがあり, 一見して現代の地割溝の埋土とは異なっている。なお, 南側で深く, 検出面から0.4mを測るが, 北側が徐々に浅くなり消失している。

出土遺物には弥生土器や土師器, 須恵器等が混在しているが, 中世後半の羽釜等が出土しており, 概ね中世後半の遺構だと考えられる。

なお, SD0749は, 巨視的にみると第7次調査区のSD0748や第5次調査のSD0501, 第4次調査のSD0409, 第3次調査のSD0373等と併行, 直交する関係を有する。これらはいずれも中世後半の溝で, 時期もほぼ同一であり, 屋敷地等を区画する溝になると考えられる。

SD0748 (Fig.28)

第7次調査の東区で検出した東西方向の溝である。ちょうどSD0749から重複しながら東へ派生して10m程のびる。より東側は削平のため, 消失している。埋土は褐色砂礫層で, SD0749と同質のものである。

出土遺物に中世の遺物はないが, 埋土の様子や位置関係等から, 中世後半の区画溝だと判断される。

SD0671 (Fig.28)

第7次調査区の北端で検出した東西方向の溝である。北側で現代の地割溝と重複しているため, 詳細は不明であるが, 長さ15m以上を確認した。第3~5次調査区で検出していたSD0568, SD0409, SD0373と併行する溝で, 埋土の質からも中世後半の溝だと判断した。

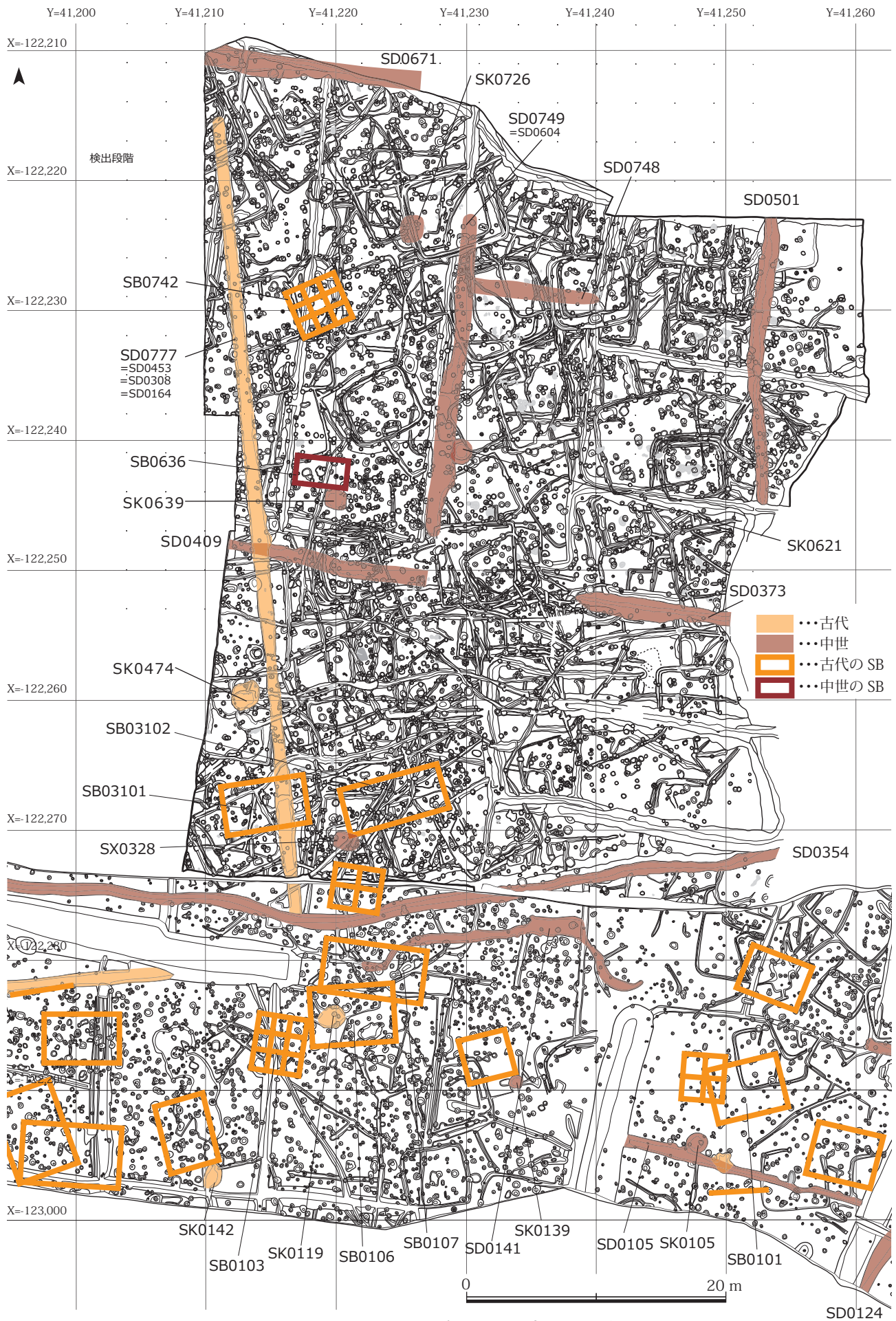


Fig.28 古代・中世の遺構配置図 (S=1/400)

SD0777 (Fig.28)

第7次調査区の西端で検出した南北溝である。第1次調査区のSD0164, 第3次調査区のSD0308, 第4次調査区のSD0453と同一の溝で、総延長約62mある。両端は途切れているようだが、ちょうどその辺りで西へ直角に折れ曲がっている。

溝の幅は約1.4m程度の均整がとれており、N-5°-Wの角度で直線的にのびる。また、深い所で0.6mあり、断面形状が逆台形のしっかりとした作りの溝である。埋土は砂礫混シルト層であり、水が常時流れていたような痕跡は窺えないことから、何らかの区画溝として機能していた可能性が高い。

出土遺物には、弥生土器や6世紀代の土師器、須恵器が多く含まれるが、これらは他の竪穴住居からの混入だと想定される。これまでの調査で少ないながらも7世紀代に下る資料が含まれていることから、古代の区画溝だと理解される。

SD0637 (Fig.29)

第4次調査区で調査したSD0460から続く、南北方向の溝である。南端はSD0405/68に接続し、北端はSH0634の南西隅に合流している。総延長は14mある。深さ0.2～0.3m程度で、部分的には黄褐色の地山由来の土層が溝の埋土上部を覆っており、暗渠になっていた可能性がある。他の溝が竪穴住居の隅から派生しているものが多いが、このSD0637はSD0561から派生して北進している。

出土遺物には、弥生土器のみで占められている。時期的にも古手のものが多く、弥生時代後期初頭まで遡る可能性がある。

SD0618 (Fig.29)

SH0603/99の南辺中央土坑から北東方向へのびる溝である。北東では他の竪穴住居と重複するため不明となっているが、4m分を確認している。

出土遺物が少なく不詳であるが、弥生末期の溝のようであり、SH0603/99の年代とも矛盾しない。

SD0758 (Fig.29)

SH0603/99の北東隅から派生する北東方向へのびる溝である。3m分を検出したが、より北東は重複が著しく不明である。

出土遺物には弥生土器の小片ばかりであるので詳細不明である。弥生末期の溝のようであり、SH0603/99の年代とも矛盾しない。なお、紡錘車が出土した点は特筆される。

SD0625 (Fig.29)

SH0622の床面中央付近から、北東方向へのびる溝である。重複しているため不正確であるが、おそらくSH0631の北東隅から派生していたのであろう。5m分を確認したが、それ以东は重複により失われている。

出土遺物が少なく不詳であるが、概ね弥生土器のみで占められる。SH0631の時期も弥生時代である可能性があり、矛盾しない。

SD0765 (Fig.29)

SH0766の南辺中央から北東方向へのび、その後北西へと屈曲する。南端は細くなる点、北西へ向く点等から、他の溝とは様相が異なるかもしれない。

SD0662/63 (Fig.29)

SH0633/47の北東隅から北東方向へのびる溝である。8m分を検出したが、重複のため北東側が消失している。SD0740/41/43やSD0687/95等がこの延長の可能性もある。

出土遺物は弥生土器のみであることから、弥生時代末期頃の溝であり、SH0633/47の年代とも矛盾しない。

SD0713 (=SD0653) (Fig.29)

SH0779の北東隅から派生し、北東方向へのびる溝である。SH0778やSH0729と重複しながら、総延長14mのびる。さらに東へと続くが、重複して不明となる。

出土遺物は弥生土器のみであり、弥生時代末期の溝であり、SH0779の年代とも矛盾しない。

SD0719/23 (Fig.29)

SH0778の北東から派生し、北東ないし北方向へのびる溝である。約10m検出したが、北側は重複のため消滅している。

出土遺物には、弥生土器の他、土師器や須恵器も出土しており、6世紀頃の溝である可能性が高い。SH0778の年代とも矛盾しない。

SD0725 (Fig.29)

SH0711の北東から派生して北東方向へのびる溝である。5m程度検出しているが、北東側は重複のため消失している。

出土遺物には、弥生土器の他、土師器や須恵器も出土しており、6世紀頃の溝と考えられる。SH0711の年代とも矛盾しない。

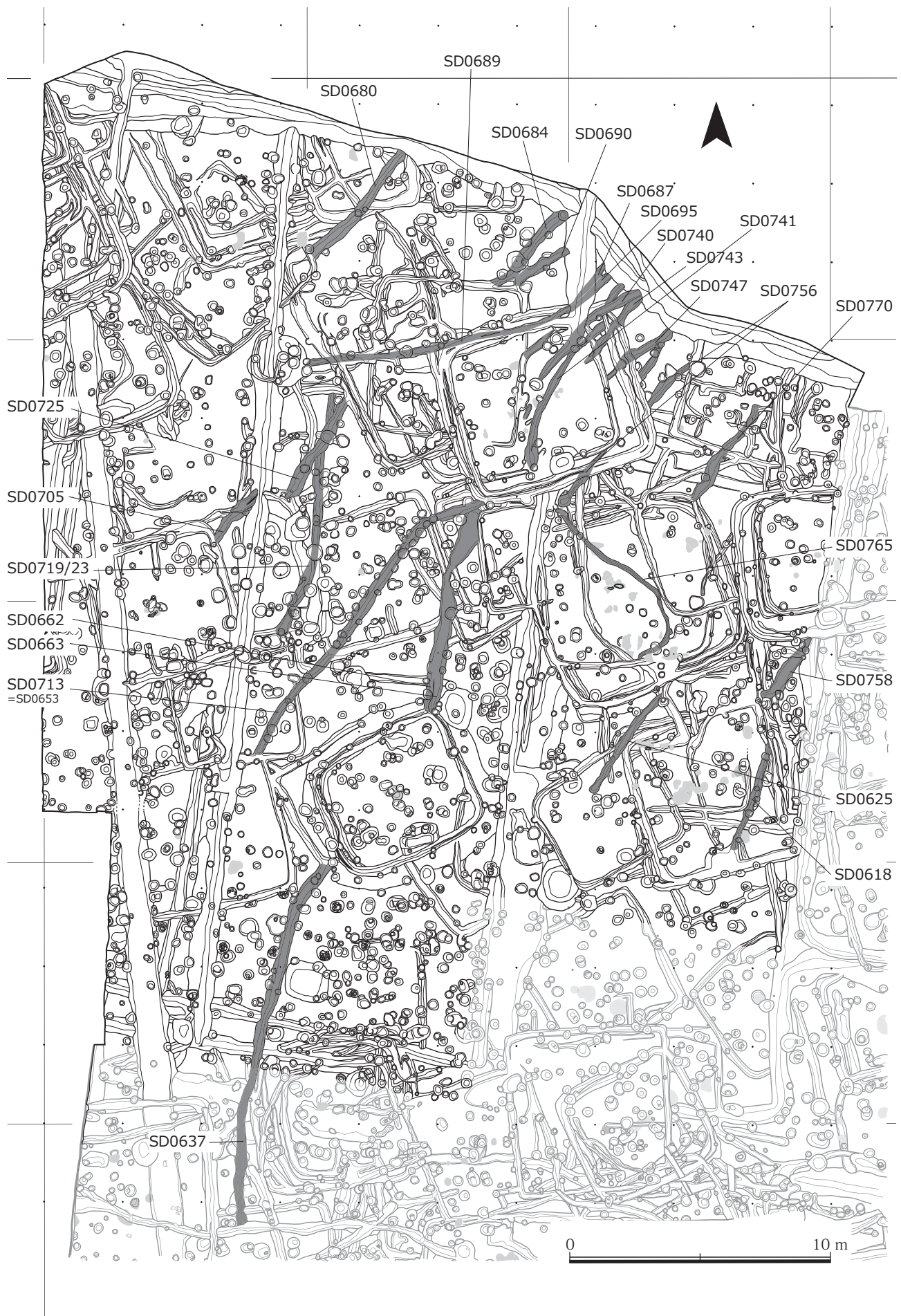


Fig.29 竪穴住居に付属する排水溝等の平面図 (S=1/200)

SD0680 (Fig.29)

SH0708/09の南東隅から派生する、北東方向へのびる溝である。他の竪穴住居は北東隅に接続するが、SD0680の南東隅となっている点の特異である。

出土遺物は少ないながら弥生土器のみで占められており、弥生時代末期の溝だと考えられる。SH0708/09の年代もはっきりしていないため、特定できないが、大きくは矛盾していない。

SD0689 (Fig.29)

SH0733-35の北辺を東西にのびる溝である。西側はSK0705から始まり、西側は調査区外へと続く。総延長は13m程ある。他の溝が竪穴住居の隅から派生しているが、このSD0689はそのような傾向は窺えず、単独の溝であった可能性がある。

出土遺物は弥生土器が多く、弥生時代後期～末期頃の溝だと考えられる。

SD0684 (Fig.29)

SH0728の北東隅から派生し、北東方向へのびる溝である。出土遺物が少なく帰属時期は不明であるが、SH0728の年代が弥生時代末から古墳時代前期初頭なので、この頃の溝としてよい。

SD0690 (Fig.29)

詳細は不明であるが、SH0721/22の北東隅から派生する溝である可能性が高い。出土遺物が少なく帰属時期は不明であるが、SH0721/22の年代が弥生時代末から古墳時代前期初頭なので、この頃の溝としてよい。

SD0687/95 (Fig.29)

2～3m分のみ検出した。竪穴住居に付随する排水溝の可能性が高いが、詳細は不明である。出土遺物が少なく、年代も不明である。

SD0740/41/43 (Fig.29)

SH0733-35の南辺中央土坑から派生する、北東方向へのびる溝である。約8m検出したが、北東側は消失している。

出土遺物は弥生土器のみで占められており、弥生時代後期頃の溝である。SH0733-35の年代とも矛盾しない。

SD0747 (Fig.29)

詳細は不明であるが、SH0738の北東隅から派生し、北東方向へのびる溝である。8m程度検出した。出土遺物が少なく時期不明であるが、SH0738が古墳時代後期

の年代であるので、この時期の溝である可能性が高い。

SD0756 (Fig.29)

詳細は不明であるが、SH0736の北東隅から北東方向へ派生する溝のようである。総長8mほど検出した。出土遺物には弥生土器が混じるものの、6世紀代の土師器があることから、古墳時代後期の溝だと考えられる。SH0736の年代とも矛盾しない。

SD0770 (Fig.29)

SH0751/52ないしSH0766の北東隅から、北東方向へ派生する溝である。5m分を検出した。出土遺物が少なく、年代も不明であるが、いずれも弥生時代後期の建物であることから、この時期の溝である可能性が高い。

5 小結

今回検出した遺構は、竪穴住居とそれに付随する柱穴や周壁溝、焼土、貯蔵穴らしき土坑（南辺中央土坑）が主である。これが著しく重複しているため、煩雑となっている。調査面積975㎡で、74棟以上の竪穴住居を確認している。これは、県下でも有数の遺構密度であり、発掘調査に時間がかかる要因となっている。

弥生時代後期の竪穴住居は、いずれも4本柱の支柱穴を持ち、焼土が床面の中央付近にあるものが多い。一辺は5～7mの正方形が基本であり、中には8mをこえる大規模なものまで含まれている。特に、南辺中央土坑を持つものは、八王子古宮式併行から山中式頃に限定できそうであり、廻間式まで残るかどうかが今後の課題である。なお、これまで重複が著しいため不明瞭であったが、今回のSH0710やSH0729によって、間仕切り溝らしき痕跡があることも確認された。

古墳時代の竪穴住居も、4本柱の支柱穴を持つものが主体である。これまでに明確なカマドを検出した例はなく、その有無は未だはっきりしない。ただし、床面に焼土が確認されず、周壁溝上にあるもの等があり、カマドの存在が推定されるものもある。

なお、これまでの第3～7次調査区までは、古代の遺構は顕著でない。いくらかの掘立柱建物があるが、中心はSD0777以西であるようで、古代関係の遺構は今後の調査に期すところが大きい。

中世では、初めて区画内に建物跡が確認された。予想していたように礫を含む柱穴が該当する可能性が高く、これまでの調査区内にも存在していた可能性は高い。中世の区画溝は現代の地割と併行しており、現代の筆境まで規制されている歴史が確認できた。

第V章 出土遺物

磐城山遺跡第6・7次から出土した遺物は、第6次が整理箱(55×33×10cm)に45箱、第7次が44箱あった。ほとんどが竪穴住居と溝から出土した弥生土器や古墳時代の土師器、須恵器である。数点ではあるが、古代の須恵器や灰釉陶器が出土した他は、中世後半の土師器の羽釜等がややまとまっている程度といえる。

この内、SH0622から出土した土器群は弥生時代中期末から後期初頭まで遡り得る資料であり、磐城山遺跡の竪穴住居の中で最も古い資料となる。住居址の床面でまとまった状態で出土しており、貴重な一括資料となろう。

さらに、SH0766からは鳥形土器と思しき異形土器が出土した点も特筆される。また、破片のため詳細は不明であるが、似たような異形土器がSH0790-92内の柱穴からも出土している。弥生時代から古墳時代前期頃の東海地方では、比較的多くの鳥形の製品例が知られているが、一般的に農耕に関わる祭祀具とされている。当遺跡の事例は、竪穴住居からの出土であり、その使用方法を具体的に示すものではないが、市内では初めての出土例となる。

以下、出土遺物を遺構のまとまりごとに解説する。これは、遺構の重複が著しいため明確に区別して遺物を取上げることが困難であったためである。そのため、各遺構では若干の遺物の混入が認められることを付記しておく。

なお、いずれの出土遺物も磨滅が激しく、調整等が不明なものが多い。器壁が1mm程度も剥落しているものも一定量存在し、遺存状態は決して良好とはいえない。

1 竪穴住居

SH0601 (Fig.30)

1・2がSH0601の出土遺物である。1は土師器の壺の底部で、2は宇田型甕の口縁部になろう。

SH0619 (Fig.30)

3がSH0619の出土遺物である。弥生土器の小片が多くあるが、3の砥石のみを図化した。あまり顕著ではないが、中央全体がやや磨滅する。裏面は磨滅しておらず、片面のみの利用だと考えられる。長さ21.2cm、幅14.2cm、厚さ3.6cm、重量1,361gを測る完形品である。砂岩製。

SH0602・SH0603/99・SH0606・SH0607 (Fig.31)

4～16がSH0603ないしSH0699からの出土遺物で

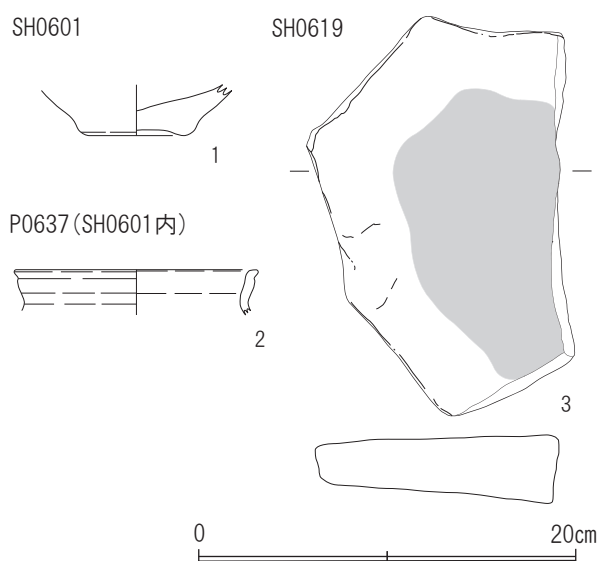


Fig.30 SH0601・SH0619 出土遺物 (S=1/4)

ある。12と13はSH0603、14～16はSH0699と特定できた資料である。また、11の土師器甕は、明らかに混入品で、おそらくSH0606やSH0607等に伴うものであろう。

8と13は高杯であり、それほど内湾していないものの廻間式の古段階頃だと考えられる。16はミニチュアの高杯であろうか、脚部に円孔を7ヶ所巡らす。この他、4の器台や5・6、14の壺、7・12等の甕等も、弥生時代後期末から古式土師器として問題ないものである。

17～32はSH0606の出土遺物である。ただし、SH0607やSH0602のものも含んでいる可能性は否めない。17・18は須恵器である。17の杯蓋は比較的端部に鋭さが残り、削りの範囲も広い。18の杯身は端部が丸みを帯びるものの、段を残す。ともに6世紀前半のものであろう。22、28～30は土師器の甕で、いずれも古墳時代の甕だろう。22は内外とも粗いハケ調整の甕で、板状工具でなく草木類を束ねた櫛状の工具のように観察される。28は宇田型甕で口径が22.0cmと大きい。31は壺の下半部で、4～5cmの粘土帯を螺旋状に巻き上げて整形し、胴部最大径辺りに擬口縁が観察される。32は砂岩製の砥石で、表面と右側縁の2面を使用する。よく磨滅しており、右側縁では擦痕も観察される。なお、24はミニチュア土器の壺形の蓋だと考えられる。外面は全体に板ないし棒状工具によるナデが施され、端部近くに2孔1対の穴がかけられる。おそらく弥生後期から古式土師器の時期のものであろう。

33はSH0602から出土した須恵器の杯身である。端

部は丸く、6世紀後半頃のものと考えられる。

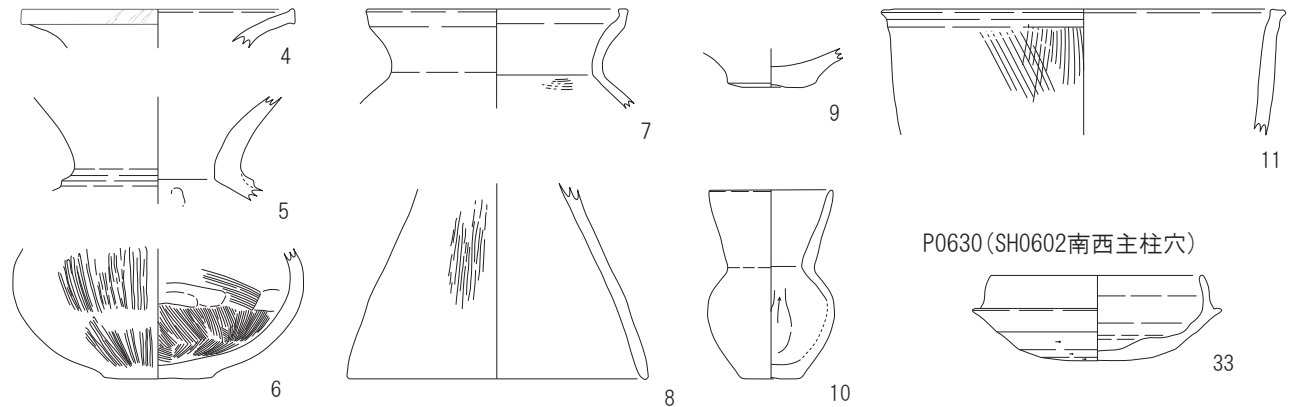
35はSH0707の南西主柱穴の出土遺物である。弥生土器とも土師器とも判別しかねる甕で、丸くおさめた端部を短く外反させている。

SH0622 (Fig.32・33)

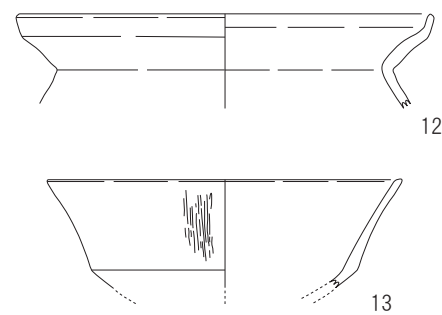
36～78までがSH0622の出土遺物である。36～49が甕及び鉢である。51～61が高杯ないし器台で、62～78は壺となる。50は土製の紡錘車である。

36～39は受口状口縁（以下、受口甕とする）の甕で

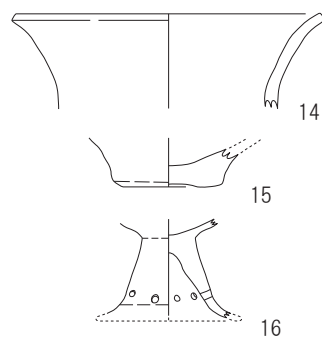
SH0603/99



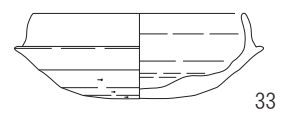
SH0603



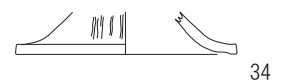
SH0699



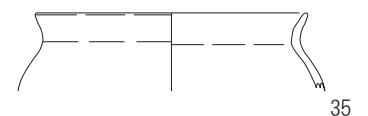
P0630 (SH0602南西主柱穴)



P0622 (SH0606内)



P0613 (SH0607南西主柱穴)



SH0606

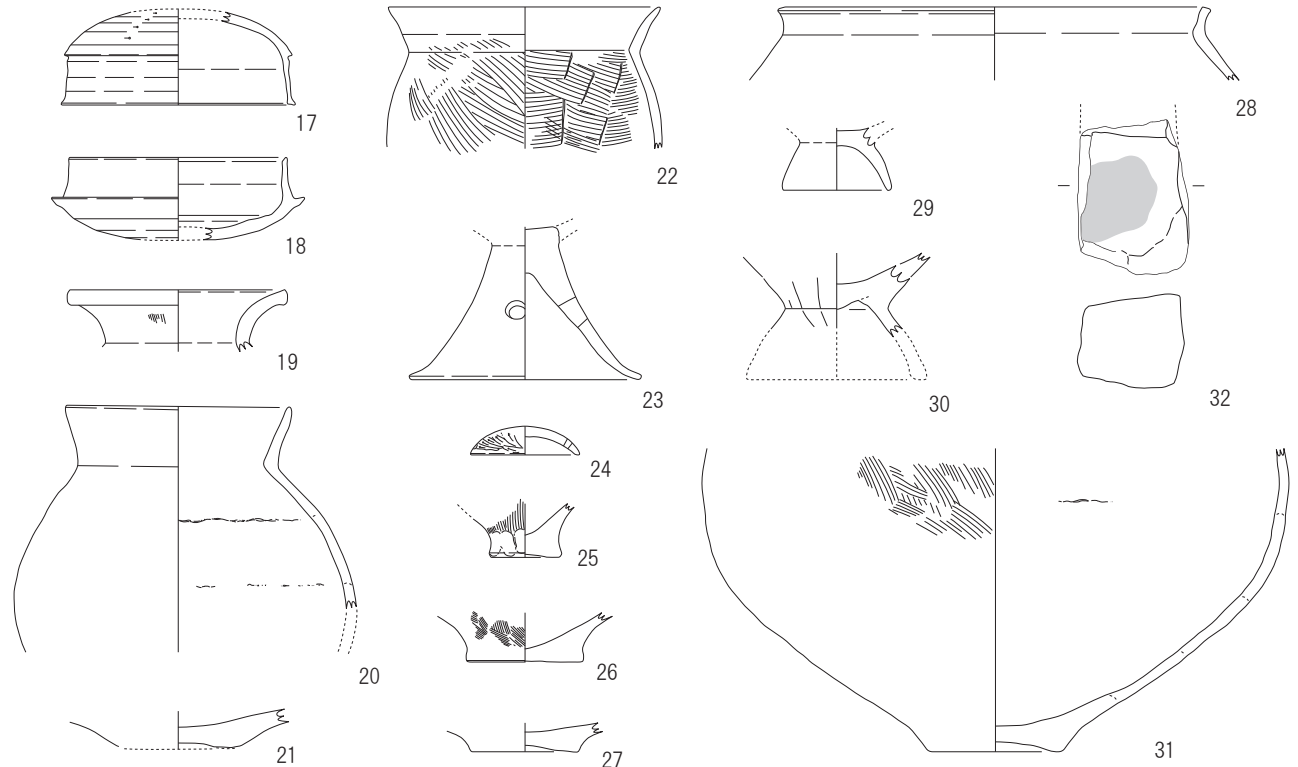


Fig.31 SH0603/99・SH0602・SH0606・SH0607 出土遺物 (S=1/4)

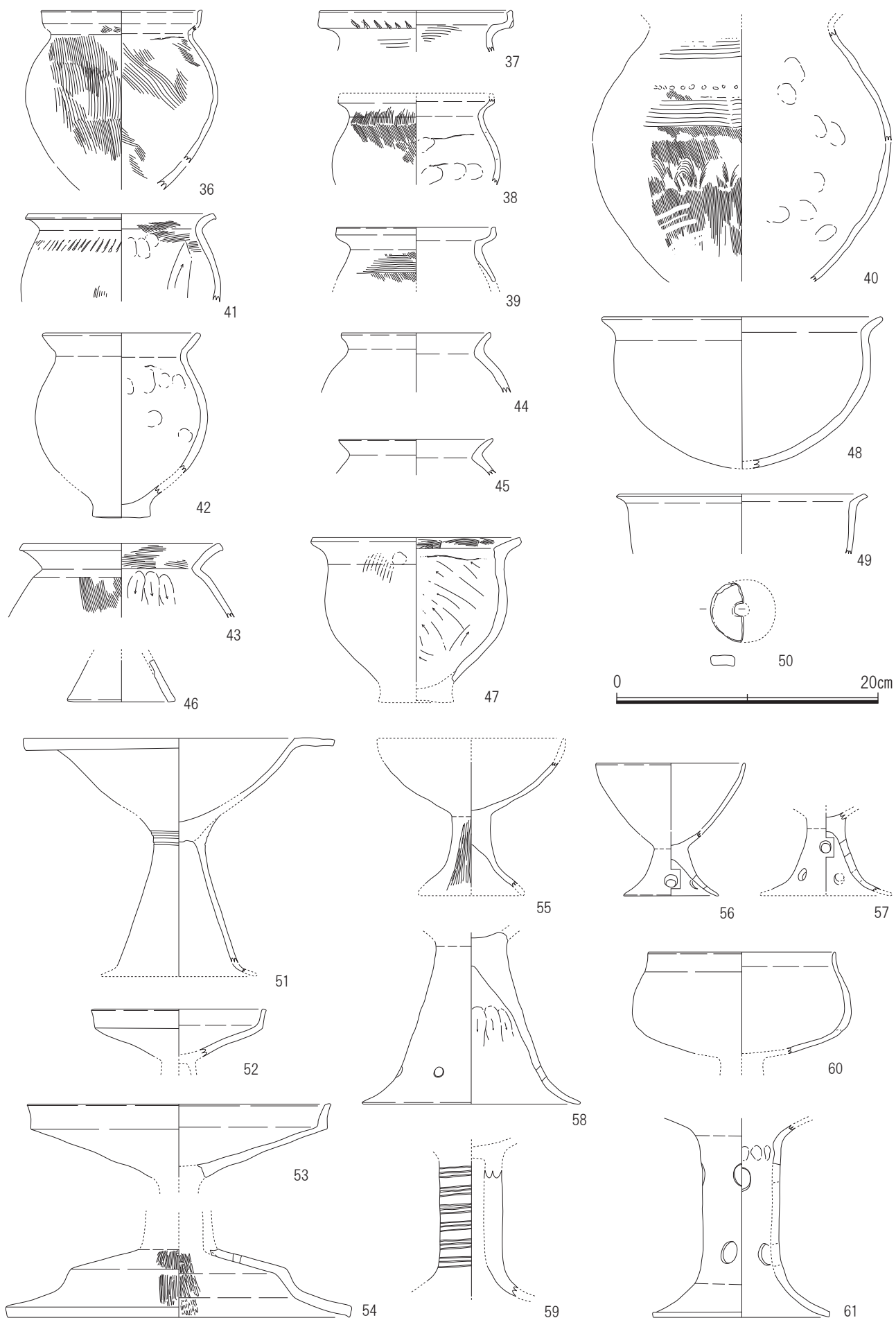


Fig.32 SH0622 出土遺物① (S=1/4)

ある。37の受け部には刺突列があるが、他は磨滅により不鮮明である。いずれも外面にはハケがあり、内面はハケないオサエ、ナデで調整される。おそらく40も受口甕になろうが、体部の上部には直線文が2帯施され、その間に円形の刺突を施す。さらに胴部最大径の下部には波状文が施文される。なお、40の内面には内容物が固形化したものが付着し、外面は煤けている。47は鉢とすべきもので、直線的な口縁が外方へ短くのびる。内面は全面的にナデ上げて仕上げている。48・49は磨滅が著しいが、いずれも鉢とすべき形状である。

51は最も古式の器形を呈す高杯である。端部を水平にひきのばす口縁形状を呈している。杯部と脚部の接合部に3条の沈線を施した他の文様は不明である。脚部はラッパ状に開く形状で、穿孔は施されていない。外面に

は黒斑が残る。52・53は盤状高杯である。13.2cmと23.0cmの大小がある。おそらく58はこれらの脚部に該当する。下部には円孔が約3cmの間隔であけられているが、欠損のため、3孔までしか確認できない。54は高杯の脚部のようで、段を持つ。穿孔はおそらく4ヶ所になろう。55・56は椀形の高杯である。55は脚部に穿孔はないが、56は3孔があげられる。57は椀形高杯の脚部と考えられるが、上下2段にわたって穿孔される。欠損のため不詳であるが、上下の穿孔は交互にずらしているようである。59は脚部のみであるが、3条1単位の直線文が6帯施される。60はワイングラス形高杯であろう。61の器台は上下2段にわたって各4孔の穴が交互にずらしてあけられている。胎土は良好で、橙色と特徴的である。

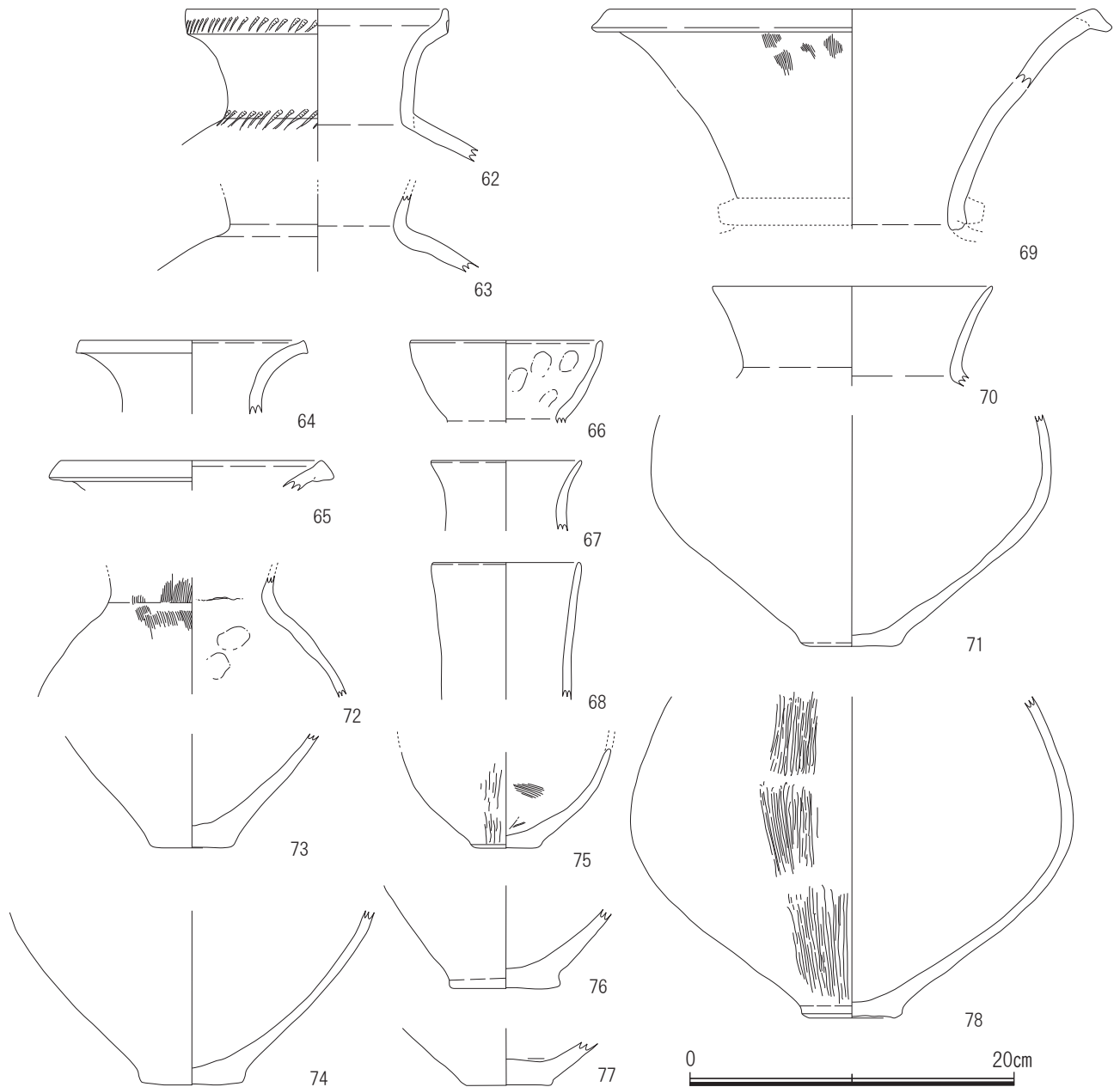


Fig.33 SH0622 出土遺物② (S=1/4)

62は口縁端部と頸部に刺突を施す。68は長頸壺になろう。69は頸部の凸帯が剥落している可能性もある。70と71及び72と73は、それぞれ同一個体の可能性が高い。75は小型の壺の底部であるが、ちょうど擬口縁の部分で欠損している。

なお、50は土製の紡錘車になろう。半分程度しか残っていないが、直径4.8cm程度の円形で、厚さ0.8cmの扁平な形状である。9.1g。

以上、比較のまとまって出土し、一括資料に準じるものである。51の水平口縁の高杯は中期末まで遡り得る資料であるが、他の52・53等の高杯は後期初頭の八王子古宮式併行期のものであり、ひとまずは後期初頭の年代観を与えておきたい。

SH0633/34/47 (Fig.34)

90・91を除く79～96がSH0633/47の出土遺物である。79はSH0633東辺周壁溝から出土した小型壺の完形品である。受口状口縁を呈する。82～84は広口壺であるが、84の口縁端部には3個1対の円形浮文が付されている。89は器台であろうか。脚部下半には穿孔が巡る。なお、90・91はSH0634の出土遺物である。

92・93はP06400（南西主柱穴）から出土した。いずれも口縁部を欠くが頸部以下は完形である。磨滅のため調整等は不鮮明であるが、残りは良い。94・95は

P06396（南辺中央土坑）から出土した。破片であるが、受口甕と高杯の脚部である。

全体に時期を限定できる資料に乏しいが、概ね弥生時代後期の年代が考えられる。

SH0631/32 (Fig.35)

97がSH0631内のP0631から出土した遺物である。土師器の甕であろう。98はP06117（SH0632内）の出土遺物である。須恵器の杯身で、口縁端部には段を持つものの、形骸化する。いずれも6世紀代のものと考えられる。

SH0640 (Fig.35)

99～101がSH0640の出土遺物である。いずれもSH0640の埋土ではなく、内部のピットからの出土であり、どこまで竪穴住居の年代観を示すか不明である。

99・100ともに弥生土器の壺である。101も弥生土器として問題ないので、概ね弥生時代後期頃の年代が考えられる。

SH0641-46 (Fig.35)

102～107がSH0641-46の出土遺物である。4棟が同位置で重複しているため、混在が著しいものと推測している。

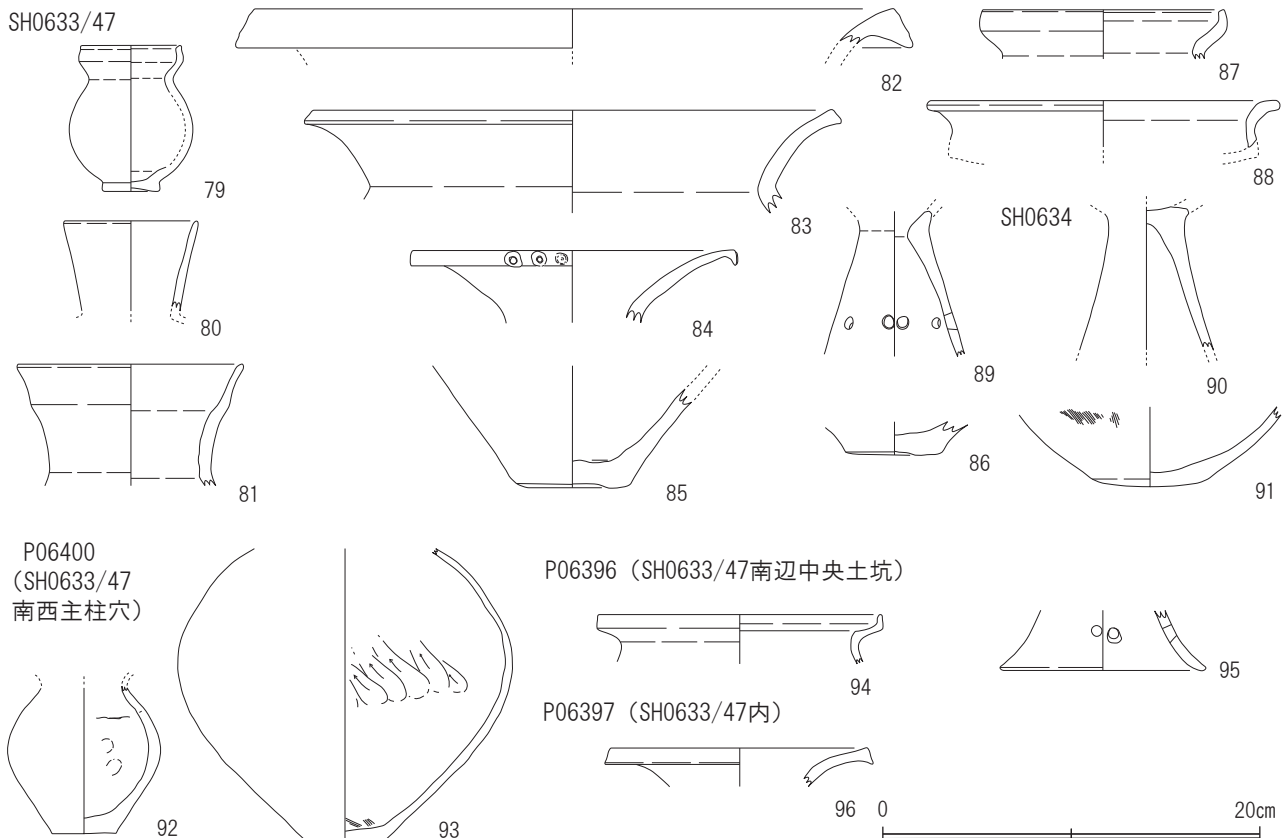


Fig.34 SH0633/34/47 出土遺物 (S=1/4)

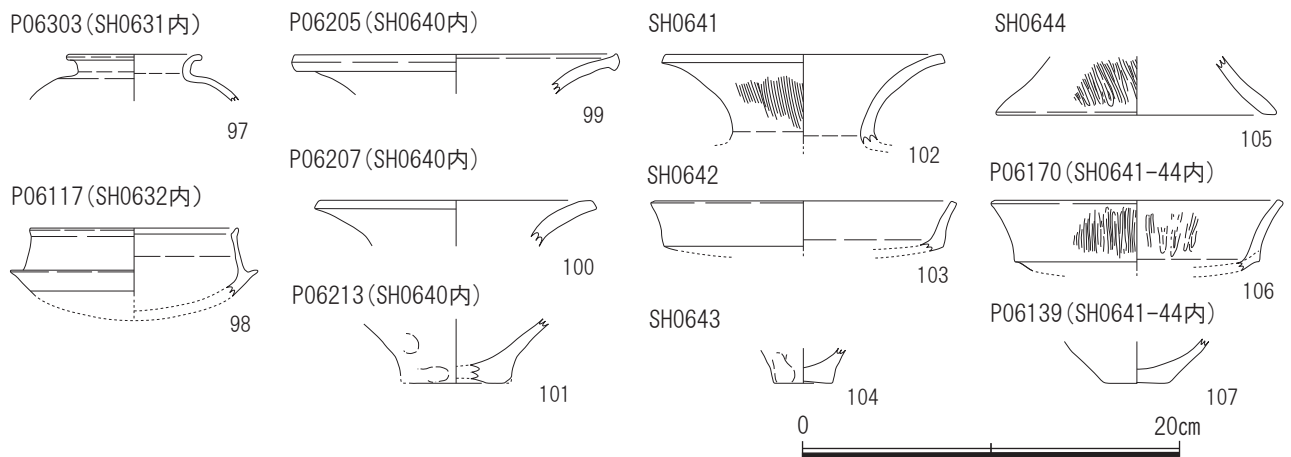


Fig.35 SH0631/32・SH0640・SH0641-46 出土遺物 (S=1/4)

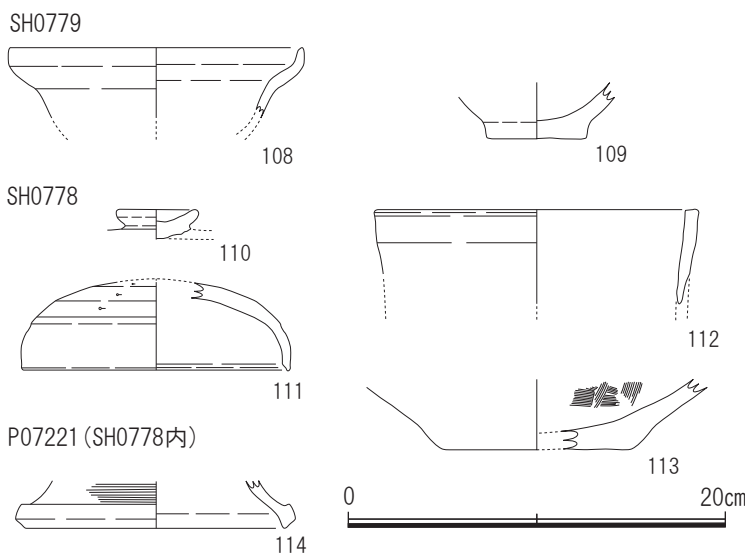


Fig.36 SH0779・SH0778 出土遺物 (S=1/4)

103・105・106は高杯であるが、103は盤状高杯で、106は山中式、105は山中式から廻間式にかけての時期のものと考えられる。104はミニチュア土器である。

SH0779 (Fig.36)

108・109及び205 (Fig. 42) がSH0779の出土遺物である。108は弥生土器から古式土師器の鉢となろうが詳細不明である。109も弥生土器ないし土師器の底部である。時期を限定できる資料はないが、他の破片を含め概ね弥生時代の末頃の資料で占められている。

SH0778 (Fig.36)

110～114はSH0778の出土遺物である。110は須恵器の有蓋高杯の蓋のつまみ部である。111は須恵器杯蓋で、口縁端部は内面に段を持つ。天井部は丸みを持っており、6世紀代のものである。112は土師器の甑で、上端部に面を形成する。114はP07221 (SH0778内)の出土遺物で、須恵器の高杯である。

SH0753/0613/0754/0608 (Fig.37)

115～122までがSH0753/0613/0754/0608の出土遺物である。115・117は須恵器杯蓋である。115の口縁端部と天井部の境の段や口縁内面の段は形骸化しつつも僅かに残るが、117では全く失われて丸くなってしまっている。これらの特徴から6世紀後半以降のものである。116・118は須恵器の杯身である。116は底部がヘラ切りであるし、118の立ち上がりは1.1cmと退化している。いずれも6世紀後半から7世紀にかけての時期のものである。119は須恵器の高杯である。

121はP0640 (SH0753 南西支柱穴) から出土した須恵器の甕で、122は内部ピットのP0621の須恵器の甕である。122の内面には外面のタタキの際の当て具痕らしき丸い痕跡が残る。

120は水晶製の石製品である。断面六角形で厚みは0.8～1.0cmある。上端を欠損するため全形は不明であるが、長さ3.5cmが残る。重量は4.0gを測る。

全体的な遺物の年代観としては、6世紀後半以降である。

SH0757/59/67/75 (Fig.38)

123～136までがSH0757/59/67/75の出土遺物である。

123は須恵器の有蓋高杯の蓋である。おそらくSH0767以降の建物に伴うものであろう。124・125は弥生土器の壺である。いずれも口縁端部を肥厚させる。弥生時代後期頃のものである。

126はSH0759の出土の須恵器杯身であるが、同様にSH0767以降の建物に伴うものであろう。127はミニチュア土器である。SH0759の床面直上で出土しており、SH0759に伴うものか判断に苦しむ。

128はSH0775の床面直上で出土した弥生土器の壺である。肩部に刺突と直線文を1帯ずつ施す。弥生時代後期頃のものであろう。129はSH0775埋土から出土した砥石である。13cm以上の自然礫の片面のみを利用している。砂岩製と思われる。

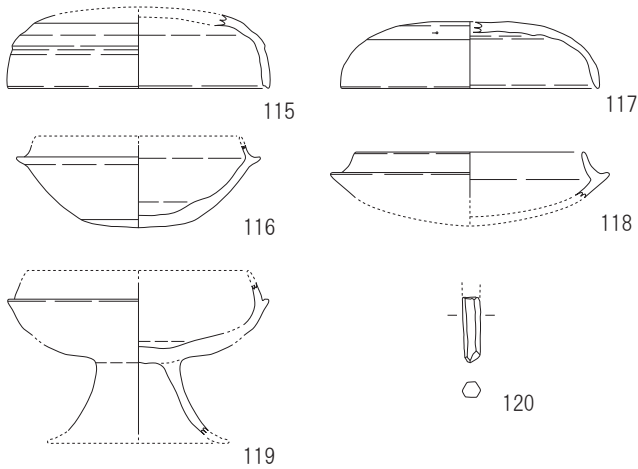
130はSH0759/75として取上げた須恵器杯身であるが、これもSH0767以降の建物に伴うものと考えられる。口縁端部は内面に段を持つ。6世紀代のものであろう。

131～136はSH0767の出土遺物である。131・132は須恵器杯蓋で、131では口縁と天井部の境の段が形骸

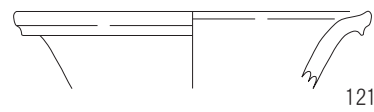
化している。6世紀中頃から後半にかけての資料と考えられる。133・134は須恵器の杯身であるが、いずれも口縁端部は丸みをおび、全体的に扁平な形状を呈す。6世紀後半から7世紀にかけてのものである。135は須恵器の高杯、136は須恵器ハソウである。

以上のように、弥生時代後期頃の土器と6世紀代の遺物が混在している。遺構の重複から理解して、前者はSH0775以前に伴うもので、SH0767に6世紀の遺物が伴うと整理される。

SH0753/0613/0754/0608



P0640 (SH0753南西支柱穴)



P0621 (SH0753/0613/0754/0608内)

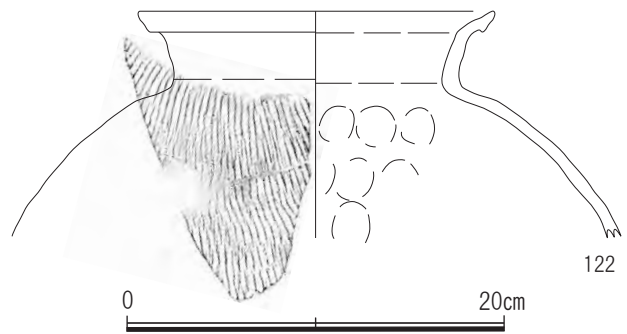
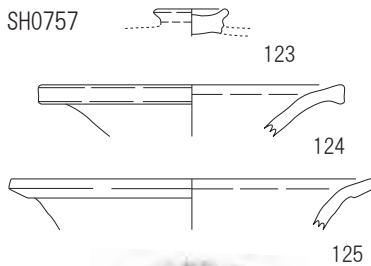
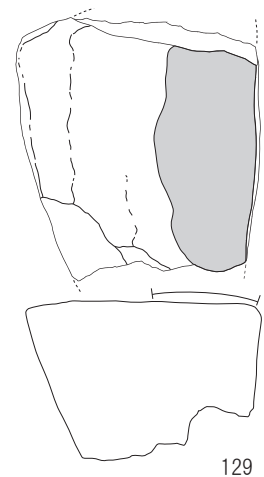
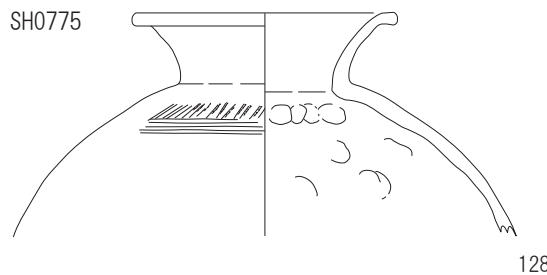


Fig.37 SH0753/0613/0754/0608 出土遺物 (S=1/4)

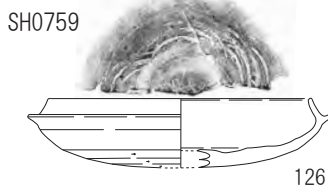
SH0757



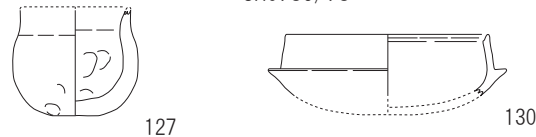
SH0775



SH0759



SH0759/75



SH0767

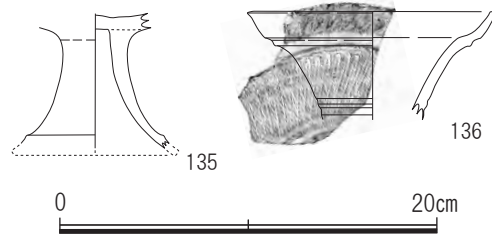
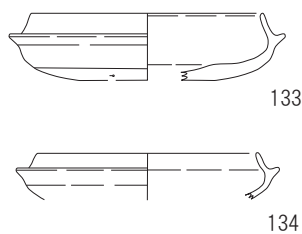
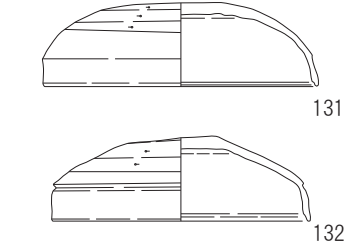


Fig.38 SH0757/59/67/75 出土遺物 (S=1/4)

SH0750・SH0751/52・SH0766・SH0768 (Fig.39・40)

137～139はSH0750の出土遺物である。全て須恵器であるが、137は杯蓋、138・139は杯身である。137では口縁と天井部を区切る段は存在していない。138・139とも立ち上がりは1cm前後と低く、端部も丸くおさめる。いずれも6世紀後半から7世紀にかけての時期のものである。

140～142はSH0750-52の混在資料である。いずれも須恵器であり、本来はSH0750に伴うものであろう。

6～7世紀の年代が与えられる。

143～145はSH0751の出土遺物である。いずれも弥生土器である。143と145は高杯になるうが、145の脚部上半には直線文が施される。概ね弥生時代後期の頃のものであろう。

146・147はSH0752の出土遺物である。弥生土器の台付甕の底部と、花崗岩製の磨石である。147の大きさは、長さ5.0cm、幅4.0cm、厚さ3.9cm、重量116.8gで、完形である。148はSH0751/52/66として

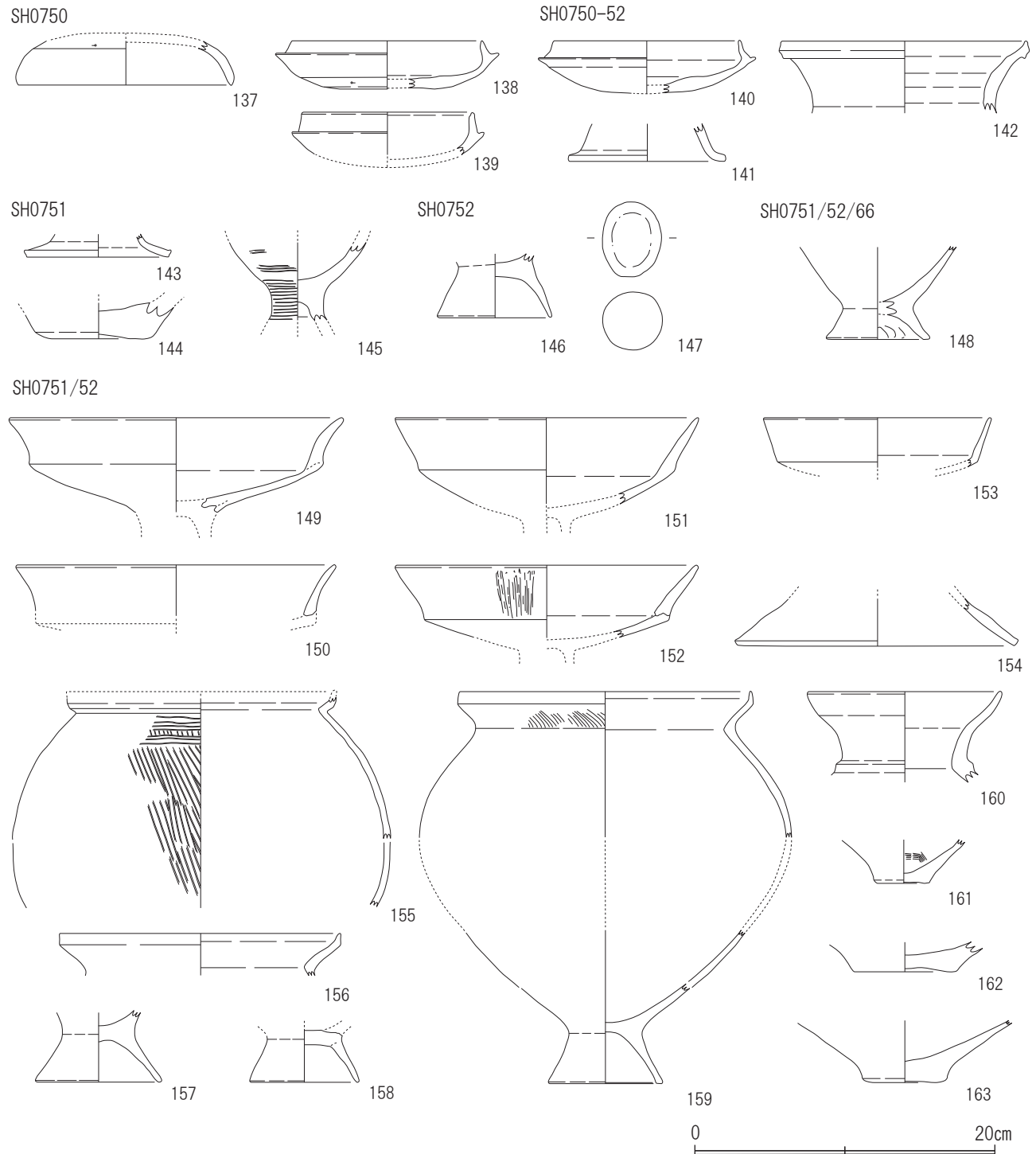


Fig.39 SH0750・SH0751/52・SH0766・SH0768 出土遺物① (S=1/4)

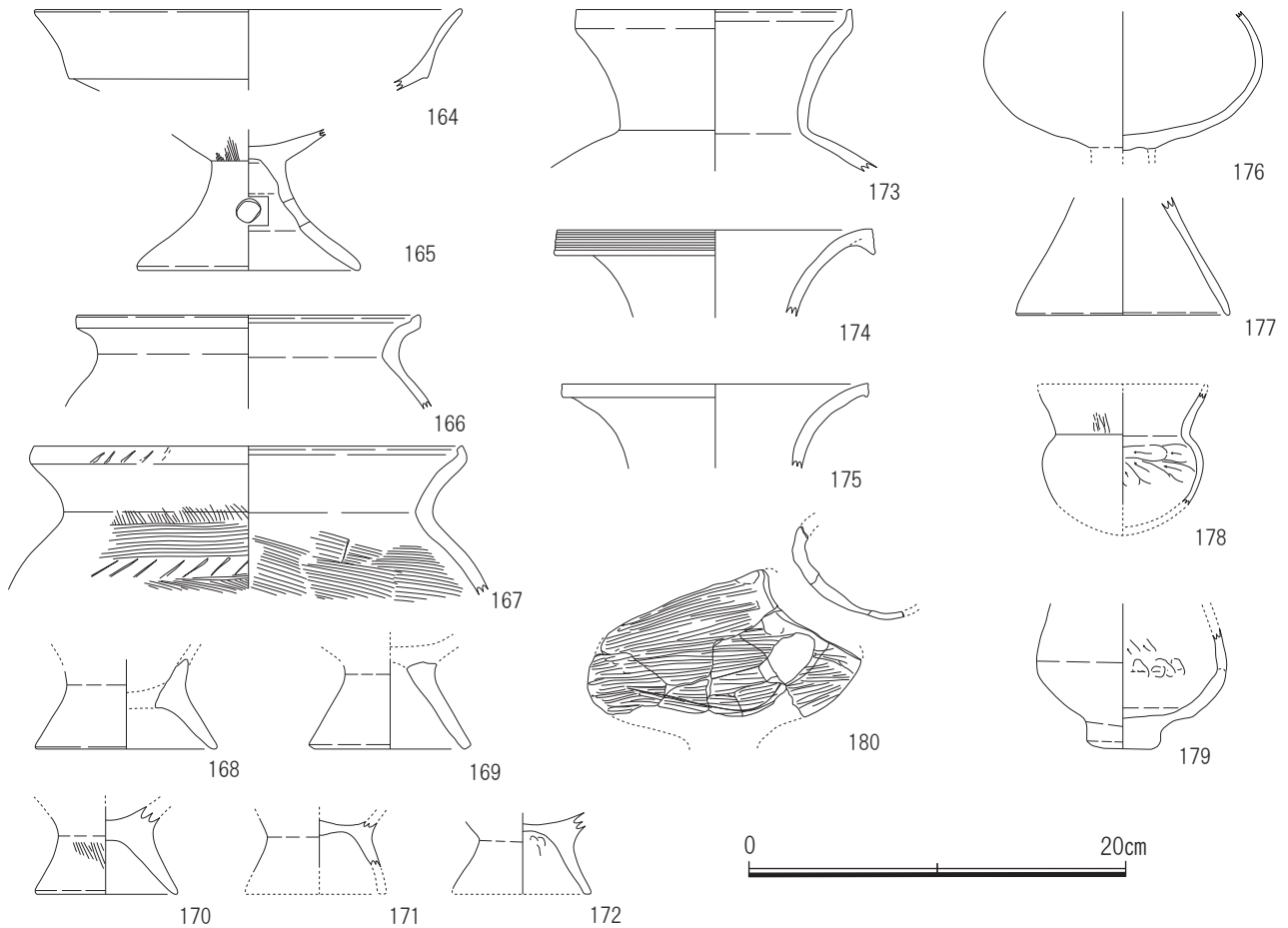
取上げた遺物である。弥生土器ないし古式土師器の台付甕である他は不明である。

149～163がSH0751/52の出土遺物である。149や151・152は短く立ち上がった口縁を持ち、比較的明瞭に屈曲する。調整は不明だが、山中式の前相を呈す。153は小型の高杯になろうが、他より盤状の形状を残しており、やや遡るかもしれない。155～159は受口甕である。図化できた資料はいずれも受口甕で、主体を占める甕であったのであろう。160・162・163は壺である。

164～180はSH0766の出土遺物である。164の高

杯は145・146とそれほど違いはない。165の高杯は脚部が開いており、山中式ではなく、廻間式の後半のような様相である。SH0768等の混在の可能性はある。166・167は受口甕で、167は口縁端部と肩部に刺突を施す。173～175は広口壺で口縁を上部につまみ上げる173や、そのまま納め面を持つ174、外方へ肥厚させる175等多様である。176と177は同一個体と考えられ、脚付の壺になろう。178は小型壺の体部である。丁寧なつくりとしており、SH0768に伴うものの可能性がある。

SH0766



SH0768

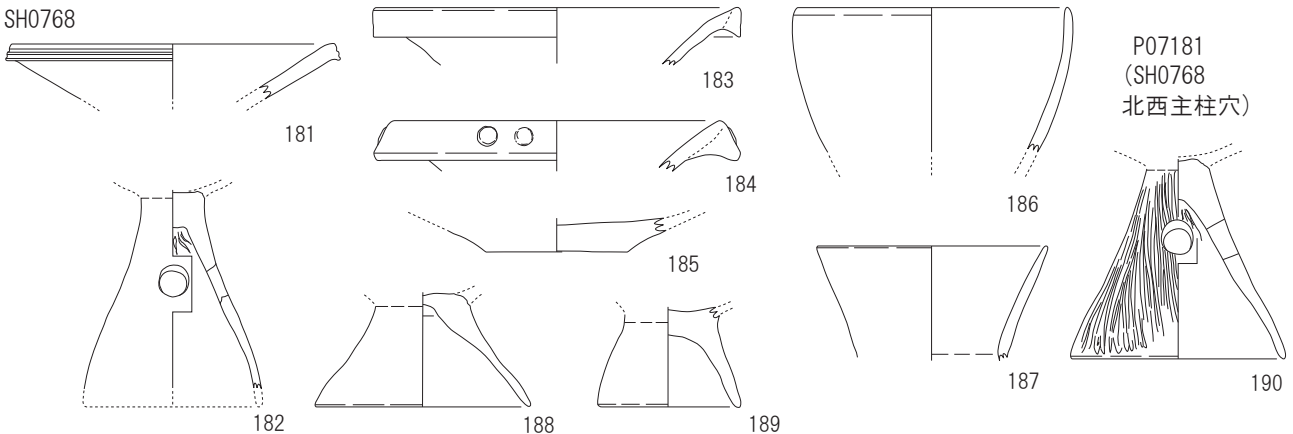


Fig.40 SH0750・SH0751/52・SH0766・SH0768 出土遺物② (S=1/4)

180は鳥形土器になると考えられる。全体をミガキで調整し、翼を表現したのであろうかその上に線刻が施されている。頭部の表現はなく、頸部にて切り揃えられている。内部は空洞になるようであるが、破片資料のため台部等の様子を含まない点が多い。

以上、SH0766の出土遺物は全体的に弥生時代後期の山中式から古墳時代初頭の廻間式にかけての遺物が混在して出土している。このため、明確に建物の帰属時期を比定することは困難である。

181～190までがSH0768の出土遺物である。182・190の高杯の脚部は内湾しており、廻間式の頃のものである。186の壺の口縁も内湾志向で、他の壺等の器種からも廻間式以後の遺物が中心となると理解できる。

SH0727/30 (Fig. 41)

191はSH0727から出土した須恵器の杯蓋である。端部には内傾する面を持ち、口縁と天井とを区画する稜も比較的明瞭である。6世紀前半頃のものであろう。

192・193はSH0730の出土遺物である。192は土師器の小型甕で、口縁を丸くおさめるく字状口縁甕（以下、く字甕とする）である。193は口縁端部を僅かに欠くが、土師器の甑となる。いずれも6世紀前後の年代が推定さ

れる。

SH0729 (Fig. 41)

195・196はSH0729内のピットからの出土遺物である。いずれも直接SH0729の年代を示すものではない。196は宇田型甕で、古墳時代後期頃のものである。

SH0760 (Fig. 41)

197はSH0760出土の須恵器高杯である。脚部のみであるため詳細は不明であるが、1段の方形透かしが3ヶ所に施されることから、6世紀前半頃のものであろう。

SH0710/11 (Fig.42)

198～204はSH0710/11の出土遺物である。198・199はSH0711出土で、201～204はSH0710からの出土である。198と199はともに宇田型甕になろう。古墳時代後期頃のものである。201～204はいずれも弥生土器である。明確に時期比定できる資料は乏しいが、概ね弥生時代後期頃のものとして問題ないであろう。

なお、205は本来Fig.36に組むべきSH0779の出土遺物を混在してしまったものである。

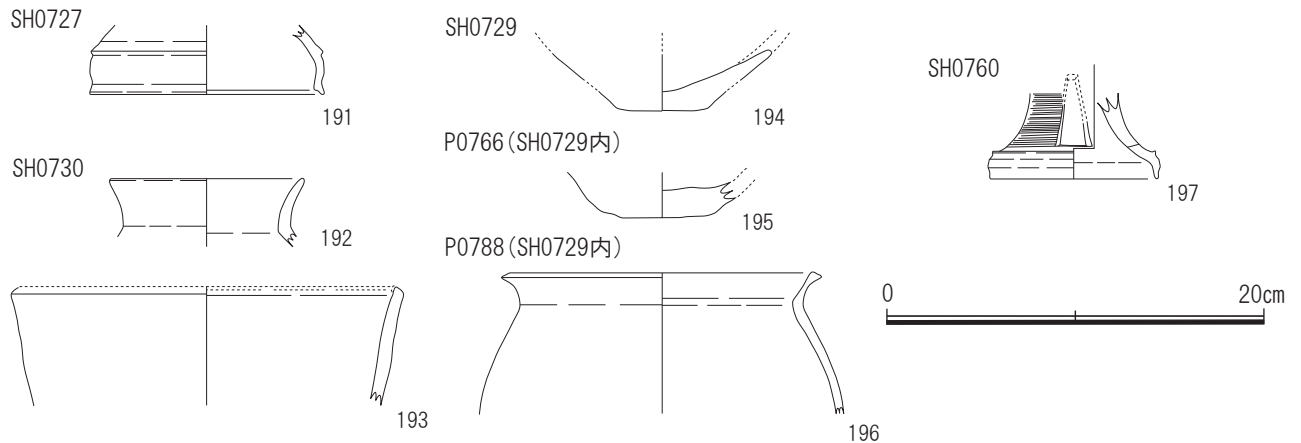


Fig.41 SH0727/30・SH0729・SH0760 出土遺物 (S=1/4)

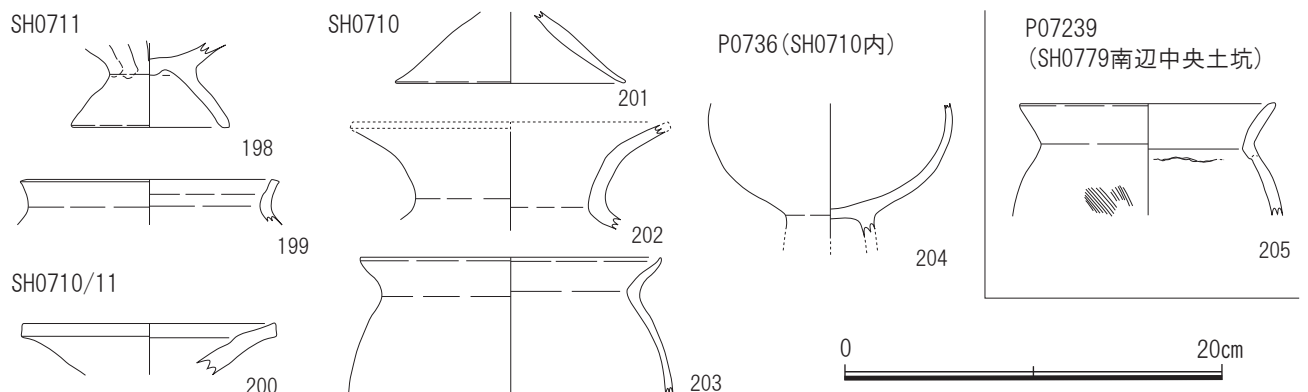


Fig.42 SH0710/11 出土遺物 (S=1/4)

SH0718/37 (Fig. 43)

206～209がSH0718の出土遺物である。206は須恵器の杯蓋で、天井部のケズリの範囲も広く、口縁と天井部との境の稜も残す。口縁端部は内傾する面を持つ。207は須恵器杯身で、口縁の立ち上がりは2.2cmと比較的長い。口縁には内傾する面を持つ。これらの特徴から、いずれも6世紀前半のものであろう。208は宇田型甕の系統であろうか、端部は先細りながらもやや屈曲する。

210～216はSH0737からの出土遺物である。210の須恵器杯蓋は端部の鋭さを失いながらも、口縁と天井部の境に段を残す。211～214は全て須恵器杯身である。立ち上がりは2cm～1.5cmとやや高く、口縁端部は内

傾する面を残す。いずれも6世紀前半頃のものであるが、先のSH0718よりは後出の要素が多い。

SH0733-35/SH0728/SH0721 (Fig. 43)

217～225までがSH0733-35として取上げた出土遺物である。217～224までの遺物は、本来SH0710/11に伴う遺物だと判断できる。5世紀末から6世紀初頭頃の217の須恵器杯蓋から6世紀中頃の218までの幅がある。なお、220は有蓋高杯になりそうである。222～224は土師器である。222は宇田型甕、223はく字甕、224が甗である。

225は廻間式の高杯である。どの建物の時期が特定できないが、226～229等とほぼ同時期のものである。

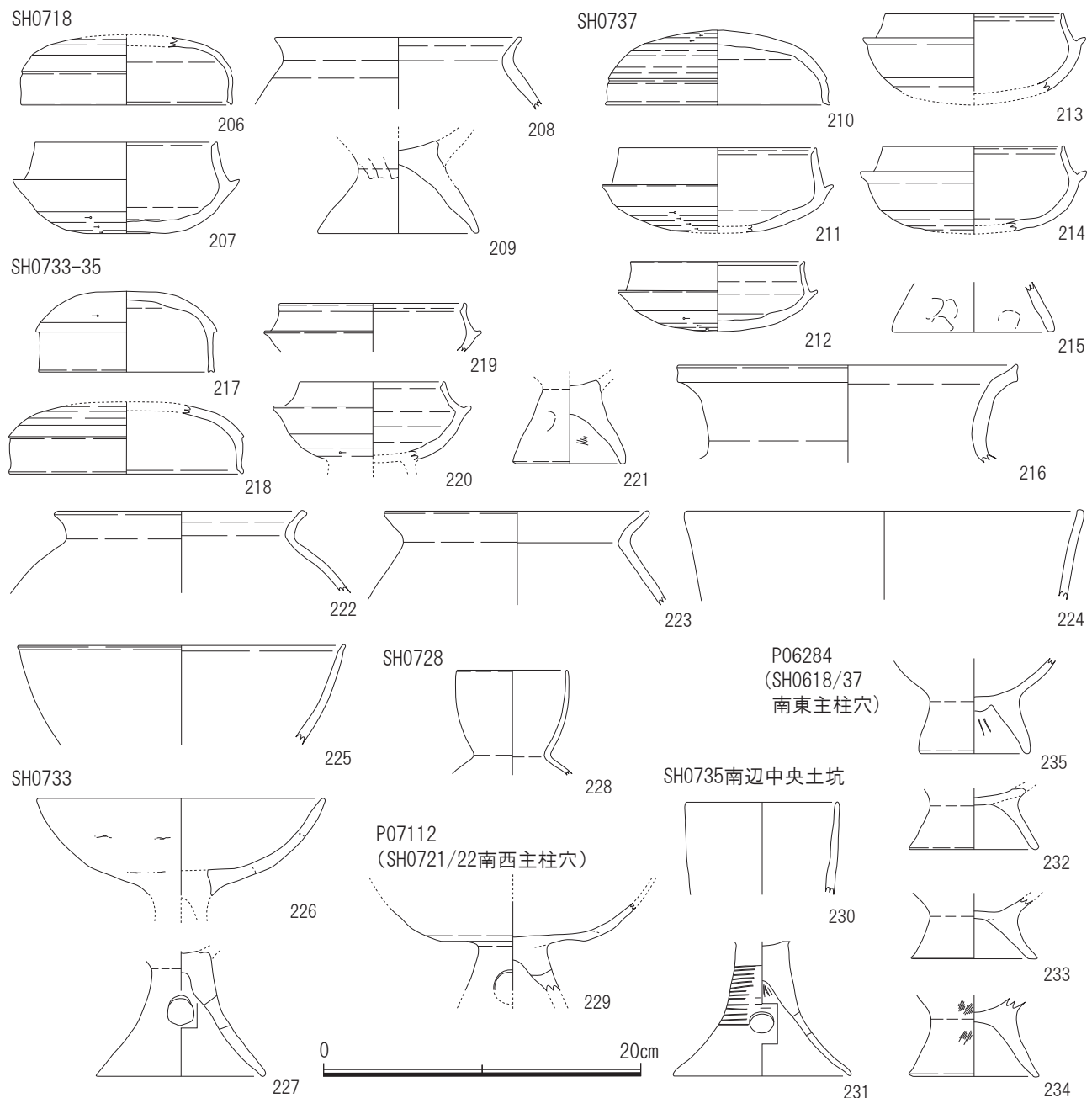


Fig.43 SH0718/37・SH0733-35/28/21 出土遺物 (S=1/4)

226・227 は古式土師器の高杯である。杯部の稜は不明瞭となり、廻間式でも最終段階のものであろうか。あるいは椀形の高杯の系譜で、やや先行するものかもしれない。

228 は SH0728 の周壁溝から出土した。おそらく瓢壺になろう。廻間式のものである。

229 は P07112 (SH0721 南西主柱穴) から出土した古式土師器の高杯である。杯部に段を持つもので、廻間式の前半頃のものであろう。

230～234 が SH0735 南辺中央土坑の出土遺物である。いずれも弥生土器で、231 は山中式の高杯の脚部である。

これらの特徴から出土遺物の時期は、SH0735 の山中式が最も古い一群で、続いて SH0721/22, SH0728 等廻間式となり、一時空白期間があって SH0718/37 の 6 世紀代となる。

SH0688 (Fig. 44)

236 は SH0688 から出土した弥生土器の受口甕である。詳細な時期は不明であるが、概ね弥生時代後期頃のものであろう。

SH0677 (Fig. 44)

237 は SH0677 から出土した須恵器の杯身である。底部外面には「一」状のヘラ記号が施されている。6 世紀後半頃のものであろう。

SH0709 (Fig. 44)

238・239 が SH0709 の出土遺物である。238 は須恵器の杯身で、端部は丸みを持ち、底部はヘラ切りでおさめている。立ち上がりも 1.3cm と低くなる。概ね 6 世紀後半頃のものであろう。239 は土師器のく字甕であろう。

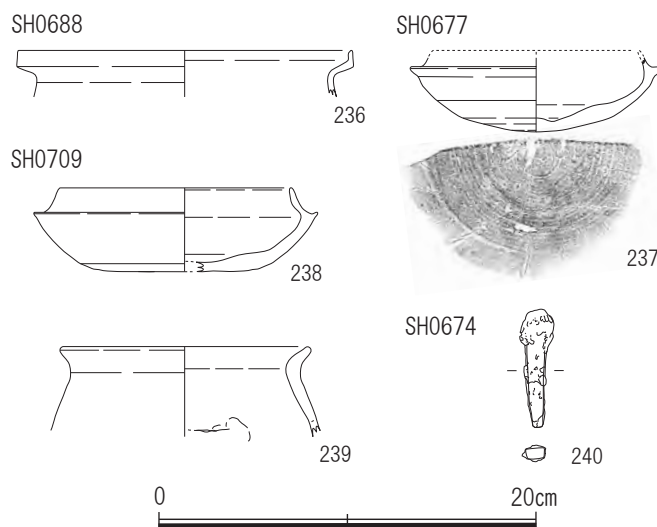


Fig.44 SH0688・SH0674/77・SH0709 出土遺物 (S=1/4)

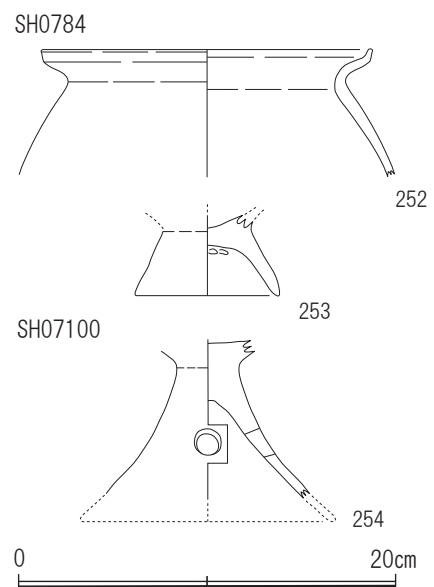


Fig.46 SH0784/100 出土遺物 (S=1/4)

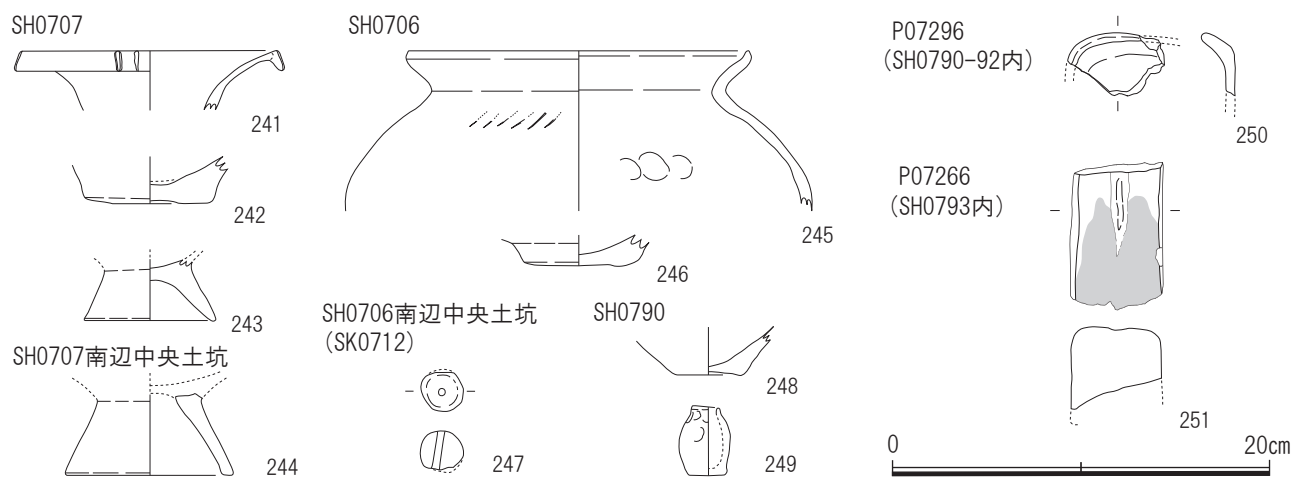


Fig.45 SH0707・SH0706・SH0790-93 出土遺物 (S=1/4)

SH0674 (Fig. 44)

240はSH0674から出土した鉄製品である。上半を欠損するため、どのような形状となるのかは不明である。6.2cmの長さが残るが、基部は四角く扁平である。帰属時期は不明である。

SH0706/07 (Fig. 45)

241～244はSH0707の出土遺物である。いずれも弥生土器で241・242が壺、243・244は台付甕となる。244は南辺中央土坑で出土した。明確な時期比定は困難であるが、概ね弥生時代後期のものであろう。

245～247はSH0706の出土遺物である。SH0706はSH0707と同一の遺構である可能性がある。245は弥生土器の受口甕で、肩部には刺突の痕跡が僅かに残る。247は土玉で、直径2.2cm程度の球形にやや斜めに穿孔する。8.1g。時期は不明であるが、他が弥生時代後期前後のものであるので、土玉もこの時期のものであろう。

SH0790/91/92 (Fig. 45)

248・249がSH0790の出土遺物である。249はミニチュア土器の完形品である。口縁は短く、僅かに立ち上げるのみであり、壺形の器形になろう。ナデとオサエで成形する手づくね土器である。

250はP07296 (SH0790-92内)から出土した異形土器である。端部が丸く短く立ち上がり、他は平坦となる。小片のため全形は窺い知れないが、180のような鳥形土器が出土しているため敢えて図示した。

時期比定できる資料は乏しいが、概ね弥生時代後期頃のものが多い。

SH0793 (Fig. 45)

251はP07296 (SH0793内)から出土した筋砥石である。花崗岩製で、正面と右側縁に磨滅痕が認められる。裏面は欠損のため不明である。正面の中央には、磨滅痕を切る形で筋状の凹みがある。凹みは浅いため玉砥石かどうかは疑問が残る。253.5g。時期不明。

SH0784/100 (Fig. 45)

252・253がSH0784出土の甕で、254がSH07100出土の高杯である。脚端部は外反気味に開く。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものである。

2 土坑

SK0621 (Fig.47)

255～259がSK0621の出土遺物である。いずれも土師器であるが、255～257が羽釜、258が皿、259

が茶釜となる。羽釜は16cmの小型、23cmの中型、30cmの大型の3種類ある。いずれも内面には接合痕が残り、粘土紐を積み上げて成形していることが判る。外面の体部上半はハケで、下半にはケズリが施されるようである。罅部以下には煤が付着する。また、257には2個一対の円孔が焼成前にあけられる。258は口径8.0cmの小型品である。259は口縁が直立し、端部にやや面を持つ。1対の耳がつくようで、焼成前に棒状工具で穿孔する。内縁には粘土紐の接合痕が顕著に残る。これらはいずれも15世紀から16世紀にかけての資料である。

SX0782 (Fig.47)

260はSX0782から出土した須恵器の杯身である。口縁端部に内傾する面を持つ。6世紀頃のものであろう。

SK0626 (Fig.47)

261～265がSK0626の出土遺物である。いずれも弥生土器で261は器台、263は壺となろう。263は口縁の内外面とも赤彩される。概ね弥生時代後期頃のものであろう。

SK0704 (Fig.47)

266・267はSK0704の出土遺物である。266は須恵器杯蓋で、口縁と天井部の間に稜を残す。6世紀代のものである。267は土師器の高杯で、接合部内面にはシボリ痕が顕著である。

SK0726 (Fig.47)

268・269はSK0726の出土遺物である。268は土師器の甕で混入品であろう。古墳時代後期頃のものであろう。269は土師器の羽釜である。体部外面の上半はハケ、下半にはケズリが施される。15～16世紀代と考えられる。

SK0639 (Fig.47)

270～272がSK0639の出土遺物である。270は土師器の羽釜で、遺構本来の年代観を示す遺物となる。概ね15～16世紀のものである。271・272は混入品である。271は須恵器のハソウの体部破片で、体部下半にはタタキが施される。6～7世紀頃のものであろう。272は須恵器の杯B身になると考えられる。当調査区では珍しいが、奈良時代末頃のものである。

3 溝

SD0749 (Fig. 48)

273～295までがSD0749の出土遺物である。

273・274 は土師器の皿で、274 は直径 12.2cm ある。275 以下 295 までが土師器の羽釜である。可能な限り個体識別に努めたが、同一個体を複数図化している可能性もある。口径は最も大きい 283 で 27.8cm であり、反対に最も小型のものは 295 の 17.4cm である。平均としては 22～24cm 前後が主体となる。275・277 は数少ない底部までの形状が窺える資料であるが、丸底の半球形を呈する。全般に外面の上半はハケ、下半がケズリ、内面は粘土紐の接合痕を残しつつ板状工具によるナデ（以下、板ナデとする）にナデ、オサエという構成が一般的である。口縁は短く、やや下がった位置に鏝部を

貼り付ける。鏝部以下は煤けていることが多い。また、口縁と鏝部の境辺りには、2 孔 1 対の穿孔が焼成前に施されているものが多いが、中には穿孔のないものも存在するかもしれない。

いずれも 15～16 世紀にかけてのものであり、西に隣接して登録されている中世後半の木田城跡に関わる遺物群であろう。

SD0748 (Fig. 49)

296 は SD0748 から出土した須恵器の杯蓋である。口縁と天井部の境の稜が残ることなどから、6 世紀前半

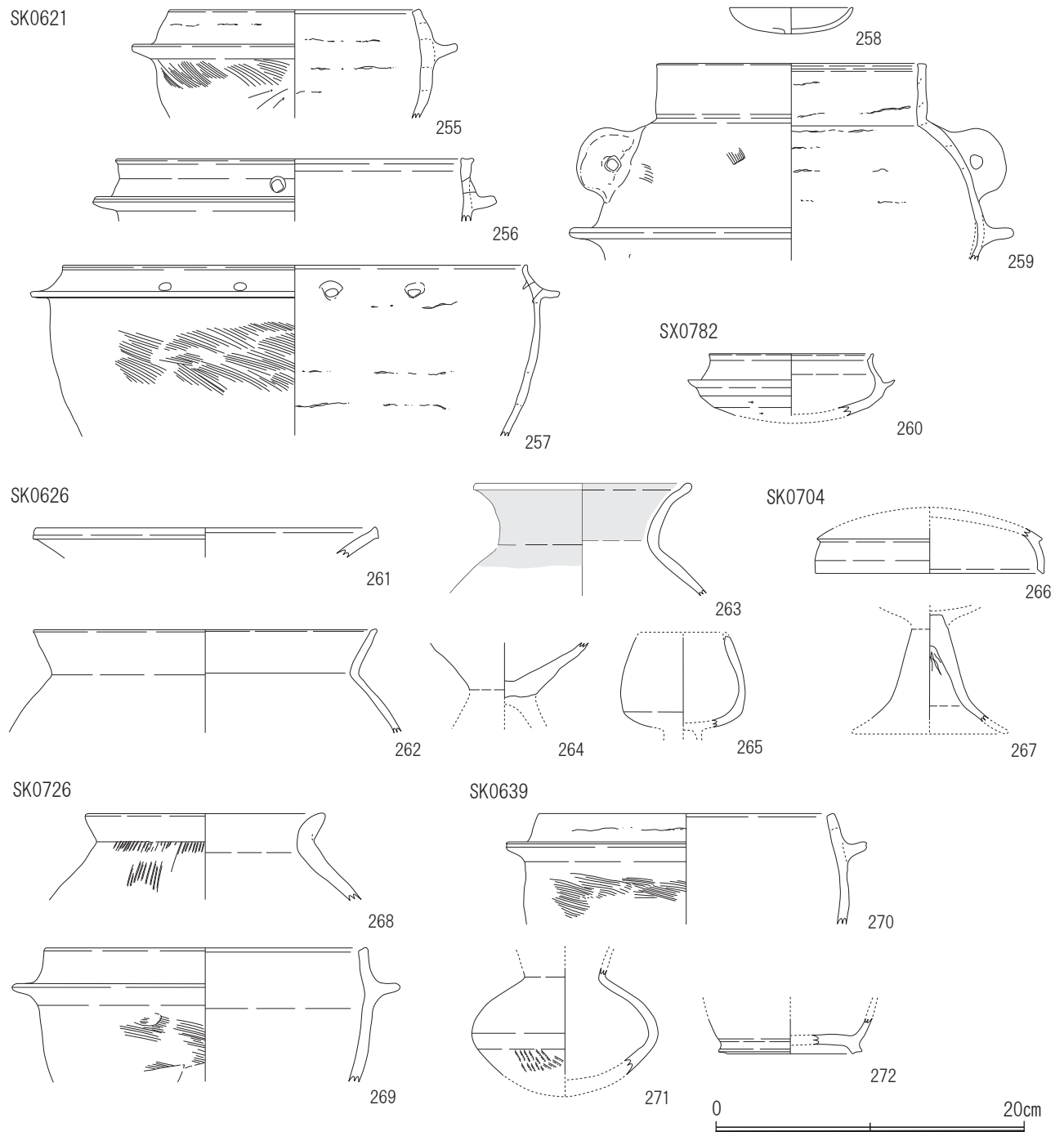


Fig.47 SK0621・SX0782・SK0626・SK0704・SK0726・SK0639 出土遺物 (S=1/4)

SD0749

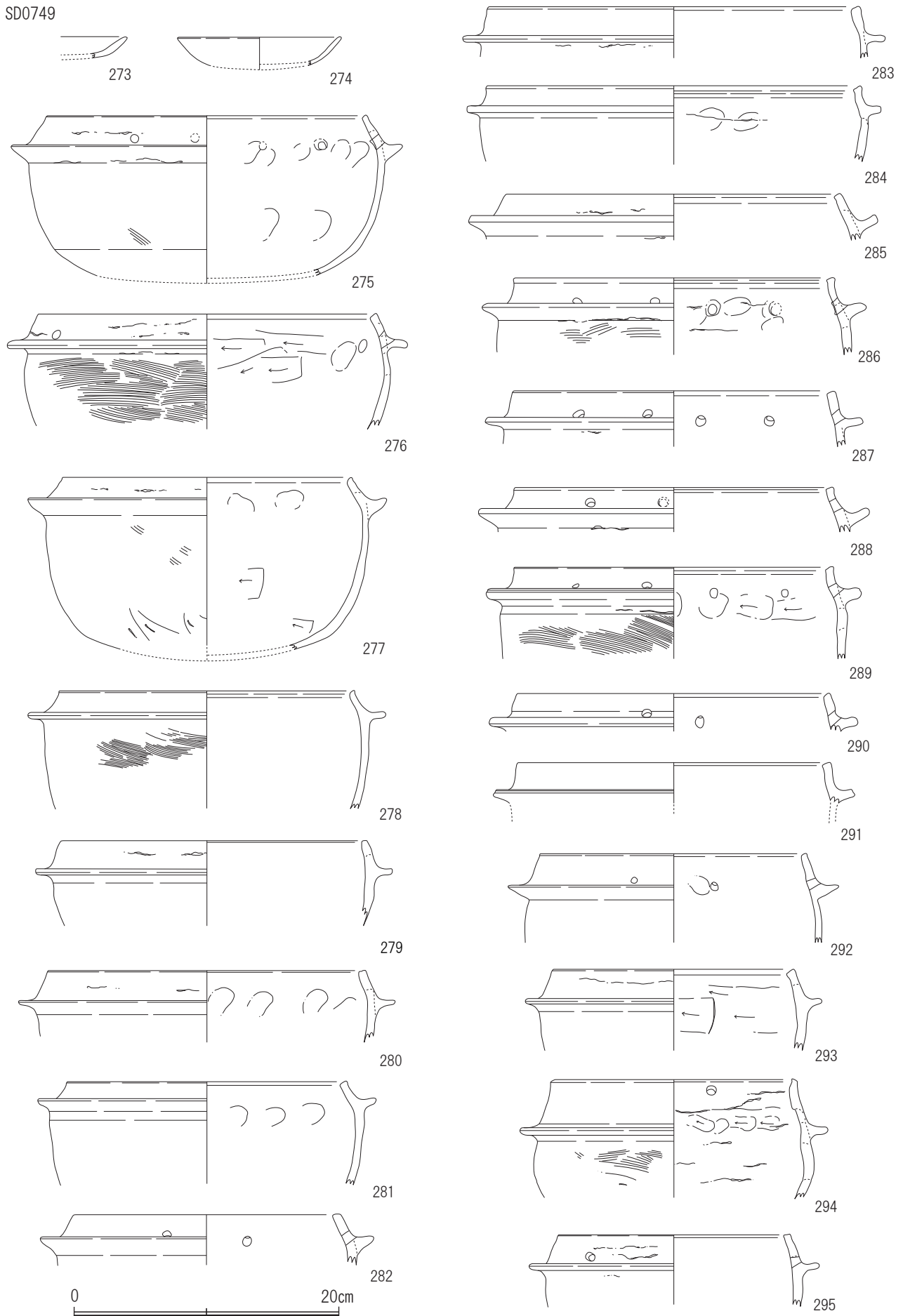


Fig.48 SD0749 出土遺物 (S=1/4)

頃のものと考えられるが、混入品である。他の破片資料には土師器の羽釜が出土しており、遺構自体の年代観は15～16世紀となる。

SD0671 (Fig. 49)

297がSD0671から出土した須恵器の杯蓋である。口縁と天井部の境に僅かに稜が残るが形骸化している。天井部の削りの範囲も縮小しており、6世紀中頃から後半にかけての資料であろう。

SD0777 (Fig. 49)

298～303がSD0777の出土遺物である。298・299は須恵器の杯蓋である。298は小型で端部も鋭さを残すことから、5世紀末から6世紀初頭であろう。299はそれよりもやや年代的に新しくなる。300は須恵器の杯身で扁平化が進む。6世紀後半から7世紀にかけてのものである。301・302は須恵器の壺で、いずれも頸部にカキ目を施す。303は片岩製の紡錘車である。大部分を欠損し、13.8gが残る。時期不詳。

なお、これら298～303の遺物は全て他の竪穴住居等からの混入品だと考えられる。他にも弥生土器も出土しており混在が著しいものと判断される。

SD0637 (Fig. 49)

304～308はSD0637の出土遺物である。304・305は盤状の高杯になろう。306は脚付の壺である。307・308は広口壺である。308は肩部に4個1単位の円形刺突を4ヶ所に施し、口縁内面には3個以上が1単位になる円形刺突を施す。これらはいずれも弥生時代後期のものと考えてよいだろう。

SD0758 (Fig. 49)

309はSD0758から出土した紡錘車である。片岩製の完成品で35.0gを測る。帰属時期は不明である。

SD0625 (Fig. 49)

310・311がSD0625の出土遺物である。いずれも弥生土器で、概ね弥生時代後期頃のものであろう。

SD0765 (Fig. 49)

312～315がSD0765の出土遺物である。いずれも弥生土器から古式土師器で、概ね弥生時代後期から古墳時代初頭のものであろう。

SD0662/63 (Fig. 49)

316はSD0662/63から出土した。弥生土器の広口壺

である。弥生時代後期頃のものであろう。

SD0713 (Fig. 49)

317～321がSD0713から出土した。321は古式土師器の高杯である。深い杯部を持ち、内湾する口縁を持つ。段も明瞭であり、廻間式の古相を呈す。

SD0689 (Fig. 49)

322はSD0689から出土した土師器の鉢である。口径22.0cmと大きく、やや厚手である。外面の上半はハケで調整されるが、下半部はケズリで調整される。

SD0786/87 (Fig. 49)

323・324はSD0786/87からの出土遺物である。323は弥生土器の蓋になろう。324は高杯で山中式の時期のものである。

SD0756 (Fig. 49)

325はSD0756から出土した土師器の高杯である。脚端部は屈曲する。古墳時代後期頃のものであろう。

SD0741 (Fig. 49)

326はSD0741から出土した弥生土器ないし古式土師器の台付甕の底部である。

4 掘立柱建物

SB0724 (Fig. 50)

327はSB0724 (P06345)から出土した須恵器の杯身である。口縁端部には面を持ち、立ち上がりも2.3cmと高い。6世紀前半のものであろうが、建物自体の年代を示す遺物でなく、混入と考えた方がよいであろう。

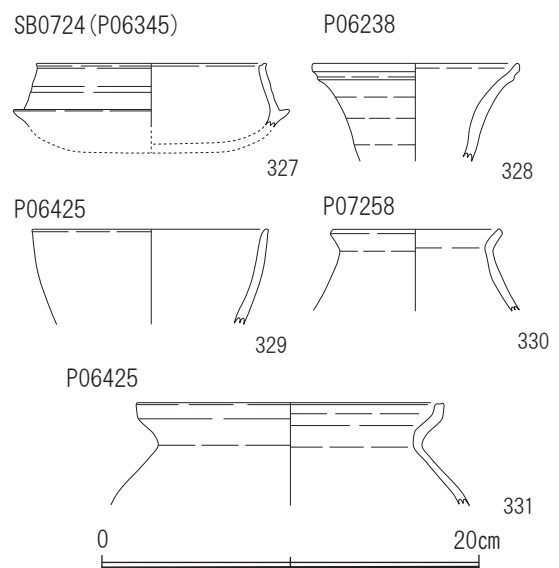


Fig.50 単独ピット出土遺物 (S=1/4)

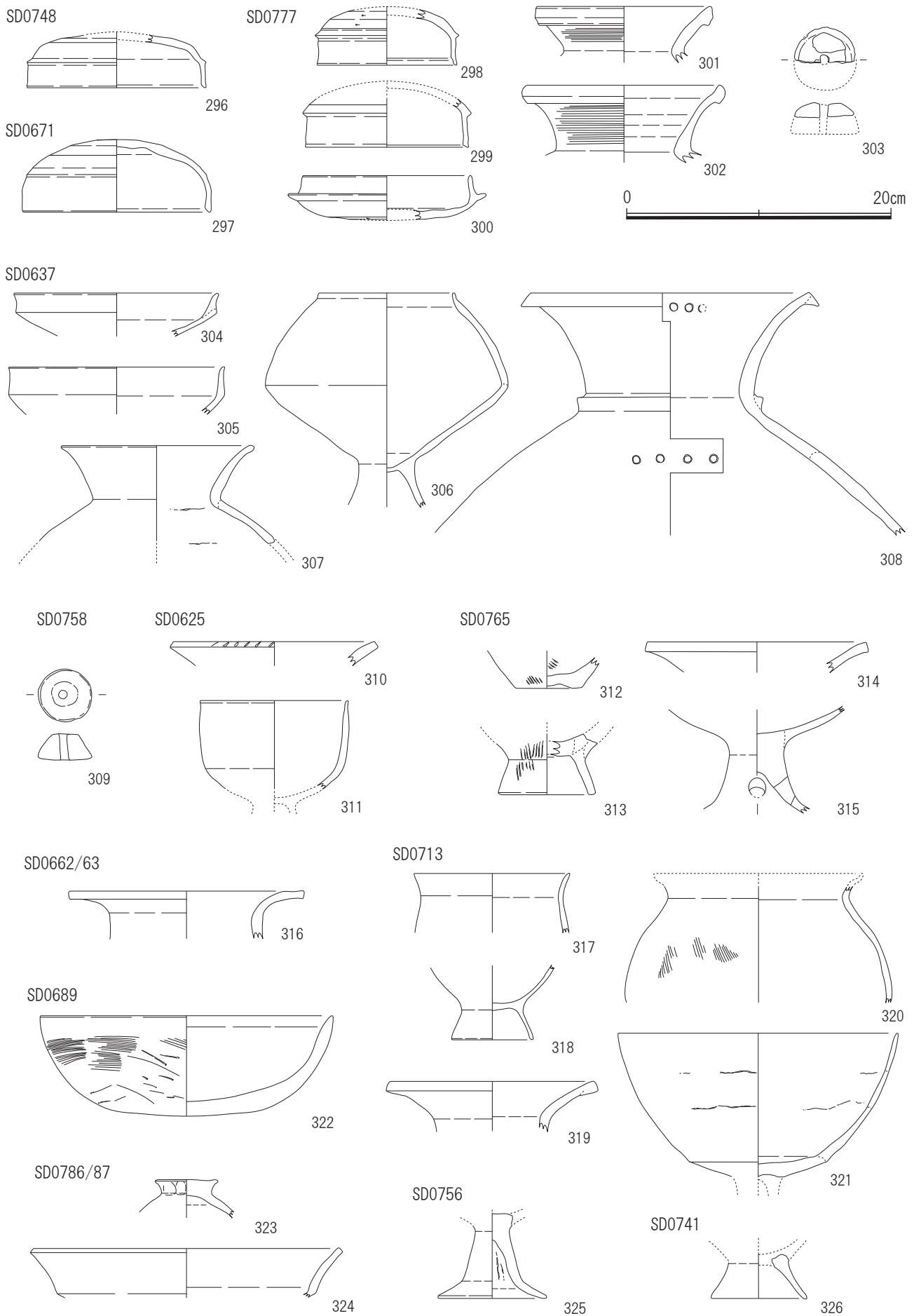


Fig.49 その他の溝の出土遺物 (S=1/4)

5 単独ピット (Fig.50)

328～331までが単独ピットとして取上げた遺物である。328はP06238から出土した須恵器の壺である。6世紀頃であろう。329はP06425から出土した古式土師器の壺である。内湾している点から、廻間式期だと考えられる。330はP07258から出土した弥生土器の甕である。弥生時代後期頃のものであろう。331はP06425から出土した弥生土器の受口甕である。弥生時代後期頃と考えられる。

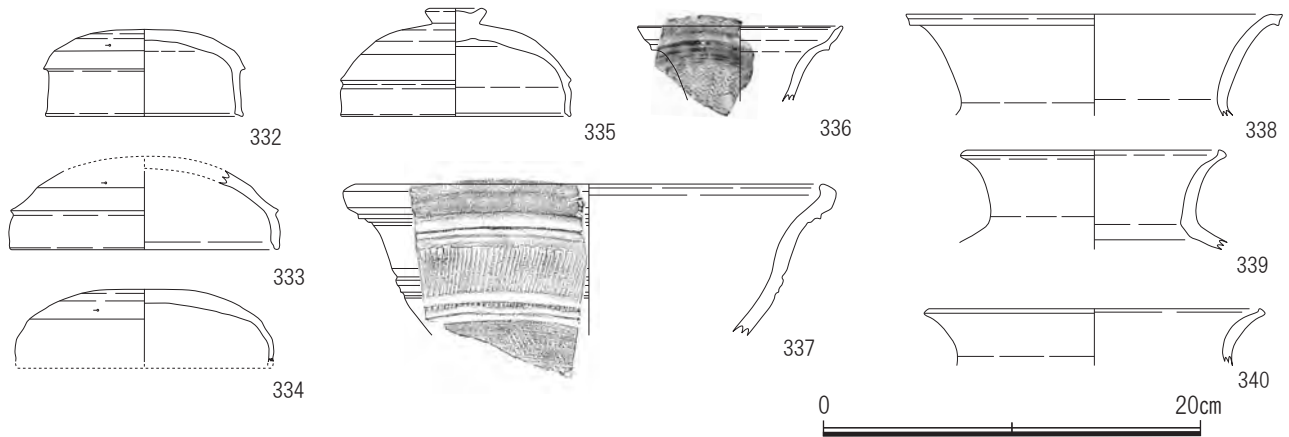
6 その他の出土遺物 (Fig.51)

332・334は南区の遺構検出時に出土した遺物である。ともに須恵器の杯蓋で、332は口径10.4cmと小型で端部に鋭さを残す。5世紀末から6世紀初頭の頃のものであろう。334は口縁と天井部の境の稜が消滅している。6世紀後半頃のものと考えられる。

333・335・336は中区の遺構検出時に出土した遺物である。全て須恵器であるが、333は口径14cmと大きい杯蓋である。6世紀前半のものであろう。335は有蓋高杯の蓋である。稜を持ち、端部は内傾する。6世紀前半頃のものである。336は須恵器のハソウである。口縁と頸部に波状文を施す。6世紀頃のものであろう。

337は表採資料である。須恵器の器台であり、沈線間に刺突を施し、下部にはタタキが残る。6世紀代のものであろう。

338は現代地割溝⑥からの出土遺物である。須恵器の甕で端部は比較的鋭さを残す。339は現代地割溝⑤出土の土師器の壺である。340は現代地割溝⑥出土の土師器のく字甕である。口縁端部をつまみ上げるものである。いずれも、6世紀後半から7世紀にかけてのものであろう。



Tab.2-1 遺物観察表

Fig.51 その他の出土遺物 (S=1/4)

報告 番号	調査 回数	実測 番号	種別	器種	地区	遺構/層位	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	礫の大き さ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
1	6	10	土師器	壺	DB47	SH0601 西辺周壁溝		7.0		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	内;黒灰 外;淡赤褐	良	底部にて 1/2	
2	6	11	弥生土器 /土師器	甕	DB45	P0637 SH0601内	12.6			内外;ヨコナデ	密	ほとんど 含まない	淡褐	良好	口縁にて 1/6	
3	6	103	石器	砥石	CZ47	SH0619 東辺周壁溝				使用面は片面あり, 1361g	密				完形	砂岩製,光波取 上6次-18
4	6	5	弥生土器	器台?	DB45	SH0603	14.2			口縁;刺突 内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡黄褐	良	口縁にて 1/4	
5	6	4	弥生土器	壺	DB45	SH0603 貼床				内外;磨滅のため不明	密	φ 1-5	淡褐	良	頸部にて 1/4	
6	6	1	弥生土器	壺	DA46	SH0603		5.4		内;ハケ,ナデ 外;ミガキ	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良好	底部にて 1/3	光波取上6次 -7
7	6	69	弥生土器	甕	DA46	SH0603 貼床	13.6			口縁;ヨコナデ 内;ハ ケ 外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	暗褐	良好	口縁にて 1/8	頸部に煤付着
8	6	2	弥生土器	高杯	DA46	SH0603		15.6		内;磨滅のため不明 外;ミガキ	やや 密	φ 1-3	黒褐-淡黄 褐	良	脚部にて 1/12	
9	6	68	弥生土器 /土師器	壺	DA46	SH0603 貼床		4.6		内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	内;黒灰 外;淡黄褐	良	底部にて 完形	
10	6	70	弥生土器	壺	DB46	SH0603	6.3	3.0	9.9	口縁;ヨコナデ 内;ナ デ 外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	内;黒灰 外;灰褐	良	口縁を一 部欠くの み	
11	6	67	土師器	甕	DA46	SH0603 貼床	20.0			口縁;ヨコナデ 内;ヨコナデ 外;ハケ	やや 密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	口縁にて 1/8	
12	6	8	弥生土器	甕	CZ46	SH0603 西辺周壁溝	21.6			内外;磨滅のため不明	密	φ 5	黄灰	良	口縁にて 1/6	

Tab.2-2 遺物観察表

報告 番号	調査 回数	実測 番号	種別	器種	地区	遺構/層位	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	礫の大き さ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
13	6	9	弥生土器	高杯	DA46	SH0603 南辺周壁溝	18.6			内;磨滅のため不明 外;ミガキ	密	φ 1-2	内;淡黄褐 外;黒褐	良	口縁にて 1/8	
14	6	3	弥生土器	壺	DA44	SH0699 北辺周壁溝	16.0			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-4	淡黄白	やや 軟		
15	6	6	弥生土器	甕	CZ46	SH0699 西辺周壁溝		5.9		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	内;淡褐 外;赤褐	良	底部にて ほぼ完形	
16	6	7	ミニチュ ア土器	高杯 形	CZ46	SH0699 西辺周壁溝				内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡黄灰 - 淡 灰	良	脚部にて 端部を欠 くのみ	
17	6	21	須恵器	杯蓋	CZ45	SH0606	12.2	5cm くらい		内;ロクロナデ 外;回転ヘラ削り (反時 計周り)	密	φ 5	内;青灰 外;暗灰青	良好	口縁にて 1/6	
18	6	22	須恵器	杯身	CZ45	SH0606	11.4	4.9		内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り (方向不明)	やや 密	φ 3	灰青	良	1/4	
19	6	24	弥生土器 /土師器	壺	CZ45	SH0606	11.2			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	内;黄褐 外;赤褐	良	口縁にて 1/3	
20	6	73	弥生土器	壺	CZ45	SH0606 西辺周壁溝	11.8			内外;磨滅のため不明	やや 粗	φ 1-9	淡褐	やや 軟	上半部にて ほぼ完形	光波取上 6 次 -13
21	6	75	弥生土器	壺	CZ45	SH0606		5.4		内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-4	暗褐	良	底部にて ほぼ完形	
22	6	20	土師器	甕	CZ45	SH0606 西辺周壁溝	14.2			口縁;ヨコナデ 内外;ハケ	やや 密	φ 2-3	内;淡黄灰 外;褐	良	口縁にて 1/6	
23	6	25	弥生土器 /土師器	高杯	CZ45	SH0606		12.0		内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	やや 軟	脚部にて 1/3	脚部穿孔 3ヶ所 、光波取上 6 次 -9
24	6	18	ミニチュ ア土器	蓋形	DA45	SH0606	5.8			内;ナデ,オサエ 外;板ないし棒状工具ナ デ	密	ほとんど 含まない	黄褐	良好	完形	2 孔 1 対の穿孔 あり,外面に黒 斑あり
25	6	17	ミニチュ ア土器	甕形	CZ45	SH0606 西辺周壁溝		3.6		内;磨滅のため不明 外;ハケ,オサエ	密	φ 6	褐	良好	底部にて 完形	
26	6	15	弥生土器 /土師器	壺	CZ45	SH0606 西辺周壁溝		6.0		内;磨滅のため不明 外;ハケ	やや 密	φ 1-4	内;灰黒 外;淡黄灰 - 黒灰	良	底部にて 完形	外面に黒斑あり 、光波取上 6 次 -11
27	6	74	弥生土器	壺	CZ45	SH0606		5.6		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	内;黄灰 外;淡赤褐	良	底部にて 完形	
28	6	23	土師器	甕	CZ45	SH0606	22.0			内外;磨滅のため不明	やや 密	ほとんど 含まない	淡黄褐	やや 軟	口縁にて 1/8	
29	6	19	土師器	甕	CZ45	SH0606 西辺周壁溝		5.6		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡赤褐	良	底部にて 完形	光波取上 6 次 -15
30	6	16	土師器	甕	CZ45	SH0606				内;磨滅のため不明 外;板ナデ	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	底部にて 端部を欠 くのみ	光波取上 6 次 -10
31	6	76	弥生土器	壺	CZ45	SH0606 西辺周壁溝		7.0		内;磨滅のため不明 外;ハケ	密	φ 1-5	内;灰褐 外;灰褐 - 淡赤褐	良	下半部にて 1/3	光波取上 6 次 -14
32	6	71	石器	砥石	CZ45	SH0606				使用面は 2 面あり, 283g					上半分を 欠く	砂岩製
33	6	14	須恵器	杯身	DA47	P0630 SH0602 南西主柱穴	11.0	4.7		内;ロクロナデ 外;回転ヘラ削り (時計 周り)	やや 密	φ 1-3	暗青灰	良好	1/4	
34	6	72	弥生土器 /土師器	高杯	DA44	P0622 SH0606 内		11.6		内;ヨコナデ 外;ミガキ	密	ほとんど 含まない	暗褐	良好	脚部にて 1/8	
35	6	13	弥生土器 /土師器	甕	DA45	P0613 SH0607 南西主柱穴	14.2			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	内;淡黄褐 外;灰褐	良	口縁にて 1/12	
36	6	44	弥生土器	甕	CZ46	SH0622 南辺中央土坑	12.0			口縁;磨滅のため不明 内外;ハケ	密	φ 1-4	内;淡黄褐 - 淡赤褐 外;黒褐	良	1/6	
37	6	47	弥生土器	甕	CY46	SH0622	14.6			口縁;刺突 内外;ハケ	密	φ 1-2	淡黄褐	良好	口縁にて 1/8	光波取上 6 次 -33
38	6	46	弥生土器	甕	CY45	SH0622				内;オサエ 外;ハケ	密	φ 1	淡褐	良	口縁にて 1/6	光波取上 6 次 -28
39	6	45	弥生土器	甕	CZ46	SH0622	12.0			口縁;磨滅のため不明 外;ハケ	やや 密	φ 1-2	淡赤褐	良	口縁にて 1/6	光波取上 6 次 -48
40	6	48	弥生土器	甕	CZ46	SH0622				内;オサエ 外;ハケ,刺突	密	φ 1-2	淡黄褐	良	胴部にて 1/8	外面に煤,内面 に内容物が付着 、光波取上 6 次 -54

Tab.2-3 遺物観察表

報告 番号	調査 回数	実測 番号	種別	器種	地区	遺構/層位	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	礫の大き さ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
41	6	37	弥生土器	甕	CZ45	SH0622	14.0			口縁;ハケ 内;ハケ, オサエ,板ナデ 外;刺 突,磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	黄灰色	良好	口縁にて 1/2	光波取上 6 次 -57
42	6	39	弥生土器	甕	CZ46, CY45	SH0622 下半 分,SH0622	11.6	4.2		口縁;ヨコナデ 内;ナ デ,オサエ 外;ナデか	密	ほとんど 含まない	黄灰	良好	口縁にて 1/3	底部は光波取上 6 次 -30
43	6	43	弥生土器	甕	CZ46	SH0622	14.8			口縁;ヨコナデ,ヨコハ ケ 内;ナデ 外;ハケ	密	φ 2-3	内;黒灰 外;淡黄褐	良	口縁にて 1/6	光波取上 6 次 -48
44	6	41	弥生土器	甕	CZ46	SH0622 下半分	11.2			口縁;ヨコナデ 内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	褐	良	口縁にて 1/4	
45	6	42	弥生土器	甕	CY46	SH0622 下半分	11.6			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	内;淡黄褐 - 淡黒褐 外;淡黄褐	良	口縁にて 1/6	
46	6	40	弥生土器	甕	CZ46	SH0622 下半分		8.0		内;ナデ 外;ナデか?	密	φ 1-2	淡黄灰 - 淡 赤褐	良好	脚部にて 1/3	
47	6	38	弥生土器	鉢	CZ46	SH0622 下半分	16.0			口縁;ハケ 内;板ナデ 外;ハケ,ナデ,ケズリ	密	ほとんど 含まない	内;黒褐 外;暗褐	良好	口縁にて 1/4	
48	6	66	弥生土器	鉢	CZ46, CY46	SH0622, SH0622 下半分	21.2		11.5	内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 2-6	灰褐	良	1/4	光波取上 6 次 -56
49	6	58	弥生土器	鉢	CZ45	SH0622	18.6			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 2-5	内;灰黒 外;淡灰褐	良	口縁にて 1/8	光波取上 6 次 -58
50	6	65	土製品	紡錘 車	CZ45	SH0622				ナデ,オサエ, 9.1g	密	φ 1	淡黄褐	良	1/2	
51	6	26	弥生土器	高杯	CZ46	SH0622	13.6			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3	黄褐	やや 軟	2/3	外面に黒斑あり 光波取上 6 次 -42
52	6	35	弥生土器	高杯	CZ46	SH0622 下半分	13.2			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡黄灰	良	杯部にて 1/6	
53	6	28	弥生土器	高杯	CZ46	SH0622	23.0			内外;磨滅のため不明	やや 粗	φ 1-3	淡黄灰	良	杯部にて 1/4	外面に黒斑あり 光波取上 6 次 -40.60
54	6	29	弥生土器	高杯 /器台	CY45	SH0622		29.0		内外;ミガキ	密	φ 1-3	淡褐	良	脚部にて 1/3	穿孔はおそらく 4ヶ所,光波取 上 6 次 -40.60
55	6	34	弥生土器	高杯	CZ46	SH0622				内;ナデ 外;ミガキ	密	φ 1-2	淡灰黄	良	杯部を欠 くのみ	脚部穿孔なし, 光波取上 6 次 -55
56	6	36	弥生土器	高杯	CZ46	SH0622 下半分		7.0		内外;磨滅のため不明	密	φ 1	淡黄白	良	口縁にて 1/8,脚部 にて 2/3	脚部穿孔 3ヶ所
57	6	33	弥生土器	高杯	CZ46	SH0622				内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡黄灰	良	脚部にて 端部を欠 くのみ	光波取上 6 次 -51
58	6	31	弥生土器	高杯	CY45	SH0622		16.4		内;ナデ 外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	淡黄灰	良	脚部にて 1/8	光波取上 6 次 -30
59	6	32	弥生土器	高杯	CZ45	SH0622				内;磨滅のため不明 外;3条櫛描が6条	密	φ 1-2	淡黄灰	良	脚部にて 端部を欠 くのみ	光波取上 6 次 -59
60	6	30	弥生土器	高杯	CY46	SH0622	14.2			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡灰黄	良	杯部にて 2/3	光波取上 6 次 -62
61	6	27	弥生土器	器台	CZ46	SH0622		13.3		内;コビオサエ 外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	橙	良好	口縁端部 を欠くの み	穿孔は上下でず らして各4孔ず つあける
62	6	52-3	弥生土器	壺	CY46	SH0622	16.0			口縁;刺突 内外;磨滅のため不明	密	φ 1-5	灰褐	良	口縁にて 完形	光波取上 6 次 -45
63	6	53	弥生土器	壺	CZ46	SH0622				内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 2-6	淡黄褐	良	頸部にて 2/3	光波取上 6 次 -30
64	6	60	弥生土器	壺	CY46	SH0622 上半分	11.6			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	黄褐	良	口縁にて 1/6	
65	6	59	弥生土器	壺	CZ46	SH0622 上半分	16.0			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3	淡灰褐	良	口縁にて 1/8	
66	6	62	弥生土器	壺	CY46	SH0622 下半分	11.6			内;オサエ 外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	黄褐	良	口縁にて 1/4	
67	6	63	弥生土器	壺	CY46	SH0622 下半分	9.0			内外;磨滅のため不明	密	φ 1	淡黄褐	良	口縁にて 1/4	
68	6	57	弥生土器	壺	CY45	SH0622	9.0			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	口縁にて 1/4	光波取上 6 次 -30
69	6	61	弥生土器	壺	CZ46	SH0622 下半分 SH0622	29.6			内;磨滅のため不明 外;ハケか	密	φ 1-3	淡黄褐	良	口縁にて 1/8,頸部 にて 1/4	光波取上 6 次 -37

Tab.2-4 遺物観察表

報告 番号	調査 回数	実測 番号	種別	器種	地区	遺構/層位	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	礫の大き さ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
70	6	54	弥生土器	壺	CY45	SH0622 下半分	17.0			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-4	淡黄褐	良	口縁にて 1/8	
71	6	55	弥生土器	壺	CZ46	SH0622		5.0		内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-5	内;灰黒 外;淡黄褐	良	底部にて 完形	光波取上 6 次 -51
72	6	52-1	弥生土器	壺	CY46	SH0622				内;オサエ 外;ハケ	密	φ 1-3	内;灰褐 外;淡黄褐	良	頸部にて 1/3	光波取上 6 次 -33
73	6	52-2	弥生土器	壺	CY46	SH0622		5.0		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	内;灰褐 外;淡黄褐	良	底部にて 1/3	光波取上 6 次 -33
74	6	50	弥生土器	壺	CZ46	SH0622		6.4		内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-4	淡黄灰	やや 軟	底部にて 完形	光波取上 6 次 -38
75	6	56	弥生土器	壺	CZ46	SH0622		4.0		内;ハケ, ナデ 外;ミガキ	密	φ 1-2	内;赤褐 - 淡黄褐 外;淡黄褐	良好	底部にて 1/3	光波取上 6 次 -39
76	6	64	弥生土器	壺	CZ46	SH0622 下半分		7.7		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	内;灰褐 外;淡赤褐 - 灰褐	良	底部にて 完形	
77	6	51	弥生土器	壺	CY46	SH0622		4.3		内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 2-8	内;灰黒 外;淡黄褐	良	底部にて 完形	光波取上 6 次 -32
78	6	49	弥生土器	壺	CZ46	SH0622		5.3		内;磨滅のため不明 外;ミガキ	密	φ 1-3	赤褐	良好	底部にて 完形	光波取上 6 次 -48
79	6	79	弥生土器	甕	CX45	SH0633 東辺周壁溝	5.4	2.8	7.7	内外;磨滅のため不明	やや 粗	φ 1-3	淡黄褐 - 黒 褐	良	ほぼ完形	光波取上 6 次 -72
80	6	83	弥生土器	壺	CW/ CX46	SH0633 南辺周壁溝	6.8			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	口縁にて 1/6	
81	6	84	弥生土器	壺	CV45	SH0633	11.6			内外;磨滅のため不明	やや 密	ほとんど 含まない	淡灰褐	良	口縁にて 1/8	
82	6	88	弥生土器	壺	CV45	SH0633	33.6			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡黄褐	良	口縁にて 1/8	
83	6	86	弥生土器	壺	CW46	SH0633	27.4			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	黄褐	良好	口縁にて 1/16	
84	6	87	弥生土器	壺	CV45	SH0633	17.0			口縁;円形浮文 内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡灰褐	やや 軟	口縁にて 1/4	
85	6	80	弥生土器	壺	CW44	SH0633 北辺周壁溝		6.0		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-4	淡褐	良	底部にて 完形	光波取上 6 次 -71
86	6	82	弥生土器	壺 /甕	CV46/ CW45/ CX45	SH0633/47 東西ベルト		5.0		内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3	灰褐	良	底部にて 完形	
87	6	94	弥生土器	甕	CV46/ CW45/ CX45	SH0633/47 東西ベルト	12.7			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡黄褐	良	口縁にて 1/8	
88	6	92	弥生土器	高杯	CV45	SH0633	18.2			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	口縁にて 1/8	
89	6	90	弥生土器	器台?	CV45	SH0633				内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	淡黄褐	良	脚部にて 端部を欠 くのみ	
90	6	89	弥生土器	高杯	CV46	SH0634 西辺周壁溝				内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	灰白	良	脚部にて 端部を欠 くのみ	光波取上 6 次 -63
91	6	81	弥生土器	壺	CV45	SH0634 北辺周壁溝				内;磨滅のため不明 外;ハケ	密	ほとんど 含まない	内;黒灰 外;暗赤褐	良	底部にて 完形	光波取上 6 次 -76
92	6	78	弥生土器	壺	CV46	P06400 SH0633/47 南西主柱穴		3.3		内;ナデ, オサエ 外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡褐	良好	口縁を欠 くのみ	光波取上 6 次 -78
93	6	77	弥生土器	甕	CV46	P06400 SH0633/47 南西主柱穴		4.0		内;ナデ 外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	淡黄灰	良	下半部に て完形	光波取上 6 次 -77
94	6	93	弥生土器	甕	CW46	P06396 SH0633/47 南辺中央土坑	14.8			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3	淡黄褐	良	口縁にて 1/6	
95	6	91	弥生土器	高杯	CW46	P06396 SH0633/47 南辺中央土坑		10.4		内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3	淡黄褐	やや 軟	脚部にて 1/6	
96	6	85	弥生土器	壺	CW46	P06397 SH0633/47 内	13.6			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	灰褐	良	口縁にて 1/6	
97	6	102	土師器	甕	CX46	P06303 SH0631 内	6.8			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	口縁にて 1/6	
98	6	101	須恵器	杯身	CX46	P06117 SH0632 内	10.8			内;ロクロナデ 外;回 転へラ削り (方向不明)	密	ほとんど 含まない	灰青	良好	口縁にて 1/8	
99	6	110	弥生土器	壺	CV48	P06205 SH0740 内	17.0			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-4	淡黄褐	良	口縁にて 1/8	

Tab.2-5 遺物観察表

報告 番号	調査 回数	実測 番号	種別	器種	地区	遺構/層位	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	礫の大き さ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
100	6	111	弥生土器	壺	CV47	P06207 SH0740 内	14.4			内外; 磨滅のため不明	密	φ 1-3	内; 灰黒 外; 淡灰褐	良	口縁にて 1/6	
101	6	112	弥生土器	甕 いし 壺	CV47	P06213 SH0740 内		5.8		内; 磨滅のため不明 外; ナデ, オサエ	密	φ 1-2	暗褐	良	底部にて 1/3	
102	6	104	弥生土器	壺	CV46	SH0641 西辺周壁溝	14.4			内; 磨滅のため不明 外; ハケ	密	φ 1-3	淡赤褐	良	口縁にて 1/4	光波取上 6 次 -64
103	6	106	弥生土器	高杯	CV49	SH0642 北辺周壁溝	16.0			内外; 磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3	淡黄白	良	口縁にて 1/4	
104	6	105	ミニチュ ア土器	甕形	CU49	SH0643 東辺周壁溝		3.0		内; 磨滅のため不明 外; オサエ	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良好	底部にて 完形	
105	6	107	弥生土器	高杯	CW49	SH0644 北辺周壁溝		14.4		内; 磨滅のため不明, ナ デか 外; ミガキ	密	ほとんど 含まない	淡褐	良好	脚部にて 1/8	
106	6	109	弥生土器	高杯	CV49	P06170 SH0641-44 内	15.0			内外; ミガキ	密	ほとんど 含まない	淡黄灰	良好	口縁にて 1/12	
107	6	108	弥生土器 / 土師器	壺	CV48	P06139 SH0641-44 内		3.6		内外; 磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	底部にて 2/3	
108	6	117	弥生土器 / 土師器	鉢?	CU46	SH0635	15.4			内外; 磨滅のため不明	やや 密	φ 1.6	淡黄灰	良	口縁にて 1/8	
109	6	116	弥生土器 / 土師器	甕 / 壺	CV46	SH0635		5.2		内外; 磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡黄灰	良	底部にて 1/3	
110	6	120	須恵器	杯蓋	CU43/44, CV43/44	SH0651 東 西ベルト以北				内外; ロクロナデ	密	ほとんど 含まない	灰	良好	つまみ部 にて完形	
111	7	121	須恵器	杯蓋	CT44	SH0778 西 辺周壁溝	14.0	5cm くらい		内; ロクロナデ 外; 回 転ヘラ削り (時計周り)	密	φ 1-2	青灰	良好	1/3	光波取上 7 次 -98
112	6	119	土師器	甌	CU44/45, CV44/45	SH0651 東 西ベルト以南	16.8			口縁; ヨコナデ 内外; 磨滅のため不明	密	φ 1	黄褐	良	口縁にて 1/8	
113	6	118	弥生土器	壺	CU44/45, CV44/45	SH0651 東 西ベルト以南		10.0		内; ハケ 外; 磨滅のため不明	やや 粗	φ 1-4	内; 黒灰 外; 黄褐	良	底部にて 1/3	
114	7	122	須恵器	高杯	CT44	P07221 SH0778 内		13.6		内外; ロクロナデ 外; カキ目	密	ほとんど 含まない	灰	良好	脚部にて 1/12	
115	6	95	須恵器	杯蓋	DB44	SH0608/ 12/13	13.6			内; ロクロナデ 外; 回 転ヘラ削り (方向不明)	密	φ 1-3	暗青灰	良好	口縁にて 1/4	
116	6	96	須恵器	杯身	DB44	SH0608/ 12/13		5cm くらい		内; ロクロナデ 外; ヘラ切り	密	φ 1-2	灰白	やや 軟	1/6	
117	7	153	須恵器	杯蓋	DB44	SH0753 埋土	13.5		3.6	内; ロクロナデ, 不整方 向ナデ 外; 回転ヘラ削 り (反時計周り)	密	φ 1-2	暗青灰	良好	1/3	光波取上 7 次 -26
118	7	154	須恵器	杯身	DB43	SH0753 埋土	12.0			内外; ロクロナデ	密	ほとんど 含まない	灰青	良好	口縁にて 1/4	
119	6	98	須恵器	高杯	DB44	SH0608	11.6	11.5cm くらい		内外; 磨滅のため不明	やや 密	φ 1-2	灰褐	良	1/3	光波取上 6 次 -8
120	6	99	石製品	装身 具か	DB44	SH0608 /12/13				六面体の棒状, 4.0g			透明		上半部を 欠く	石英製
121	6	97	須恵器	甕	DB44	P0640 SH0616 南西主柱穴	18.6			内外; ロクロナデ	密	φ 1-3	灰白	良好	口縁にて 1/8	
122	6	100	須恵器	甕	DB44	P0621 SH0608 内	18.6			口縁; ロクロナデ 内; オサエ 外; タタキ	密	φ 1-3	淡灰青	良好	口縁にて 1/4	
123	7	137	須恵器	杯蓋	DB43	SH0757 埋土				内; ロクロナデ	密	φ 1-2	灰青	良好	つまみ部 にて完形	
124	7	138	弥生土器	壺	DB43	SH0757 埋土	16.0			内外; 磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	内; 淡黄褐 外; 淡褐	良好	口縁にて 1/8	
125	7	140	弥生土器	壺	DB42	SH0775 埋土	19.0			内外; 磨滅のため不明	密	φ 1-3	黄褐	良	口縁にて 1/6	
126	7	141	須恵器	杯身	DB42	SH0759 埋土	13.8		3.6	内; ロクロナデ 外; 回 転ヘラ削り (時計周り)	密	φ 1-2	灰黄	良	1/3	光波取上 7 次 -94
127	7	142	ミニチュ ア土器	甕形	DB43	SH0759 床直	5.5cm くらい		5.7cm くらい	口縁; ヨコナデ 内; オサエ 外; オサエ, ナデ	密	φ 1-2	褐灰	良好	口縁を欠 くのみ	外面に黒斑あり 光波取上 7 次 -59
128	7	144	弥生土器	壺	DA42+ DB42	SH0775 床直	13.6			口縁; 磨滅のため不明 内; オサエ 外; 刺突, 直線文	密	ほとんど 含まない	明褐	良	口縁にて 1/4	外面に黒斑あり 光波取上 7 次 -99+100
129	7	146	石器	砥石	DB42	SH0775 埋土				使用面は 1 面のみ, 1728g					ほぼ完形	砂岩製か? 光波 取上 7 次 -101
130	7	139	須恵器	杯身	DB42	SH0759/75	10.6			内; ロクロナデ	密	φ 1-2	灰	やや 軟	口縁にて 1/8	

Tab.2-6 遺物観察表

報告 番号	調査 回数	実測 番号	種別	器種	地区	遺構/層位	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	礫の大き さ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
131	7	248	須恵器	杯蓋	DB41	SH0767 埋土	14.4		4.4	内;ロクロナデ 外;回転ヘラ削り(反時計周り)	密	φ 1-3	青灰	良好	ほぼ完形	光波取上 7 次 -49+50
132	7	249	須恵器	杯蓋	DB41	SH0767 埋土	13.6		4.5	内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り(時計周り)	密	φ 1-4	暗灰青	良	ほぼ完形	光波取上 7 次 -48+49
133	7	250	須恵器	杯身	DB41	SH0767 床直	12.2		3.5	内;ロクロナデ 外;回転ヘラ削り(反時計周り)	密	φ 1-2	暗青灰	良好	1/2	
134	7	251	須恵器	杯身	DB41	SH0767 埋土	11.6			内外;ロクロナデ	密	ほとんど 含まない	青灰	良好	口縁にて 1/4	
135	7	252	須恵器	高杯	DB41	SH0767 埋土				内外;ロクロナデ	密	ほとんど 含まない	暗青灰	良好	脚部にて 端部を欠 くのみ	光波取上 7 次 -48
136	7	253	須恵器	ハソ ウ	DB41	SH0767 床直	13.0			内外;ロクロナデ 外;沈線、波状文	密	φ 1	内;灰青 外;暗灰青	良好	口縁にて 1/8	光波取上 7 次 -51
137	7	150	須恵器	杯蓋	CY44	SH0750 東辺周壁溝	14.0		3.5cm くらい	内;ロクロナデ 外;回転ヘラ削り(反時計周り)	密	φ 1-2	暗青灰	良好	口縁にて 1/3	
138	7	148	須恵器	杯身	CZ43	SH0750 東辺周壁溝	12.0		3.2	内;ロクロナデ 外;回転ヘラ削り(反時計周り)	密	φ 1	灰青	良好	1/6	
139	6	149	須恵器	杯身	CY44	SH0610 →SH0750	11.2		3.5cm くらい	内外;ロクロナデ	密	φ 1-2	灰	やや 軟	口縁にて 1/8	光波取上 6 次 -2
140	7	147	須恵器	杯身	CZ43	SH0750-52 埋土 0-10cm	12.2		3.4	内外;ロクロナデ 外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	灰	やや 軟	1/3	光波取上 7 次 -24
141	7	151	須恵器	高杯	CZ43	SH0750-52 埋土 0-10cm		10.2		内外;ロクロナデ	密	ほとんど 含まない	暗青灰	良好	底部にて 1/6	
142	7	152	須恵器	壺	CY43	SH0751/52 埋土 0-10cm	16.1			内外;ロクロナデ	密	ほとんど 含まない	暗青灰	良好	底部にて 1/8	
143	7	189	弥生土器	高杯	CZ43	SH0751/52 埋土 20cm- 床面		18.4		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡黄褐	良	脚部にて 1/4	
144	6	207	弥生土器	壺	CY44	SH0609		6.8		内外;磨滅のため不明	密	φ 2-4	淡黄褐	良	底部にて 完形	
145	7	191	弥生土器	高杯	DA43	SH0751 東辺周壁溝				内;磨滅のため不明 外;直線文	密	ほとんど 含まない	淡黄灰	良好	接合部分 にて完形	
146	6	216	弥生土器	甕	CY44	SH0610 →SH0752		7.4		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-5	淡黄灰	良	底部にて 完形	光波取上 6 次 -3
147	6	217 -2	石器	磨石	CY44	SH0610 →SH0752				116.8g					完形	花崗岩製
148	7	214	弥生土器 /土師器	甕	CY42	SH0751 /52/66		7.8		内;オサエ 外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	黄灰-淡赤 褐	良	底部にて 1/4	光波取上 7 次 -45
149	6	183	弥生土器	高杯	CZ44	SH0609/17	22.0			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3	灰褐	良	杯部にて 2/3	光波取上 6 次 -21
150	7	185	弥生土器	高杯	CZ43	SH0751/52 埋土 20cm- 床面	21.0			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-2,6	淡黄褐	良	口縁にて 1/8	
151	7	186	弥生土器	高杯	DA43	SH0751/52 10-20cm	20.0			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡褐	良	杯部にて 1/3	
152	7	187	弥生土器	高杯	DA43	SH0751/52 10-20cm	20.0			内;磨滅のため不明 外;ミガキ	密	φ 1-2	淡褐-黒褐	良好	口縁にて 1/6	
153	7	184	弥生土器	高杯	CZ43	SH0751/52 埋土 20cm- 床面	15.0			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	口縁にて 1/8	
154	6	190	弥生土器	高杯	CZ44	SH0609/17 南辺周壁溝		9.4		内外;ヨコナデ	密	ほとんど 含まない	淡黄灰	良好	脚部にて 1/4	
155	6	202	弥生土器	甕	CZ44	SH0609/17	18cm くらい			内;磨滅のため不明 外;直線文、ハケ	密	φ 1-3	内;淡黄褐 外;暗褐- 黄灰	良	口縁にて 1/12	
156	7	201	弥生土器	甕	CZ43	SH0751/52 埋土 20cm- 床面	18.6			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-4	淡灰褐	良	口縁にて 1/4	
157	7	215	弥生土器	甕	DA43	SH0751/52		8.0		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-5	淡灰褐	良	底部にて 1/2	光波取上 7 次 -34
158	7	217	弥生土器	甕	DA43	SH0751/52 埋土 20cm- 床面		7.0		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	内;黒灰 外;淡赤褐	良	底部にて 1/2	

Tab.2-7 遺物観察表

報告 番号	調査 回数	実測 番号	種別	器種	地区	遺構/層位	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	礫の大き さ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
159	7	204	弥生土器	甕	DA43	SH0751/52 埋土 0-10cm	19.4	7.4		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-4	内;淡黄褐 -黒褐 外; 淡赤褐	良	口縁にて 1/4 底部にて 完形	光波取上 7 次 -34
160	7	199	弥生土器	壺	DA43	SH0751/52 埋土 0-10cm	12.8			内外;磨滅のため不明	密	φ 2-5	内;灰黄 - 黒褐 外;淡黄褐	良	口縁にて 1/4	
161	7	208	弥生土器	甕 / 壺	CZ44	SH0609/17		3.6		内;ハケ 外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	内;淡黄褐 外;淡黄褐 - 黒灰	良	底部にて 完形	
162	6	206	弥生土器	壺	CZ44	SH0609/17		6.7		内外;磨滅のため不明	密	φ 2-5	淡灰褐 - 淡 黄褐	良	底部にて 完形	
163	6	205	弥生土器	壺	CZ44	SH0609/17		5.6		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-4	淡黄褐	良	底部にて 1/3	
164	7	188	弥生土器	高杯	CZ42, CZ44	SH0766 床直 (焼土付近)	22.6			内外;磨滅のため不明	密	φ 1	淡黄灰	良	口縁にて 1/8	光波取上 7 次 -84.96
165	7	192	弥生土器	高杯	CZ43	SH0766 床直 (焼土付近)		11.4		内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-2	淡褐灰	良	脚部にて 1/2	
166	7	200	弥生土器	甕	CZ42	SH0766 埋土	18.0			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	褐灰	良	口縁にて 1/8	光波取上 7 次 -87
167	7	203	弥生土器	甕	CZ43	SH0766 床直 (焼土付近)	22.6			口縁;刺突 内;ハケ 外;ハケ	やや 密	φ 1-5	淡橙	良	口縁にて 1/6	光波取上 7 次 -90
168	7	213	弥生土器	甕	CZ43	SH0766 埋土		9.4		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	赤褐	良	底部にて 1/3	焼成前穿孔, 光 波取上 7 次 -89
169	7	211	弥生土器	甕	CZ43	SH0766 床直 (焼土付近)		8.0		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡橙	良	底部にて ほぼ完形	
170	7	212	弥生土器	甕	CZ43	SH0766 床直		7.3		内;磨滅のため不明 外;ハケ	密	φ 1-2	暗褐	良	底部にて 完形	光波取上 7 次 -68
171	7	209	弥生土器	甕	CZ42	SH0766 埋土				内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	内;灰褐 外;淡赤褐	良	底部にて 端部を欠 くのみ	
172	7	210	弥生土器	甕	CZ43	SH0766 床直 (焼土付近)		7.0		内;ナデ 外;磨滅のため不明	密	φ 1-5	暗褐	良	底部にて 完形	
173	7	196	弥生土器	壺	CZ42, CZ43	SH0766 床直 (焼土付近)	14.3			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-5	淡赤褐 - 黄 灰	良	頸部にて 1/3	光波取上 7 次 -67.84
174	6	197	弥生土器	壺	CZ44	SH0610	16.6			口縁;凹線 3 条 内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 2	淡橙	良	口縁にて 1/6	
175	6	198	弥生土器	壺	CZ44	SH0610	16.0			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	内;黒褐 外;灰黄	良	口縁にて 1/6	
176	6	193 -1	弥生土器	脚付 壺	CY44	SH0610				内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄灰	良	杯部にて 口縁を欠 くのみ	光波取上 6 次 -4
177	6	193 -2	弥生土器	脚付 壺	CY44	SH0610		11.0		内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄灰	良	脚部にて 1/4	光波取上 6 次 -4
178	6	195	弥生土器	壺	CY44	SH0610	9cm くらい			口縁;磨滅のため不明 内;ナデ 外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	底部を欠 くのみ	光波取上 6 次 -1
179	6	194	弥生土器	壺?	CY44	SH0610		3.9		内;オサエ, ナデ 外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	黄灰	良	胴部以下 完形	光波取上 6 次 -2
180	7	218	異形土器	鳥形?	DA43	SH0766 床直				内;ナデ, オサエ 外;ミガキ	密	ほとんど 含まない	内;灰黒 外;暗褐	良好	1/3, 台部 を欠く	頭部は存在しない
181	7	222	弥生土器	器台 か	CZ42	SH0768 西辺周壁溝	17.0			内外;磨滅のため不明	密	φ 1	黄褐	良	口縁にて 1/6	
182	7	220	弥生土器 / 土師器	高杯	DA43	SH0768 床直				内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	脚部にて 1/4	
183	7	226	弥生土器	壺	CZ42	SH0768 0-10cm	19.2			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡黄褐	良	口縁にて 1/6	
184	7	227	弥生土器	壺	DA42	SH0768 0-10cm	17.4			口縁;円形浮文 内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	黄白	良	口縁にて 1/12	
185	7	221	弥生土器	壺	CZ42	SH0768 床直 10cm- 床直		7.4		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	内;黄灰 - 赤褐 外;黒褐	良	底部にて 1/3	
186	7	224	弥生土器 / 土師器	壺	DA43	SH0768 床直	14.2			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡褐	良	口縁にて 1/8	
187	7	225	弥生土器	壺	CZ42	SH0768 10cm- 床直	12.0			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	口縁にて 1/8	
188	7	223	弥生土器	甕な いし 壺?	CZ42	SH0768 埋土		11.2		内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3	淡赤褐	良	底部にて 1/4	光波取上 7 次 -61

Tab.2-8 遺物観察表

報告 番号	調査 回数	実測 番号	種別	器種	地区	遺構/層位	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	礫の大き さ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
189	7	228	弥生土器	甕	DA42	SH0768 0-10cm		7.3		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡赤褐	良	底部にて ほぼ完形	
190	7	219	弥生土器 /土師器	高杯	CZ42	P07181 SH0768 北西 主柱穴		11.0		内;磨滅のため不明 外; ミガキ	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良好	脚部にて ほぼ完形	光波取上 7 次 -63
191	6	229	須恵器	杯蓋	CX43	SH0665	12.2			内外;ロクロナデ	密	ほとんど 含まない	暗青灰	良好	口縁にて 1/8	
192	7	230	土師器	甕	CX43	SH0730 埋土	10.1			内外;磨滅のため不明	密	φ 2-3	淡黄褐	良	口縁にて 1/8	
193	7	231	土師器	甕	CX43	SH0730 埋土	20.0			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	黄褐	良	口縁にて 1/8	
194	6	123	弥生土器	壺	CV43	SH0654		5.0		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	明褐	良	底部にて 1/2	
195	7	145	弥生土器	甕	CW42	P0766 SH0729 内		5.5		内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3 .10	内;淡黄褐 外;淡赤褐	良	底部にて 完形	
196	7	143	土師器	甕	CV42	P0788 SH0729 内	16.0			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	黄灰	良	口縁にて 1/8	
197	7	247	須恵器	高杯	DA40	SH0760 埋土		8.8		内外;ロクロナデ 外;カキ目	密	φ 1-3	暗青灰	良好	脚部にて 2/3	
198	6	125	土師器	甕	CV43	SH0661		8.0		内;磨滅のため不明 外;ナデ	密	φ 2-4	淡赤褐	良	底部にて 完形	光波取上 6 次 -79
199	7	129	土師器	甕	CV42	SH0711 東辺周壁溝	13.0			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡赤褐	良好	口縁にて 1/6	
200	6	124	弥生土器	壺	CV43	SH0659-61 周壁溝	13.2			内外;磨滅のため不明	密	φ 2-3	黄褐	良好	口縁にて 1/6	
201	7	127	弥生土器	高杯	CT44	SH0710 埋土		12.0		内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄灰	良	脚部にて 1/4	
202	7	126	弥生土器	壺	CT44	SH0710 床直	16cm くらい			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡黄白	良	頸部にて 1/4	光波取上 7 次 -97
203	7	128	弥生土器	甕	CS43	SH0710 埋土	15.8			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	黄白	やや 軟	口縁にて 1/8	
204	7	131	弥生土器	高杯?	CT42	P0736 SH0710 内				内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡赤褐	良	杯部にて 口縁を欠 く	
205	7	130	弥生土器	甕	CT45	P07239 SH0779 南辺 中央土坑	13.6			内外;磨滅のため不明 外;ハケ	密	φ 1-4	暗褐灰	良	口縁にて 1/4	光波取上 7 次 -102
206	6	156	須恵器	杯蓋	CX39	SH0685	13.2	4.5cm くらい		内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り (時計周り)	密	φ 1-3	青灰	良好	1/3	
207	7	158	須恵器	杯身	CX41	SH0718	11.3	5.6		内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り (時計周り)	密	φ 1-4	灰青	良好	1/2	光波取上 7 次 -3
208	7	162	土師器	甕	CW 42/43, CX43	SH0718 西辺周壁溝	15.4			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	やや 軟	口縁にて 1/4	
209	7	164	土師器	甕	CX41	SH0718 東辺周壁溝		9.8		内;磨滅のため不明 外;ナデ	密	φ 1-3	淡桃 - 淡黄 褐	良	底部にて ほぼ完形	光波取上 7 次 -2
210	7	165	須恵器	杯蓋	CZ40	SH0742 SH0737 相当	13.9	4.7		内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り (時計周り)	密	φ 1-3	灰青	良好	1/4	
211	7	166	須恵器	杯身	CY41	SH0742 埋土 SH0737 相当	12.3	5.3		内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り (時計周り)	密	φ 1-3	灰青	良好	1/3	光波取上 7 次 -9
212	7	167	須恵器	杯身	CY40 + CX41	SH0742 埋土 +SH0737 埋 土 (上層)	10.9	4.9		内;ロクロナデ, 不整方 向ナデ 外;回転ヘラ削 り (反時計周り)	密	ほとんど 含まない	青灰	良好	1/3	光波取上 7 次 -11
213	7	170	須恵器	杯身	CY40	SH0742 埋土 SH0737 相当	11.2			内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り (方向不明)	密	ほとんど 含まない	暗青灰	良好	1/3	光波取上 7 次 -7
214	7	168	須恵器	杯身	CZ40	SH0742 埋土 SH0737 相当	11.2	5.4		内;ロクロナデ, 不整方 向ナデ 外;回転ヘラ削 り (方向不明)	密	φ 1-2	暗青灰	良好	1/4	光波取上 7 次 -8
215	7	169	土師器	甕	CX41	SH0737 埋土 (上層)		9.8		内外;ナデ, オサエ	密	φ 2-4	黄褐	良	底部にて 1/3	
216	7	176	須恵器	壺	CX40	SH0733-35 埋土 SH0737 相当	21.2			内外;ロクロナデ	やや 密	ほとんど 含まない	灰白	良好	口縁にて 1/6	
217	7	155	須恵器	杯蓋	CX41	SH0733-35 埋土	10.8	5.1		内;ロクロナデ 外;回転ヘラ削り (反時 計周り)	密	φ 1-3	灰青	やや 軟	1/3	
218	7	157	須恵器	杯蓋	CX41	SH0733-35 埋土	14.6	4.5cm くらい		内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り (方向不明)	密	φ 1-2	灰黄	良	口縁にて 1/4	
219	7	159	須恵器	杯身	CX41	SH0733-35 埋土 SH0737 相当	11.6			内外;ロクロナデ	密	φ 1-3	暗青灰	良好	口縁にて 1/4	

Tab.2-9 遺物観察表

報告 番号	調査 回数	実測 番号	種別	器種	地区	遺構/層位	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	礫の大き さ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
220	7	160	須恵器	高杯	CX41	SH0733-35 埋土	9.0			内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り(時計周り)	密	φ 1-3	暗青灰	良好	口縁にて 1/6	
221	7	181	弥生土器	甕	CY41	SH0733-35 埋土(上層)		7.0		内;ハケ、ナデ 外;ナデ、オサエ	密	φ 1-3	淡灰褐-淡 赤褐	良好	脚部にて ほぼ完形	
222	7	161	土師器	甕	CX40	SH0733-35 埋土	15.4			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	淡黄褐	やや 軟	口縁にて 1/8	
223	7	182	弥生土器	甕	CX40	SH0733-35 埋	16.4			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-4	淡灰黄	良	口縁にて 1/6	
224	7	163	土師器	甕	CX41	SH0733-35 埋土	24.8			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡黄褐-淡 褐	良	口縁にて 1/8	
225	7	180	弥生土器 /土師器	高杯	CY41	SH0733-35 埋土(上層)	20.4			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	内;淡黄褐 外;浅黄灰	良好	口縁にて 1/8	
226	7	179	弥生土器 /土師器	高杯	CX41	SH0733 埋土	18.0			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3	淡黄褐	良	杯部にて 1/2	光波取上 7 次 -4
227	7	177	弥生土器 /土師器	高杯	CZ40	SH0733 東辺周壁溝		10.4		内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄灰	良	脚部にて 完形	光波取上 7 次 -14
228	7	254	弥生土器 /土師器	壺	CX41	SH0728 南辺周壁溝	6.8			内外;磨滅のため不明	密	φ 1	淡黄褐	やや 軟	口縁にて 完形	光波取上 7 次 -7
229	7	178	弥生土器 /土師器	高杯	CW41	P07112 SH0721 南西 主柱穴				内外;磨滅のため不明	やや 粗	φ 1-6	赤褐	良	杯部にて 1/6	
230	7	171	弥生土器	壺	CY41	SH0735 南辺中央土坑	9.4			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	口縁にて 1/4	光波取上 7 次 -40
231	7	172	弥生土器	高杯	CY41	SH0735 南辺中央土坑		11.0		内外;磨滅のため不明 外;直線文	密	φ 1-2	淡黄褐	良	脚部にて ほぼ完形	光波取上 7 次 -41
232	7	173	弥生土器	甕	CY41	SH0735 南辺中央土坑		7.8		内;ナデ 外;磨滅のた め不明	密	φ 7-8	浅黄灰	良	脚部にて 完形	光波取上 7 次 -38
233	7	174	弥生土器	甕	CY41	SH0735 南辺中央土坑		8.0		内外;磨滅のため不明	やや 粗	φ 1-5	内;黒灰 外;淡褐	良	脚部にて 完形	光波取上 7 次 -39
234	7	175	弥生土器	甕	CY41	SH0735 南辺中央土坑		8.2		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-5	内;黒灰 外;淡褐	良	脚部にて 完形	光波取上 7 次 -40
235	7	243	弥生土器	甕	CW40	P06284 SH0718/37 南東主柱穴		6.6		内;ナデ 外;磨滅のた め不明	やや 粗	φ 1-5	内;黄灰 外;淡褐	良	底部にて 完形	
236	6	136	弥生土器	甕	CU38	SH0688	17.6			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	内;灰褐 外;淡黄灰	良	口縁にて 1/8	
237	6	133	須恵器	杯身	CU38	SH0677 南辺周壁溝	11cm < らい	4.5		内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り(反時計周り)	密	φ 1-2	暗青灰	良好	1/2	ヘラ記号あり
238	6	132	須恵器	杯身	CU39	SH0675/76	11.2	4.5		内;ロクロナデ 外;ヘラ切り	密	φ 1	暗青灰	良好	1/4	
239	6	135	弥生土器 /土師器	甕	CT39	SH0675	13.0			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	黄褐	良	口縁にて 1/6	
240	6	134	鉄製品	不明	CU38	SH0674 西辺周壁溝									上半部を 欠く	
241	7	232	弥生土器	壺	CS41	SH0707 南辺周壁溝	13.4			口縁;棒状浮文 内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡褐	良	口縁にて 1/8	
242	7	233	弥生土器	壺	CT40	SH0707		6.7		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡黄灰	良	底部にて 完形	
243	7	234	弥生土器	甕	CS40	SH0707 埋土		6.7		内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-5	淡黄灰	良	底部にて 完形	
244	7	235	弥生土器	甕	CS41	SH0707 南辺中央土坑		8.6		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-8	淡赤灰	良	底部にて 1/4	
245	7	244	弥生土器	甕	CZ43	SH0706 床直 ≒ SH0707	18.0			内;磨滅のため不明 外;刺突	密	φ 1-3	暗灰褐	良	口縁にて 1/6	
246	7	245	弥生土器	壺	CT41	SH0706 埋土 ≒ SH0707		6.1		内;磨滅のため不明 外;ナデ	密	φ 1-3	内;灰褐 外;黒灰	良	底部にて 完形	
247	7	246	土製品	土玉	CT40	SK0712 SH0706 南辺中央土坑			8.1g		密	φ 1-2	褐灰	良好	完形	
248	7	239	弥生土器	甕 いし 壺	CS38	SH0790 東辺周壁溝		3.4		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	内;淡黄灰 外;淡黄褐	良	底部にて 完形	光波取上 7 次 -106
249	7	240	ミニチュ ア土器	壺形	CS38	SH0790 東辺周壁溝	1.5	2.0	4.2	内外;ナデ、オサエ	密	φ 1	黄褐	良好	完形	光波取上 7 次 -105
250	7	241	異形土器	不明	CS38	P07296 SH0790-92 内				内外;ナデ、オサエ	密	ほとんど 含まない	淡褐	良好	一部のみ の残存	
251	7	242	石器	筋砥 石	CS38	P07266 SH0793 内				253.5g					上下両端 を欠く	花崗岩製

Tab.2-10 遺物観察表

報告 番号	調査 回数	実測 番号	種別	器種	地区	遺構/層位	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	礫の大き さ(mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
252	7	236	弥生土器 /土師器	甕	CS44	SH0784 南辺周壁溝	17.2			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3	内;灰黒 外;淡黄灰	良	口縁にて 1/6	
253	7	237	弥生土器 /土師器	甕	CS44	SH0784 床直		7.5		内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3	淡黄灰	良	底部にて 完形	光波取上 7 次 -103
254	7	238	弥生土器 /土師器	高杯	CS41	SH07100 埋土				内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-5	淡黄褐	良	脚部にて 端部を欠 く	光波取上 7 次 -104
255	6	255	土師器	羽釜	CY46/47	SK0621 0-40cm	16.0			口縁;ヨコナデ 内;ナデ,オサエ 外;ハケ,ケズリ	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	口縁にて 1/3	銜部以下煤付着
256	6	257	土師器	羽釜	CY46/47	SK0621 40-60cm	22.8			口縁;ヨコナデ	密	ほとんど 含まない	暗灰褐	良好	口縁にて 1/8	銜部以下煤付着
257	6	259	土師器	羽釜	CY46/47	SK0621 0-40cm	30.0			口縁;ヨコナデ 内;ナデ 外;ハケ	密	φ 1-3	黄褐	良	口縁にて 1/4	銜部以下煤付着 .2孔 1 対の穿孔 を施す
258	6	258	土師器	皿	CY46/47	SK0621 40-60cm	8.0		1.7	口縁;ヨコナデ 内;ナ デ 外;ナデ,オサエ	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	1/3	
259	6	260	土師器	茶釜	CY46	SK0621	17.0			内外;ナデか	密	ほとんど 含まない	淡黄灰	良好	上半部にて 1/3	光波取上 6 次 -22.銜部以下煤 付着
260	7	271	須恵器	杯身	CS47	SX0782	10.5	4.5 cm くらい		内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り(時計周り)	密	φ 1-2	灰青	良	1/3	
261	6	266	弥生土器	器台	CY45	SK0626	22.0			内;ヨコナデ 外;ミガキ	密	φ 2-5	暗褐-黒褐	良	口縁にて 1/8	
262	6	264	弥生土器	甕	CY45	SK0626	22.0			口縁;ヨコナデ 内外;磨滅のため不明	密	φ 2-4	淡灰褐	良	口縁にて 1/4	光波取上 6 次 -26
263	6	265	弥生土器	壺	CY45	SK0626	13.8			内;磨滅のため不明 外;ヨコナデ	密	φ 4	淡黄褐	良	口縁にて ほぼ完形	光波取上 6 次 -25.赤彩土器
264	6	267	弥生土器	甕	CY45	SK0626				内;ナデ 外;磨滅のため不明	密	φ 3-7	内;黒灰 外;灰褐	良	胴部にて 完形	
265	6	268	弥生土器	高杯	CY45	SK0626				内外;磨滅のため不明	密	φ 3-5	内;黄灰 外;黄褐	良	杯部にて 1/3	
266	7	269	須恵器	杯蓋	CU/CV40	SK0704	14.6			内外;ロクロナデ	密	ほとんど 含まない	灰青	良好	口縁にて 1/8	
267	7	270	土師器	高杯	CU/CV40	SK0704				内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	脚部にて 端部を欠 くのみ	
268	7	272	土師器	甕	CX41	SK0726 10-20 cm +20-30 cm	15.2			内;磨滅のため不明 外;ハケ	密	φ 1-5	黄褐	良	口縁にて 1/3	
269	7	273	土師器	羽釜	CX41	SK0726 0-10 cm	20.6			内;磨滅のため不明 外;ハケ,ケズリ	密	φ 1	暗灰褐	良	口縁にて 1/8	
270	6	261	土師器	羽釜	CV48	SK0639 個別-⑦	19.0			口縁;ヨコナデ 内;ナ デ,オサエ 外;ハケ	密	φ 1-2	内;灰褐 外;灰黄褐	良好	口縁にて 1/4	
271	6	263	土師器	ハソ ウ	CV48	SK0639 個別-②				内;ロクロナデ 外;ロクロナデ,タタキ	密	φ 1-2	暗青灰	良好	胴部にて 1/3	胴部上半に降灰 痕あり
272	6	262	須恵器	杯身 か	CV48	SK0639 個別-⑨		9.2		内外;ロクロナデ	密	ほとんど 含まない	灰	良好	底部にて 1/3	
273	7	274	土師器	皿	CY42	SD0749				内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄白	良	口縁部破 片	
274	7	275	土師器	皿	CY43	SD0749	12.2	2.5 cm くらい		内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄白	良	口縁にて 1/6	
275	6	282	土師器	羽釜	CY46	SD0604	24.0		12.5cm くらい	口縁;ヨコナデ 内;オ サエ 外;ハケ,ナデか	密	φ 1	淡褐	良好	口縁にて 1/4	銜部以下に煤付 着.2孔 1 対の 穿孔あり
276	7	291	土師器	羽釜	CY42 +CY43	SD0749	25.4			口縁;ヨコナデ 内;板ナデ,オサエ 外;ハケ	密	ほとんど 含まない	灰褐	良	口縁にて 1/2	光波取上 7 次 -21+29.銜部以 下に煤付着
277	6	276	土師器	羽釜	CY46	SD0604	21.6			口縁;ヨコナデ 内;板ナデ,オサエ 外;ハケ,ケズリ	密	φ 1-3	淡黄褐	良	1/4	銜部以下に煤付 着
278	6	277	土師器	羽釜	CY46	SD0604	22.2			口縁;ヨコナデ 内;磨 滅のため不明 外;ハケ	密	φ 1-3	黄灰	良	口縁にて 1/6	銜部以下に煤付 着
279	6	278	土師器	羽釜	CY46	SD0604	23.8			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	黄白	良	口縁にて 1/4	
280	6	281	土師器	羽釜	CY46	SD0604	23.8			口縁;ヨコナデ 内;オサエ 外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	黄灰	良	2/3	
281	7	294	土師器	羽釜	CY43	SD0749	21.0			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	やや 軟	口縁にて 1/6	光波取上 7 次 -23

Tab.2-11 遺物観察表

報告 番号	調査 回数	実測 番号	種別	器種	地区	遺構/層位	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	礫の大き さ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
282	6	286	土師器	羽釜	CY45	SD0604	20.0			内外;磨滅のため不明	密	φ 1	黄褐	良	口縁にて 1/4	
283	7	296	土師器	羽釜	CY43	SD0749	27.8			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	黄褐	良	口縁にて 1/6	光波取上 7 次 -19
284	7	290	土師器	羽釜	CY43	SD0749	28.0			内;オサエ、ナデ 外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	淡黄灰	良好	口縁にて 1/4	
285	6	283	土師器	羽釜	CY44	SD0604	25.0			口縁;ヨコナデ	密	ほとんど 含まない	黄褐	良	口縁にて 1/4	罏部以下に煤付 着
286	6	284	土師器	羽釜	CY46	SD0604	24.0			口縁;ヨコナデ 内;オサエ 外;ハケ	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	口縁にて 1/4	罏部以下に煤付 着
287	6	285	土師器	羽釜	CY46	SD0604	24.0			口縁;ヨコナデ	密	ほとんど 含まない	淡黄褐	良	口縁にて 1/3	2孔 1 対の穿孔 あり
288	7	292	土師器	羽釜	CY43	SD0749	23.8			口縁;ヨコナデ	密	ほとんど 含まない	黄褐	良	口縁にて 1/6	光波取上 7 次 -17, 罏部以下に 煤付着
289	7	293	土師器	羽釜	CY43	SD0749	23.8			口縁;ヨコナデ 内;板 ナデ, オサエ 外;ハケ	密	ほとんど 含まない	黄灰	良好	口縁にて 1/4	光波取上 7 次 -18
290	7	295	土師器	羽釜	CY42	SD0749	23.4			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	黄灰	良	口縁にて 1/6	光波取上 7 次 -31
291	6	280	土師器	羽釜	CY46	SD0604	23.4			口縁;ヨコナデ	密	φ 1-2	暗褐灰	良	口縁にて 1/6	罏部以下に煤付 着
292	6	288	土師器	羽釜	CY46	SD0604	20.0			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-2	淡灰赤	良	口縁にて 1/6	
293	6	279	土師器	羽釜	CY46	SD0604	18.0			口縁;ヨコナデ 内;板 ナデ 外;ハケか	密	ほとんど 含まない	淡黄灰	良好	口縁にて 1/4	罏部以下に煤付 着
294	7	289	土師器	羽釜	CY41	SD0749	18.0			口縁;ヨコナデ 内;板ナデ 外;ハケ	密	ほとんど 含まない	黄褐	良	口縁にて 1/4	光波取上 7 次 -32, 罏部以下に 煤付着
295	6	287	土師器	羽釜	CY46	SD0604	17.4			口縁;ヨコナデ 内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	褐灰	良好	口縁にて 1/4	
296	7	297	須恵器	杯蓋	CY42	SD0748	13.4	4cm		内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り (方向不明)	密	φ 1	灰青	良好	口縁にて 1/6	
297	6	298	須恵器	杯蓋	CU37/38	SD0671	14.0	5.5			やや 密	φ 1-2	灰青	良	1/6	
298	7	299	須恵器	杯蓋	CT47	SD0777	10.4	4.5cm		内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り (時計周り)	密	ほとんど 含まない	灰青	良好	口縁にて 1/6	
299	7	300	須恵器	杯蓋	CT47	SD0777	12.2	5cm		内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り (方向不明)	密	φ 1-2	灰青	良	口縁にて 1/4	
300	7	301	須恵器	杯身	CS41	SD0777	12.6	3.5cm		内;ロクロナデ 外;回転ヘラ削り (反時 計周り)	密	φ 1-3	暗青灰	良好	口縁にて 1/4	
301	7	302	須恵器	壺	CS/CT45	SD0777	13.0			内外;ロクロナデ 外;カキ目	密	φ 1	内;青灰 外;灰青	良好	口縁にて 1/6	
302	7	303	須恵器	壺	CS44	SD0777	14.4			内外;ロクロナデ 外;カキ目	密	ほとんど 含まない	灰	良好	口縁にて 1/6	
303	7	304	石製品	紡錘 車	CS/CT46	SD0777				13.8g			深緑		上半部の 表面のみ	片岩製
304	6	305	弥生土器	高杯	CU49	SD0637	15.2			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	褐灰	良	口縁にて 1/6	光波取上 6 次 -66
305	6	306	弥生土器	高杯	CU48	SD0637	16.0			内外;磨滅のため不明	密	φ 5-6	黄白	良	口縁にて 1/6	
306	6	307	弥生土器	壺	CV47	SD0637	10.0			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-5	内;黒灰 外;褐灰	やや 軟	1/4	光波取上 6 次 -67
307	6	308	弥生土器	壺	CV47	SD0637	14.2			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3	内;淡灰黒 外;白灰	良	口縁にて 完形	光波取上 6 次 -66
308	6	309	弥生土器	壺	CU48	SD0637	20.8			内外;磨滅のため不明、 刺突あり	密	φ 1-5	白黄	良	上半部に て完形	光波取上 6 次 -68
309	7	310	石製品	紡錘 車	DB44	SD0758				35.0g			深緑		完形	光波取上 7 次 -36
310	6	312	弥生土器	器台	CZ44	SD0625	15.0			口縁;刺突 内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	内;黒褐 外;黄灰	良	口縁にて 1/4	
311	6	311	弥生土器	高杯	CZ44	SD0625	11.0			内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	内;黄褐 外;黄灰	良	口縁にて 1/6	光波取上 6 次 -24
312	7	314	弥生土器	甕	CZ43	SD0765		5.0		内外;ハケ	密	φ 1	黄褐	良	底部にて 完形	光波取上 7 次 -57
313	7	315	弥生土器	甕	CY42	SD0765		7.0		内;磨滅のため不明 外;ハケ	密	ほとんど 含まない	淡赤褐	良好	底部にて 1/3	
314	7	316	弥生土器	器台 か	CY/CZ43	SD0765	16.4			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	黄褐	良好	口縁にて 1/4	
315	7	317	弥生土器	高杯	CY42	SD0765				内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡褐	やや 軟	脚部端部 を欠く	光波取上 7 次 -43

Tab.2-12 遺物観察表

報告 番号	調査 回数	実測 番号	種別	器種	地区	遺構/層位	法量 (cm)			調整・技法の特徴	胎土	礫の大き さ (mm)	色調	焼成	残存度	特記事項
							口径	底部径	器高							
316	6	318	弥生土器	壺	CW/CX44	SD0662/63	17.6			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	淡黄褐	良好	口縁にて 1/12	
317	6	319	弥生土器	甕	CV44	SD0653	11.6			内外;磨滅のため不明	やや粗	φ 1-3	黄褐 - 黄灰	良	口縁にて 1/2	光波取上 6 次 -81
318	6	320	弥生土器	甕	CV44	SD0653		6.0		内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	淡褐灰	良	底部にて ほぼ完形	
319	6	321	弥生土器	壺	CV43	SD0653	15.2			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-4	灰褐	良	口縁にて 1/2	光波取上 6 次 -73
320	6	322	弥生土器	甕	CV44	SD0653	15-16cm くらい			内外;磨滅のため不明 外;一部ハケ残る	密	φ 1-3.7	褐灰	良	頸部にて 1/3	光波取上 6 次 -74
321	6	323	弥生土器 /土師器	高杯	CV44	SD0653	21.0			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-5	内;黄褐 外;黄灰 - 黄褐	良	杯部にて 1/2	光波取上 6 次 -80
322	6	324	土師器	鉢	CW40	SD0689	22.0		7.5	内;磨滅のため不明,ナ デか 外;ハケ,ケズリ	密	φ 1-3	黄灰	良好	1/3	
323	7	327	弥生土器	蓋?	CS42	SD0786/87				内;磨滅のため不明 外;オサエ	密	ほとんど 含まない	内;暗灰褐 外;淡灰褐	良	つまみ部 にて完形	
324	7	328	弥生土器	高杯	CS42	SD0786/87	23.0			内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-3	内;黒褐 外;暗赤褐	良好	口縁にて 1/8	
325	7	326	土師器	高杯	CZ41	SD0756		8.0		内外;磨滅のため不明	密	ほとんど 含まない	明褐	良	脚部にて 端部を欠 くのみ	光波取上 7 次 -33
326	7	325	弥生土器 /土師器	甕	CY41	SD0741		9.2		内外;磨滅のため不明	やや 密	φ 1-5	淡灰褐	良	底部にて ほぼ完形	
327	6	113	須恵器	杯身	CU43	P06345 SB0724	12.0			内外;ロクロナデ	密	ほとんど 含まない	暗青灰	良好	口縁にて 1/12	
328	6	329	弥生土器	壺	CX38	P06238 (単独ビット)	10.8			内外;ロクロナデ	密	ほとんど 含まない	暗黒灰	良好	口縁にて 1/4	
329	6	115	弥生土器 /土師器	壺	CX44	P06425 (単独ビット)	12.4			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-2	淡灰黄	良	口縁にて 1/4	
330	7	330	弥生土器	甕	CS45	P07258 (単独ビット)	8.8			内外;磨滅のため不明	密	φ 1	黄	良好	口縁にて 1/4	
331	6	114	弥生土器	甕	CX44	P06425 (単独ビット)	16.0			内外;磨滅のため不明	やや粗	φ 1-3	淡黄褐	やや軟	口縁にて 1/6	
332	7	336	須恵器	杯蓋	南区	検出	10.4		4.6	内;ロクロナデ 外;回転ヘラ削り(反時 計周り)	密	φ 1-2	灰青	良好	1/4	
333	7	337	須恵器	杯蓋	中区	検出	14.0		5cm くらい	内;ロクロナデ 外;回転ヘラ削り(反時 計周り)	密	φ 1-4	灰青	良好	口縁にて 1/3	
334	7	338	須恵器	杯蓋	南区	検出	13.5cm くらい		4cm くらい	内;ロクロナデ 外;回転ヘラ削り(反時 計周り)	密	φ 1-3	灰青	良好	1/3	
335	7	339	須恵器	高杯 蓋	中区	検出	12.0		5.7	内;ロクロナデ 外;回 転ヘラ削り(方向不明)	やや 密	φ 1-2	青灰	良好	1/4	
336	7	335	須恵器	ハソ ウ	中区	検出	10.8			内外;ロクロナデ 外;波状文	密	φ 1	暗青灰	良好	口縁にて 1/8	
337	7	331	須恵器	器台	-	表採	24.6			内外;ロクロナデ 外;刺突,タタキ	密	ほとんど 含まない	青灰	良好	口縁にて 1/6	
338	7	332	須恵器	甕	-	西側 現代地刺溝⑥	19.8			内外;ロクロナデ	密	φ 1	暗灰青	良好	口縁にて 1/4	
339	7	334	土師器	壺	CY41-43	東側 現代地刺溝⑤	13.4			内外;磨滅のため不明	密	φ 1-3	黄褐	やや軟	口縁にて 1/12	
340	7	333	土師器	甕	-	西側 現代地刺溝⑥	17.6			内外;磨滅のため不明	密	φ 1	黄灰	良好	口縁にて 1/4	
341	6	-	石製品	軽石		SH0603 南辺中央土坑				36.6g						
342	6	-	石製品	軽石	CX45	SH0633 東辺周壁溝				16.5g						
343	7	-	石製品	軽石	DB43	SH0759 埋土(残土)				30.3g						
344	6	-	石製品	磨製 石斧?	CW45	P06381 (SH0633/47 内)				一部に磨製石斧の研磨 のような痕跡あり, 16.3g						ハイアロクラス タイト製か? 磨製石斧から剥 離した剥片か
345	6	-	石製品	磨製 石斧?	CW45	P06393 (SH0633/47 内)				磨製石斧から剥離した 材を転用,両側縁に階段 状の剥離痕顕著,19.1g						ハイアロクラス タイト製か?
346	6	-	弥生土器	甕	CZ44	SD0625				底部に穿孔あり						鉢の底部に穿孔 して甕とする

第VI章 調査の成果

磐城山遺跡では、5次にわたって発掘調査が続けられてきた。これまでの調査成果から、磐城山遺跡は、弥生時代後期の山中式期を中心とした集落址に加え、主に6世紀頃古墳時代の集落址、古代の掘立柱建物群、木田城に係る中世の城館跡からなる複合遺跡としてまとめられている(田部 2014)。

本書は平成25・26年度に実施した発掘調査の報告であるが、届出された対象地は膨大な面積があるため、平成27年度以降も進行中である。そのため、遺跡の全体像が判明したわけではないが、第6・7次調査区で得られた知見を中心にまとめておきたい。

1 弥生時代後期の集落について

磐城山遺跡の弥生集落の最も中心的な時期は、後期の山中式にあることは間違いない。これまでの調査でも多くの竪穴住居が検出されており、県内でも随一の遺構密度を誇っている。ただし、第4・5次調査の際にSH0404, SH0455, SH0559等のように、後期初頭頃まで遡る資料が確認され、その初源がいつになるのかが一つの課題として挙げられている。

今回の第6次調査のSH0622では、更にこれらを遡る可能性を持つ土器群が出土した。特に、Fig.32-51の水平口縁を持つ高杯は、弥生時代中期末まで遡り得る可能性がある。ただし、他の共伴遺物を見ると後期初頭的な特徴が目立つことから、建物の時期としては後期初頭を考えておいた。最も古い建物となる可能性を秘めていることから、今後注意していかなくてはならない。

なお、中期後葉から末の凹線文土器期の集落は、磐城山遺跡の東方約650mの境谷遺跡で多数確認されている(浅野 2007, 2008)。境谷遺跡は磐城山遺跡から谷を3つ隔てただけであり、ちょうど後期に入る段階で著しく衰退していくという。この衰退期に入れ替わるように遺跡が形成され始めるのが磐城山遺跡であり、その位置関係からも何かしらの関係を有していたと推定される。

2 古墳時代後期の集落について

さて、弥生時代後期に中心も持つ磐城山遺跡は、山中式の後、廻間式Ⅰ式まで集落が認められるものの、廻間Ⅱ式からⅢ式ではほとんど確認できなくなっていく。その後再び集落が形成されるのは5世紀末以降、ほぼ6世紀に入ってからのことである。実際には、6世紀半ばから後半が主体となっており、7世紀に入る辺りまで継続

している。この時期はちょうど、『日本書紀』敏達四年(575)正月の条に見られる記録(「采女伊勢大鹿の首小熊の娘を菟名子夫人といい、太姫皇女と糠手姫皇女とを生む」)の年代と一致する。この記事から伊勢に大鹿という氏族がいたことが窺えるが、その有力な候補地がこの木田町だという(岡田 1996a, 1996b)。また、磐城山遺跡が位置する丘陵の北部の谷筋は、現在、「大金谷(おおかねだに)」との名が残っており、大鹿氏と関係が深いものと推測される。

なお、先の境谷遺跡でも6世紀代に集落が再開される様子が確認されており、磐城山遺跡と共に集落の形成が進むようである。両者とも、大鹿氏の存在を直接示すような墨書土器や特異な遺構は確認されていないが、周囲には伊勢国第3位の規模を持つ寺田山1号墳をはじめ、幾つもの古墳が築造されており、今後はこれらとの関係を留意していかななくてはならない。

3 古代について

古代の遺構は第7次調査区SD0777の西側に広がっているようである。このSD0777は何らかの重要な施設を区画する溝であるようで、これまで確認されているSD0453やSD0308, SD0164はSD0777と同一の溝となる。残念なことに、北端は土砂の流出によって消失しているようで、はっきりと終点を捉えることはできなかったが、少なくとも61m以上直線的にのびることが判明した。今後、西側の調査区で北辺を確認できることに期待したい。

なお、このSD0777は約5°程度西へ振っている。今の所この方位にのる掘立柱建物等は未確認であるが、今後行う区画内部と考えられる調査を待って検討したい。また、この溝の時期は、混在遺物が多いことから特定することは難しいが、概ね7世紀後半から8世紀頃であると想定している。ちょうどこの時期に竪穴住居から成る集落が衰退していくので、何らかの意図を以って集落を移動させた可能性が示唆される。

4 中世城館に係る遺構

磐城山遺跡の西側には、隣接して中世城館である木田城跡が登録されている。中世の遺構はそれほど顕著ではないが、区画溝や土坑墓等が確認されている。特にSK0621, SK0639の土坑墓の遺存状態は良好で、人頭大の礫が多数含まれていた。おそらく埋葬の規範があり、同様の方法を使ったものと考えられる。上部構造が著し



Fig.52 山中式から廻間式期の集落の変遷 (S=1/400)

く削平されているが、第3次調査のSX0328も同様のものであったのであろう。

問題はこの土坑墓がSD0749と重複している点である。出土遺物から見ると、両者であり時期差を認められないが、切り合い関係からSK0621の後にSD0749が開削されている。つまり、地割りと土坑墓の年代は異なることになる。地割り内部の構造は不明な点が多いことからもどういった変遷を辿るのか不明な点が多いが、散漫な墓地から城館に関わる地割りが施される様が観察され、中世後半から近世にかけての歴史の一端が窺える。

参考文献

赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 1992 『山中遺跡』 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 1997 『西上免遺跡』 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 2001 『八王子遺跡』 財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 2003 「八王子古宮式と近江湖南型甕」『研究紀要』第4号 財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター

浅野隆司 2007 『境谷遺跡第1次発掘調査概要報告』 鈴鹿市考古博物館

浅野隆司 2008 『境谷遺跡第2次発掘調査概要報告』 鈴鹿市考古博物館

伊藤 洋 2010 『十宮古里遺跡発掘調査報告』 鈴鹿市考古博物館

伊藤裕偉 2004 『河曲の遺跡』 三重県埋蔵文化財センター

上村安生 2002 「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の編年と様式』 木耳社

大場範久・仲見秀雄 1972 「鈴鹿市高岡青谷遺跡調査報告」『神戸史談』第8号 三重県立神戸高等学校

岡田 登 1996a 「伊勢大鹿氏について(上)」『史料』第135号 皇學館大学史料編纂所

岡田 登 1996b 「伊勢大鹿氏について(下)」『史料』第136号 皇學館大学史料編纂所

岡田雅幸 2000 「磐城山遺跡(2次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第1号 鈴鹿市考古博物館

岡田雅幸・林和範 2003 「一反通遺跡(4次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第4号 鈴鹿

市考古博物館

小倉 整 2005 『国分北遺跡(3次)発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター

角正淳子 2000 「国分北遺跡発掘調査報告」 三重県埋蔵文化財センター

清水政宏 2004 『山奥遺跡』I 四日市市教育委員会

清水政宏 2004 『山奥遺跡』II 四日市市教育委員会

杉立正徳 1998 「磐城山遺跡発掘調査概要」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』V 鈴鹿市教育委員会

鈴鹿市教育委員会 1980 『鈴鹿市史』第一巻 鈴鹿市

田部剛士 2012 「磐城山遺跡(3次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第13号 鈴鹿市考古博物館

田部剛士 2013 「磐城山遺跡(4次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第14号 鈴鹿市考古博物館

田部剛士 2013 「磐城山遺跡(5次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第15号 鈴鹿市考古博物館

田部剛士 2014 『磐城山遺跡(第4・5次)発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館

田部剛士 2015 「磐城山遺跡(6次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第16号 鈴鹿市考古博物館

新田 剛 1998 「一反通遺跡(3次)」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』V 鈴鹿市教育委員会

新田 剛 2010 『八重垣神社遺跡(第6次)』 鈴鹿市考古博物館

藤原秀樹 1996 「木田坂上遺跡(2次)発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』IV 鈴鹿市教育委員会

藤原秀樹 2007 「南山遺跡(第4次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第9号 鈴鹿市考古博物館

穂積裕昌 2005 『菟上遺跡発掘調査報告書』 三重県埋蔵文化財センター

松阪市教育委員会 1991 『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』

三重県史編さん事務局 2005 『三重県史』資料編 考古1 三重県

森川常厚 1994 『磐城山遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター

吉田隆史 2011 『岸岡山Ⅲ遺跡』 鈴鹿市考古博物館

吉田隆史 2013 『平田遺跡(第19・22次)-平田送水場改築に伴う発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館

写真図版



1 磐城山遺跡航空写真
(東上空から)
※調査区は第5次調査区



2 第6次調査東区完掘(西から)



1 第6次調査南西区完掘（西から）



2 第6次調査西区完掘（北から）



1 第7次調査北区完掘（西から）



2 第7次調査東区完掘（東から）



1 第7次調査中区完掘①（南東から）



2 第7次調査中区完掘②（西から）



1 SH0603/99 完掘 (北から)



2 SH0633/47 完掘 (南西から)



1 SH0622 完掘 (北西から)



2 SH0635/31 (北から)

※ SH0779/78 の第 6 次調査区相当分



1 SK0621 掘削風景（北から）



2 SK0621 完掘（北から）



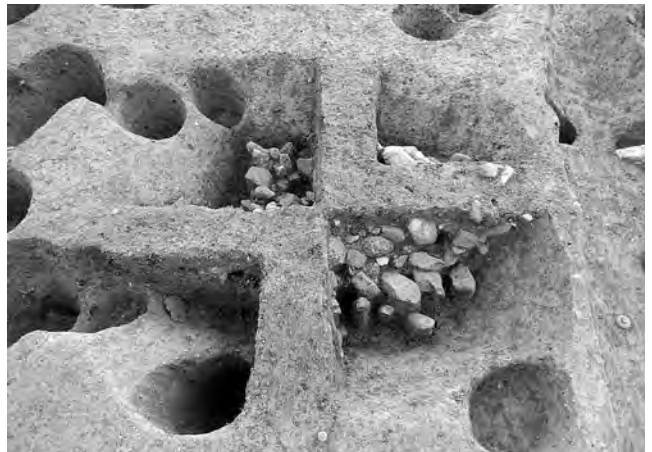
3 SB0636 検出状況（東から）



4 SB0636 完掘（西から）



5 SK0639 上段礫検出状況（北から）



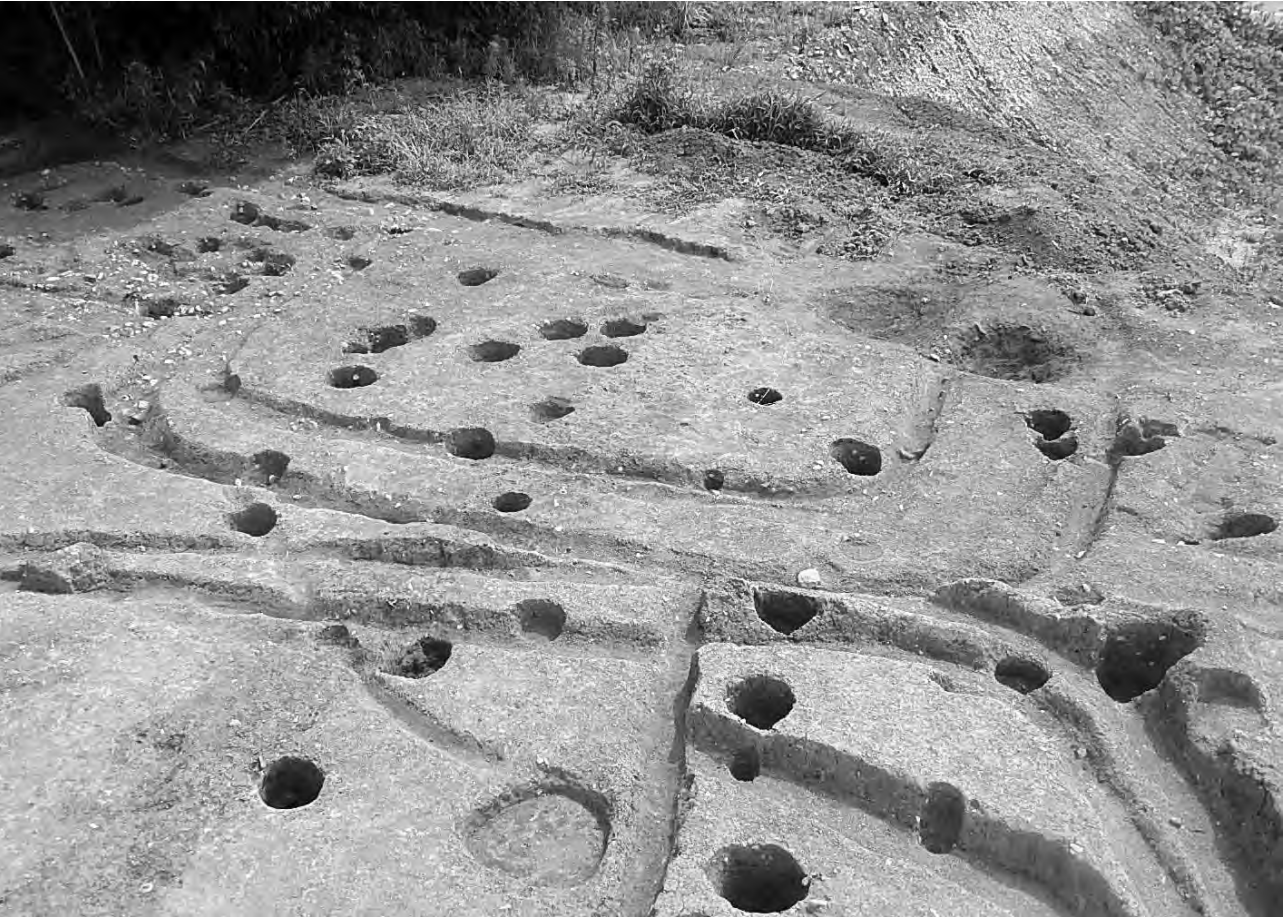
6 SK0639 下段礫検出状況（北から）



7 SK0639 礫の出土状況（北から）



8 SD0637 完掘（北東から）



1 SH0757/59/75 完掘① (南西から)



2 SH0757/59/75 完掘② (東から)



1 SH0751/52・SH0766・SH0768 完掘①（南東から）



2 SH0751/52・SH0766・SH0768 完掘②（南から）



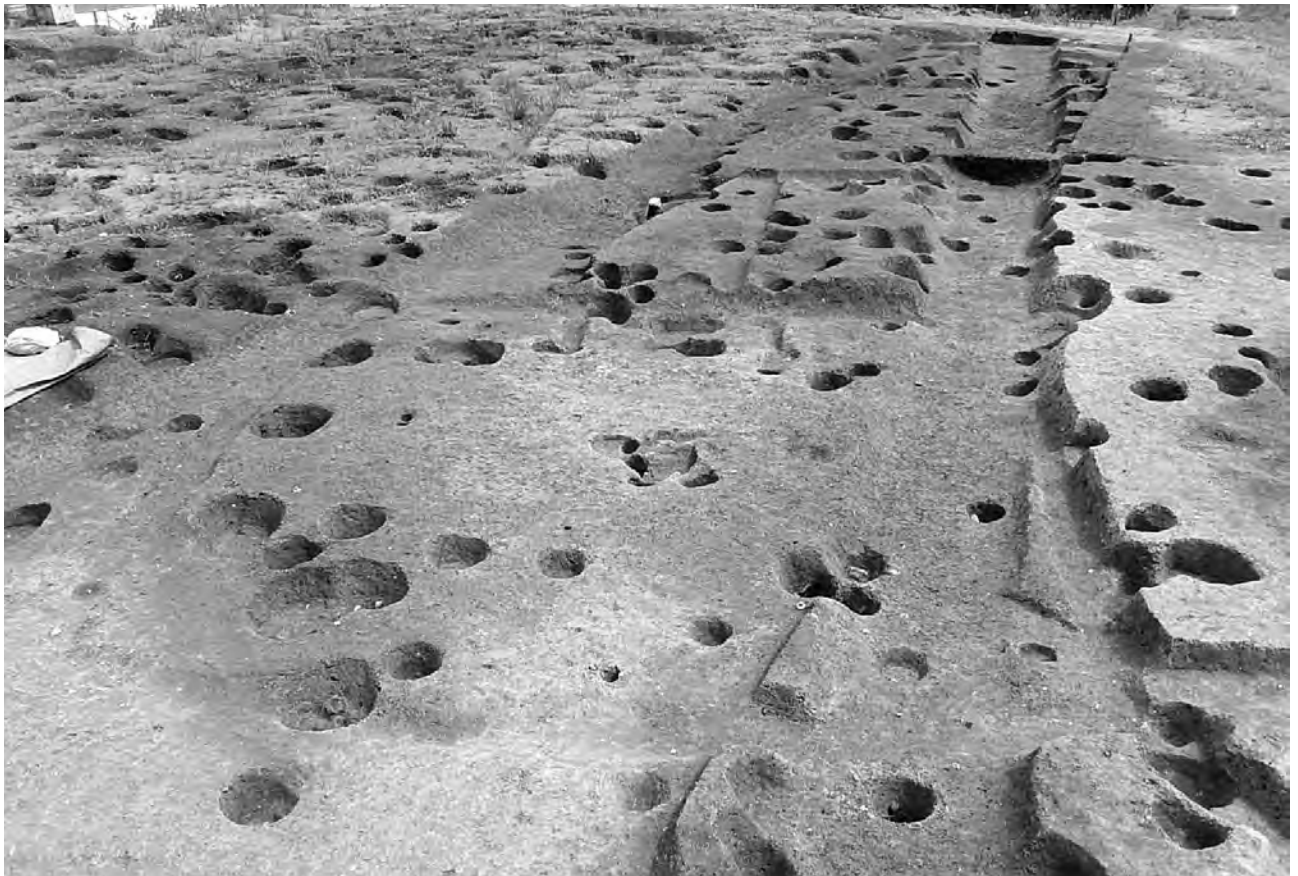
1 SH0729 完掘 (南から)



2 SH0727/30/36/38 完掘 (南から)



1 SH0760 完掘 (南から)



2 SH0710 完掘 (北から)



1 SH0721/22・SH0728・SH0731/32・SH0733/34/35/42 完掘①（南から）



2 SH0721/22・SH0728・SH0731/32・SH0733/34/35/42 完掘②（東から）



1 SH0733/34/35/42 完掘 (西から)



2 SH0673/74/77 · SH0708/09 完掘 (南東から)



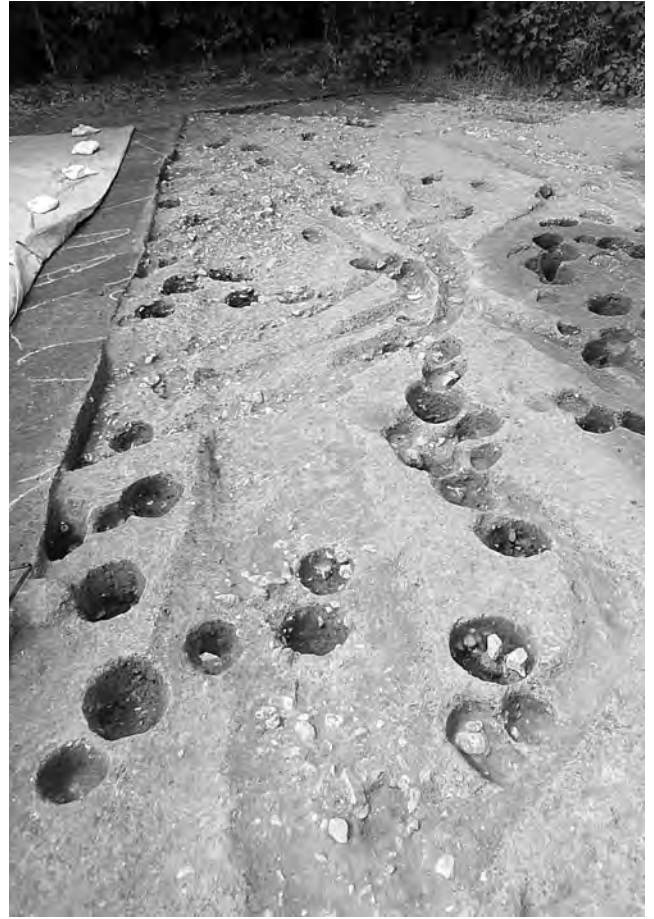
1 SH0707/88 完掘 (北から)



2 SH0708/09 完掘 (南西から)



1 SH0790-92 完掘 (北西から)



2 SH0707/88・SH0790-92 完掘 (南から)



3 SD0777 検出状況 (北から)



4 SD0777 完掘 (北から)



1 SD0749 土器及び礫の出土状況（西から）



2 SB0724 完掘（南西から）



1 SH0603 南辺周壁溝出土遺物（北から）



2 SH0606 西辺周壁溝出土遺物（北から）



3 SH0622 作業風景（北東から）



4 SH0622 床面直上出土遺物（北から）



5 SH0622 出土器台（北から）



6 SH0622 出土高杯・壺（西から）



7 SH0622 出土壺（北東から）



8 SH0622 出土高杯（西から）



1 P06400(SH0633/47 南西支柱穴) 出土遺物 (北東から)



2 SH0633 東辺周壁溝出土遺物 (東から)



3 SH0608 出土遺物 (西から)



4 SH0759 出土遺物 (東から)



5 SH0767 出土遺物 (北から)



6 SH0751/52 出土遺物 (北西から)



7 SH0766 南辺周壁溝出土遺物 (北から)



8 P07240(SH0710 南辺中央土坑) 出土遺物 (北から)



1 SH0728 南辺周壁溝出土遺物（北東から）



2 SH0735 南辺中央土坑出土遺物（北から）



3 SH784/100 出土遺物（西から）



4 SH0718 出土遺物（西から）



5 SD0637 掘削風景（北から）



6 SD0637 出土遺物（南から）



7 SD0637 出土壺①（南から）



8 SD0637 出土壺②（北西から）



1 SD0713 出土遺物 (南西から)



2 SD0758 出土遺物 (西から)



3 SD625 出土遺物 (南西から)



4 SD0749 出土遺物 (北東から)



5 SK0621 出土遺物 (北から)



6 SK0626 出土遺物 (東から)



7 平成 25 年度の職場体験風景 (北東から)



8 発掘体験の様子 (西から)



3



6



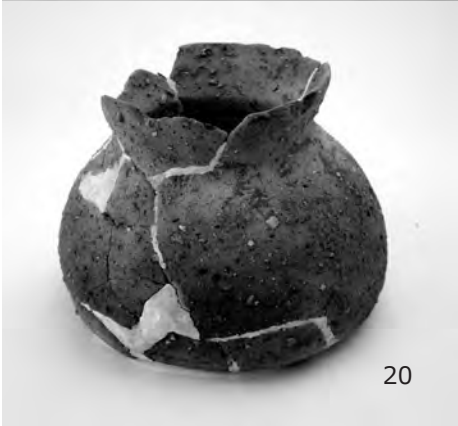
10



7



16



20



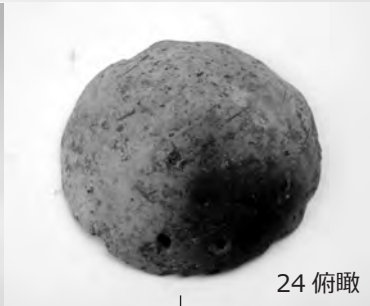
22



23



31



24 俯瞰



36



24



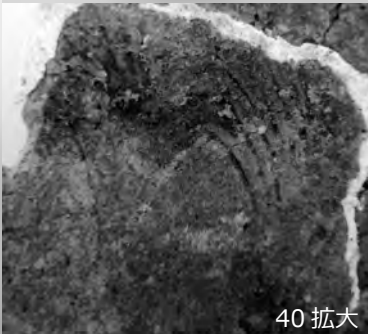
32



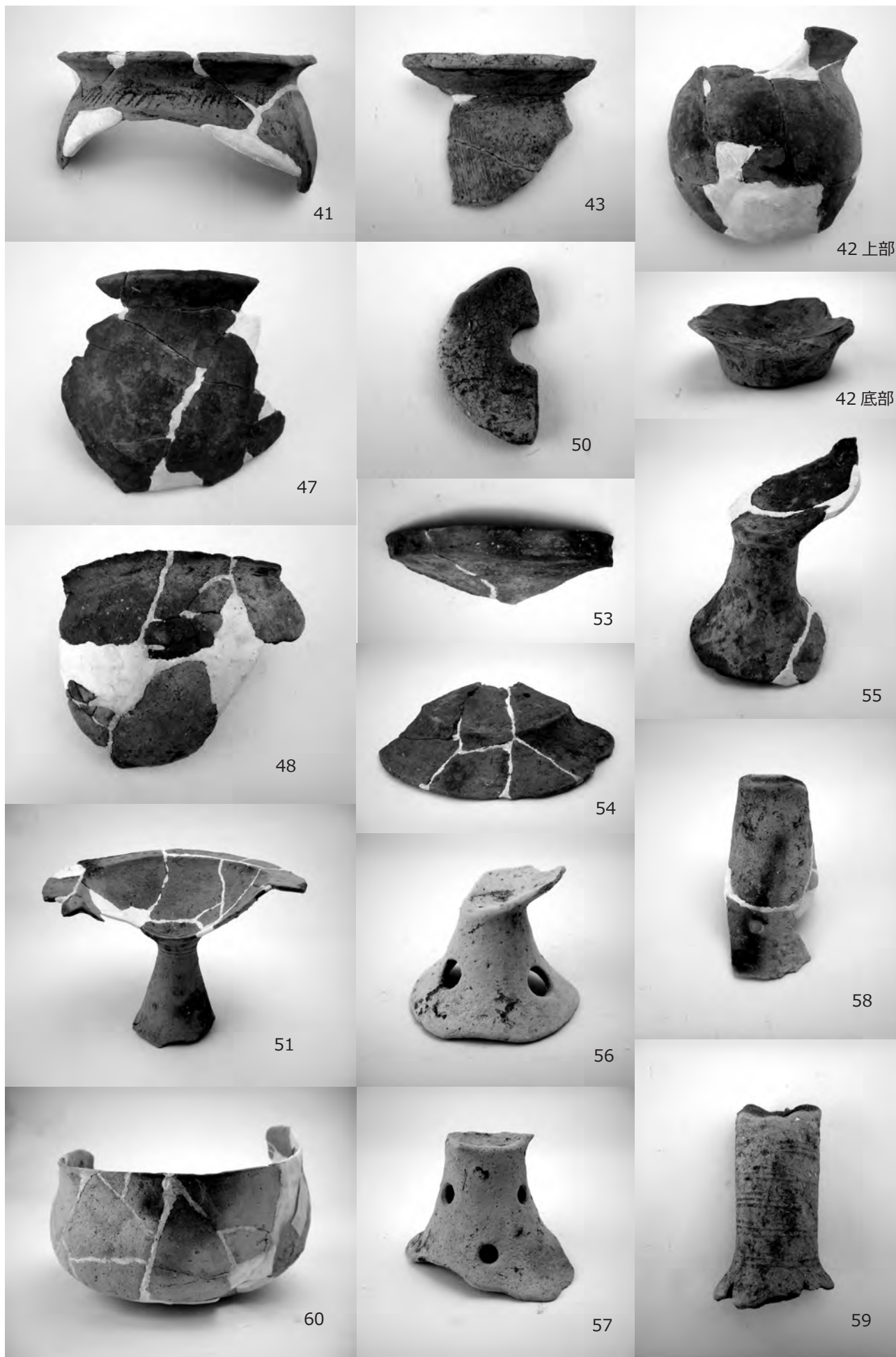
33

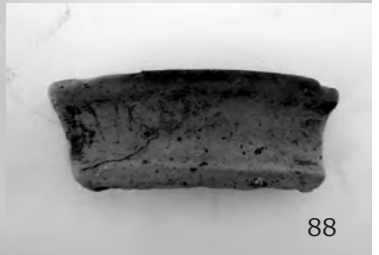
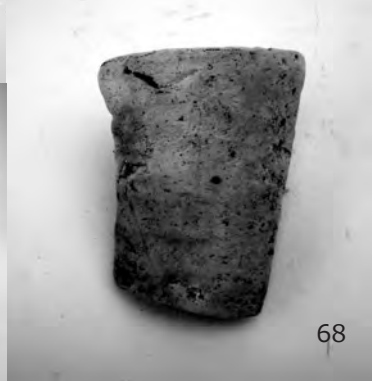
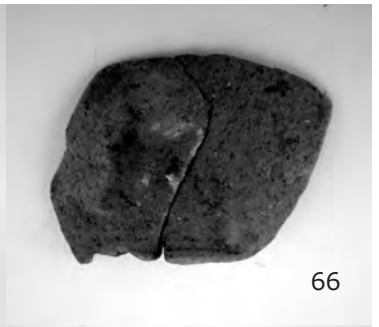


40

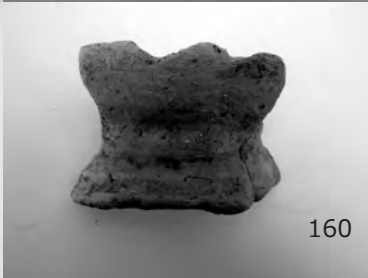


40 拡大











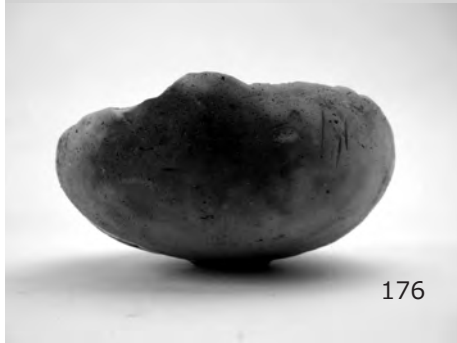
173



174



178



176



179



180 線刻



182



190



180 外面



188



189



180 内面



197



198



202



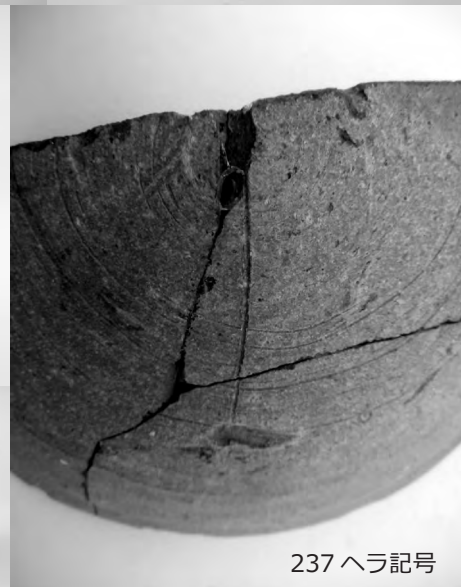
203



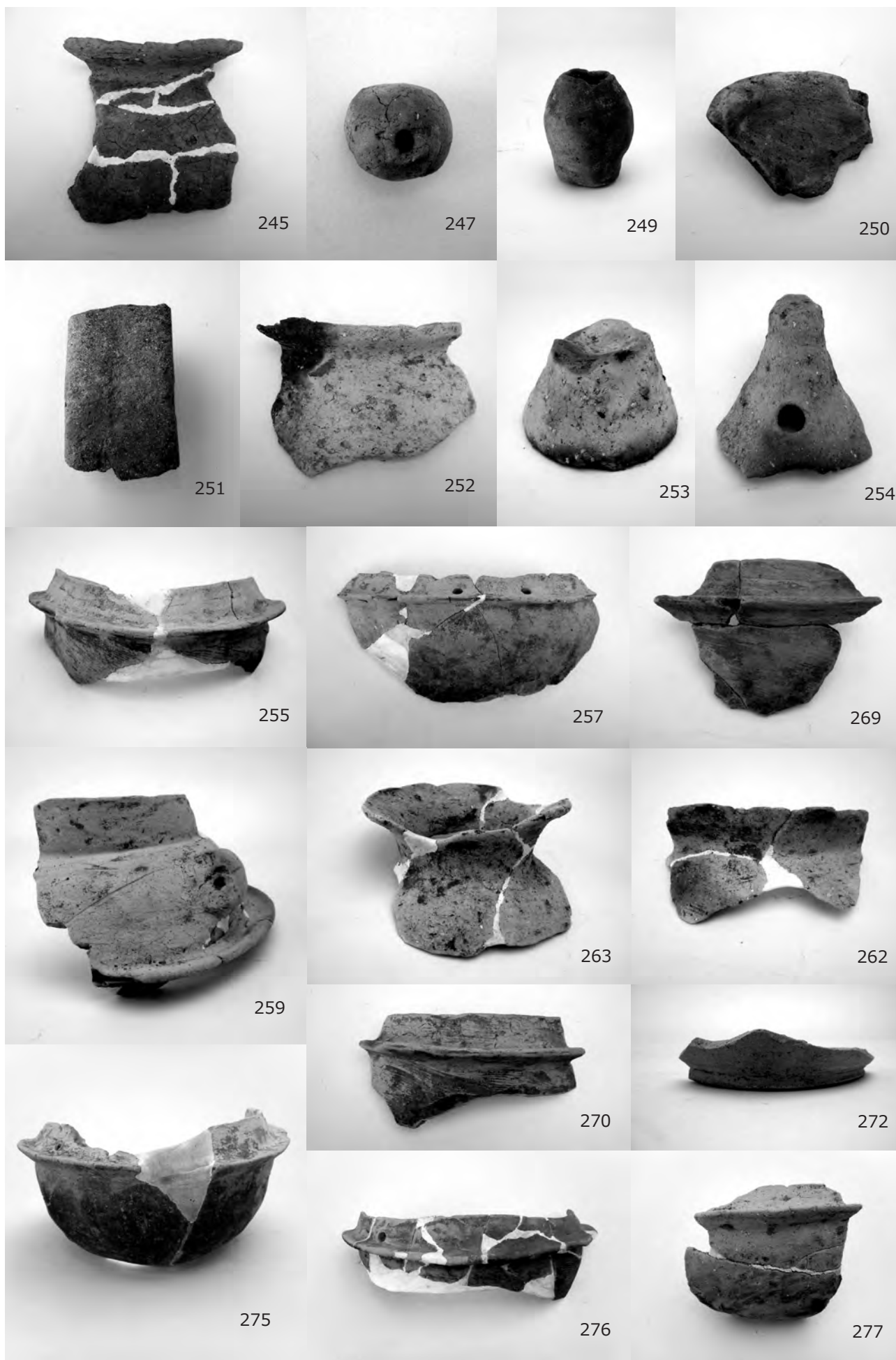
209



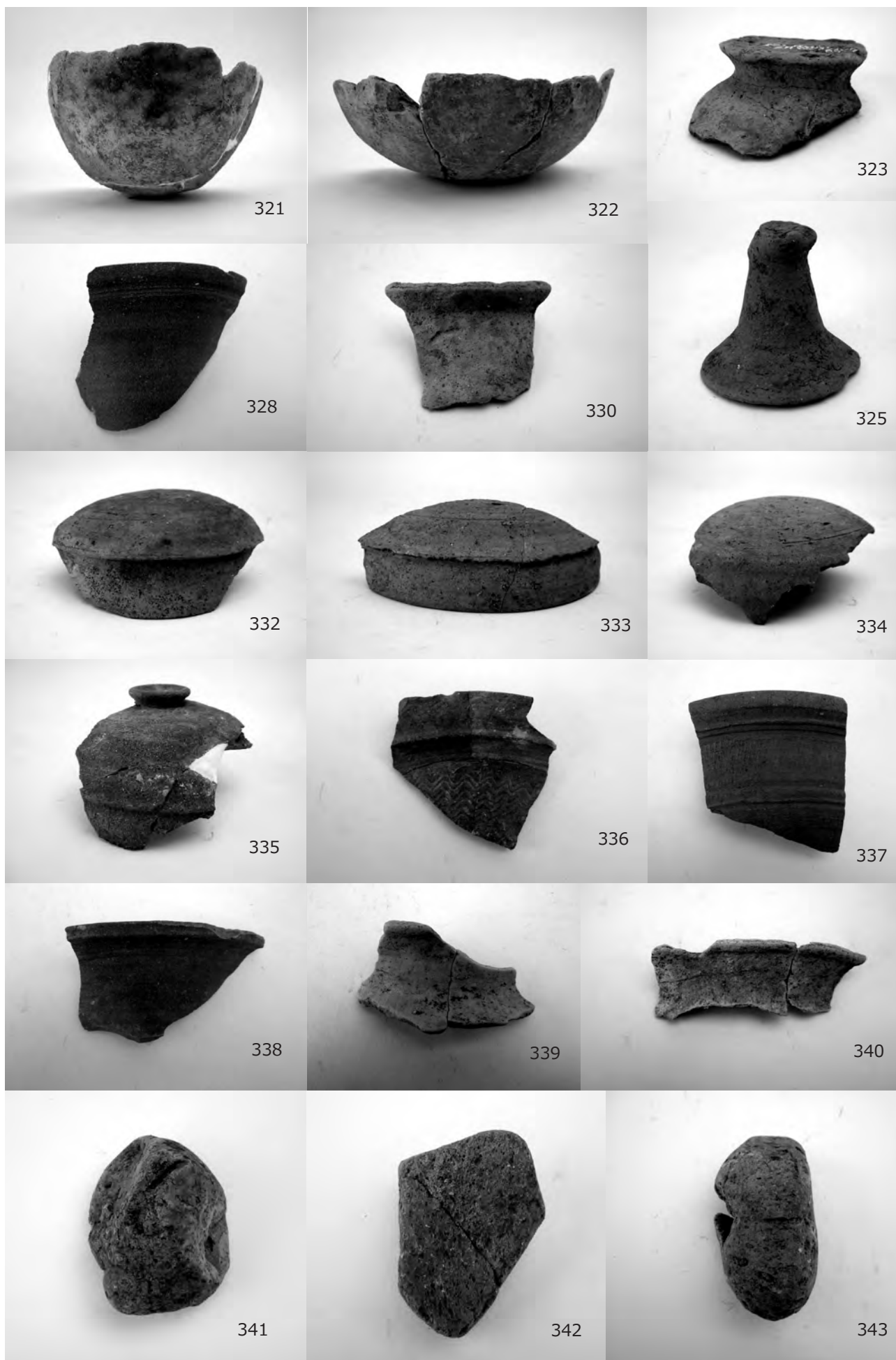
207

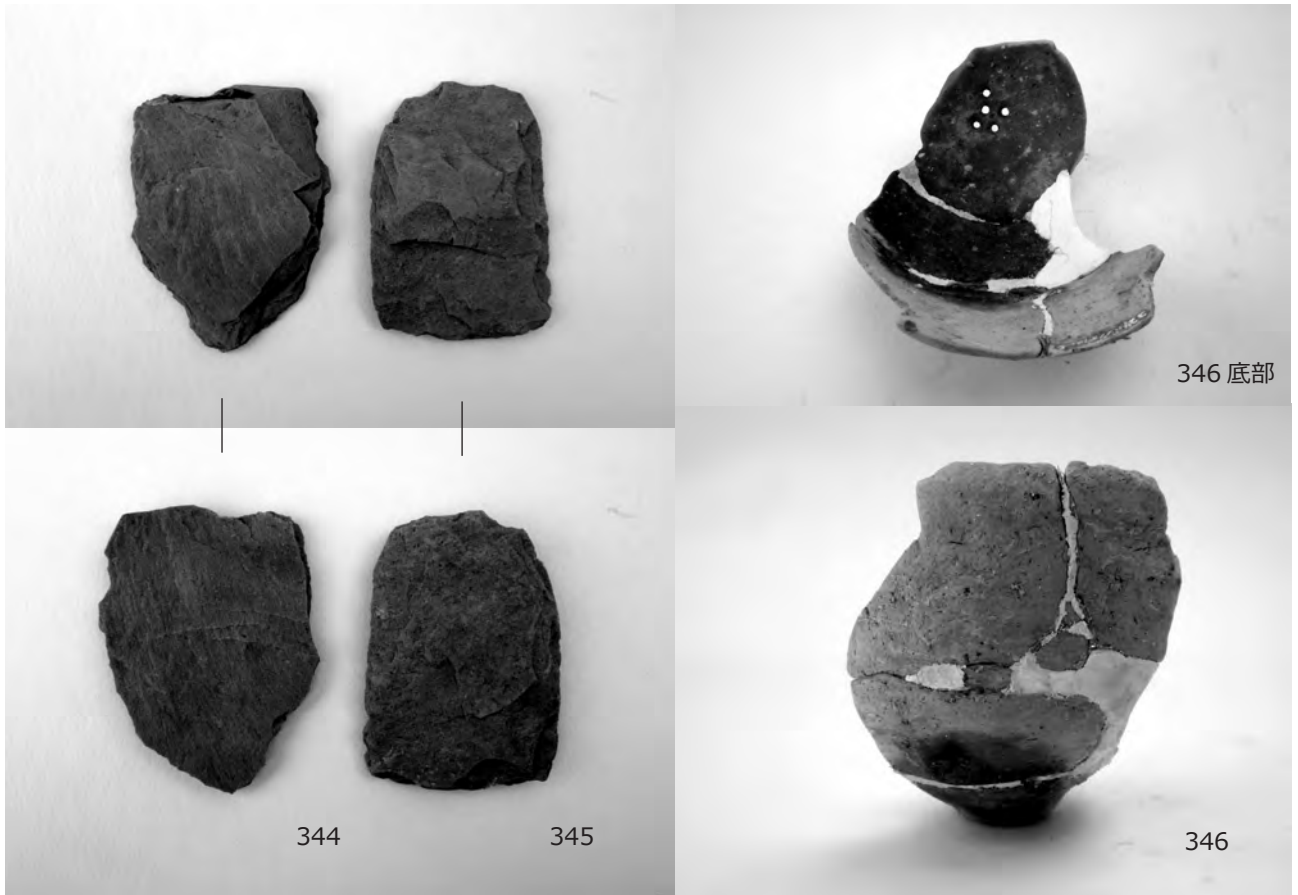


237 ヘラ記号









第6・7次発掘調査区全景（北西から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ばんじょうざんいせき (だいろく・ななじ) はっくつちようさほうこくしょ							
書 名	磐城山遺跡 (第 6・7 次) 発掘調査報告書							
副 書 名	農地改良工事に伴う緊急発掘調査							
編著者名	田部 剛士							
編集機関	鈴鹿市 文化振興部 考古博物館							
所 在 地	〒 513-0013 三重県鈴鹿市国分町 224 番地 TEL 059 (374) 1994							
発行年月日	2015 年 12 月 31 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
磐城山遺跡 (第 6 次)	鈴鹿市 木田町字上條 2263,2264,2273	24207	16	34° 54′ 05″	136° 34′ 17″	2013 年 8 月 5 日 ～ 2014 年 3 月 25 日	325 m ²	緊急発掘調査
磐城山遺跡 (第 7 次)	鈴鹿市 木田町字上條 2263,2264,2273, 2274,2275					2014 年 4 月 2 日 ～ 2014 年 8 月 22 日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
磐城山遺跡 (第 6 次)	集落跡	弥生・ 古墳	竪穴住居・溝・ 土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器・ 山茶碗・石器・鉄器・石製品・ 土製品		主に弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居を多数検出した。この他、区画溝らしき古代の直線的な溝の延長も確認した。		
磐城山遺跡 (第 7 次)								
要 約	弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居が多数検出された。正確な棟数は不詳だが、少なくとも 74 棟以上が著しく重複している。この他は、竪穴住居から続く排水用の溝や、中世の区画溝等も確認されている。特筆されるのは、磐城山遺跡の中でも最古となる可能性のある竪穴住居が確認され、遺跡形成の初源期の様子が判明しつつある。また、7 世紀後半から 8 世紀後半頃の直線的な溝が少なくとも 61 m 以上検出され、今回の調査区の西側に 60 m 程度の区画が広がっている可能性が高まってきた。							

磐城山遺跡（第6・7次）発掘調査報告書

発行日 平成27（2015）年12月31日
編集・発行 鈴鹿市
鈴鹿市考古博物館
〒513-0013
三重県鈴鹿市国分町224番地
TEL 059（374）1994
FAX 059（374）0986
E-mail: kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp
URL: <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>
印刷 株式会社 三ツ星

Excavation Report
Suzuka City, Mie Pref., Japan

Banjyozan Site (6th·7th)

December, 2015

Suzuka Municipal Museum of Archaeology